

日本語間接関与構文の語用論的研究

中央大学大学院文学研究科
施 葉飛 (シ ヨウヒ)

<目次>

本論文の表記法	5
序章 はじめに	6
1. 研究対象	7
2. 研究目的	10
3. 本論文の構成及び各章の概要	11
第1章 間接関与構文の問題点	13
1. はじめに	14
2. 間接関与構文に関わる基本概念及び問題点	14
2.1. 間接関与構文のヴォイス性	14
2.2. 間接関与構文の統語論的特徴	18
2.3. 間接関与構文の意味・機能的特徴	20
2.3.1. 抽象化の過程について	20
2.3.2. 抽象化の結果について	25
3. 研究方法	27
4. 本章のまとめ	28
第2章 授受動詞構文の非対称性	29
1. はじめに	30
2. 非意図的動詞事象構文化の非対称性	31
3. 考察	35
3.1. 問題Ⅰについて	37
3.2. 問題Ⅱについて	40
4. 中国語の授受構文との比較	43
5. 本章のまとめ	45
第3章 心理的移動構文の非対称性	46
1. はじめに	47
2. 移動構文	48
3. 心理的移動構文の非対称性Ⅰ：テイク形式の欠如	50
3.1. 考察	51
3.2. まとめ	57
4. 心理的移動構文の非対称性Ⅱ：非意図的用法の欠如	57
4.1. 心理的移動構文の受影意味標示機能	57
4.2. 前接動詞の制限	59
4.3. まとめ	61
5. 本章のまとめ	62
第4章 間接受身構文の語用論的考察	63

1. はじめに.....	64
2. 間接受身構文の位置付け及び問題点.....	64
2.1. 間接受身構文の位置づけ.....	64
2.2. 間接受身構文の問題点.....	66
3. 用例調査.....	67
3.1. 間接受身構文の述語動詞.....	68
3.2. 間接受身構文の参与者.....	69
3.2.1. 参与者の有生性.....	69
3.2.2. 参与者の人称傾向.....	70
3.2.3. 動作主の格標示.....	72
3.3. 間接受身構文の復文傾向.....	74
4. 間接受身構文の成立.....	77
4.1. 間接的な事態の把握について.....	78
4.2. 日本語における間接受身構文の発達.....	79
5. 本章のまとめ.....	82
第5章 日本語間接関与構文の諸相及び成立原理.....	83
1. はじめに.....	84
2. 間接関与構文の諸特徴.....	85
2.1. 構文的特徴.....	85
2.1.1. 非意図的動詞事象の構文化.....	85
2.1.2. 受け手の有生性傾向.....	87
2.1.3. 待遇形式.....	88
2.1.4. 極性.....	88
2.1.5. 結果事象の焦点化.....	89
2.1.6. まとめ.....	91
2.2. 意味・機能、文体的特徴.....	91
2.2.1. 「情意表出型」と「演述型」.....	91
2.2.2. 利益と被害.....	92
2.2.3. 受け手側視点維持機能.....	93
2.2.4. 文体の特徴.....	94
2.3. まとめ.....	94
3. 間接関与構文の成立原理.....	94
3.1. 「方向性」による構文の非対称性.....	94
3.2. 「主観的把握」と「私的領域」.....	96
4. 本章のまとめ.....	97
第6章 日本語間接関与構文のモダリティ性.....	99
1. はじめに.....	100
2. 「利益」と「被害」について.....	100
2.1. テクレルの「利益」.....	100
2.2. テクルの「被害」.....	101
2.3. レル・ラレルの「被害」.....	101
2.4. 「利益」や「被害」の発生.....	102
3. 間接関与構文のモダリティ性.....	107
3.1. 間接関与構文のモダリティ性.....	107
3.2. 間接関与構文のモダリティの位置づけ.....	110

4. 「利害性」の意味の表現方法の類型論的考察	113
5. 本章のまとめ	117
第7章 補助動詞の用法から見られた文法カテゴリーの連関	118
1. はじめに	119
2. 補助動詞の分類及び文法化	121
2.1. 補助動詞の体系的分類	121
2.2. 補助動詞の文法化	123
3. 補助動詞のモダリティ的用法	125
3.1. 「利害性のモダリティ」とヴォイス	125
3.2. 「利害性のモダリティ」とアスペクト	128
3.2.1. テシマウについて	128
3.2.2. テオクについて	130
3.3. ヴォイス経由のモダリティとアスペクト経由のモダリティの違い	133
3.4. 主観化制約	135
4. 本章のまとめ	136
第8章 おわりに	139
1. 問題点の確認	140
2. 各章の概要と問題点の回答	140
2.1. 各章の概要	140
2.2. 問題点の解釈	142
2.3. 本研究の意義	143
3. 今後の課題	143
3.1. 本研究の課題	143
3.2. 第二言語教育への展開	145
<参考文献>	146
初出一覧	152

本論文の表記法

1. 「○」
用例が文法的に正しい場合には普通如何なる印も施さないが、文法的に容認されない用例や不自然な用例と比較するために便宜上「○」をつけることがある。
2. 「*」
例文の文頭、または分析対象語句に付された「*」は、その表現が文法的に容認されないことを表す。
3. 「？」
該当用例が不自然であることを表す。
4. 「φ」、「×」
該当用法、または形式がないことを表す。
5. 「△」
該当用法、または形式が非常に限られていることを表す。
6. 「下線」
用例中、動詞述語や助動詞・補助動詞述語の部分には下線を引く。
7. 「□」
用例中、名詞句、あるいは格助詞を強調したい場合には□で囲む。
8. 「波線」
用例中、強調したい部分がある場合に波線を引く。
9. 「#」
同じく記号は上または左の内容と同一の場合の省略文字として使用する。
10. 「+/-」
ある意味素性の有無を示す。
11. 表及び図は各章ごとの通し番号で表示する。（例）図 1-1
12. 「≐」（ニアリーイコール）は、ほとんど等しい、ほぼ等しいというような意味合いで使用される。
13. その他の記号がある場合、その都度説明を行うことにする。

序章 はじめに

1. 研究対象

本研究では利益や被害に関わる助動詞・補助動詞 (Auxiliary verb) ——レル・ラレル、テクレル、テクルを使用する「間接関与構文」を対象として考察する。間接関与構文の成立や意味・機能を統一的な枠組みから説明することにより、助動詞・補助動詞の文法化制約を論じ、現代日本語文法の一般性と特殊性を論じる。

まず、「間接関与構文」の規定を確認しておく。本研究で「間接関与構文」とするものは、次の3つの特徴を共有する助動詞レル・ラレル、補助動詞¹テクレル、テクル形式である。

ヴォイス的側面

日本語の受身助動詞レル・ラレルや授受補助動詞テクレル、移動補助動詞テクルには多様な意味や用法がある。そのうち、一部の用法は、ヴォイス的な機能を実現させると指摘されている (レル・ラレルのヴォイス性は言うまでもないが、テクレルやテクルに関しては、松下 1930、宮地 1965、Shibatani 2003、山田 2004、古賀 2008、住田 2011 などの研究がある)。次の用例²の a 類と b 類を比較してみよう (話題性の比較的高い部分を網掛けにて表示する)。

- (1) a 娘が早起した。
b 早寝した娘に早起され、(私) いささか眠いです。
- (2) a 相手の選手が急に倒れた。
b 相手の選手が急に倒れてくれたおかげで、(私) 優勝することができた。
- (3) a 赤ちゃんが別々に泣いた。
b 赤ちゃんが別々に泣いてくる³ので、(私) なかなかつらさあるな。

(1) ~ (3) の述語動詞の部分に注目すると、a 類の文は動詞の基本形を使用しているのに対して、b 類の用例は二重下線で示しているように、動詞の派生形を使用している。自立性に程度差があるものの、このような対立は**形態的変化の対立⁴**、あるいは**派生的な対立**と見られる。また、もう一つの違いとして、a 類は動作主 (つまり、動詞事象を引き起こす側、ここでは〈娘〉、〈相手の選手〉、〈赤ちゃん〉) を中心に述べているが、b 類は、動詞事象を受ける側 (あくまでも便宜上の呼称であり、意味役割としての術語ではないことを断つ

¹ 本研究では、別の動詞の連用形に、接続助詞テを介して後続し、独立して用いられる時と異なった意味を表す動詞を補助動詞とする。この規定に当てはまるものとしては、「テイル」「テアル」「テオク」「テシマウ」「テイク」「テクル」「テアゲル (テヤル)」「テモラウ」「テクレル」「テミル」「テミセル」などがある。

² 本論文において、出典を明記していない用例は筆者の作例である。

³ この用例におけるテクルは、物理的移動やアスペクト用法ではないことに注意。

⁴ Givón (1971:413) から、「Today's morphology is yesterday's syntax。」(今日の形態論は昨日の統語論である。) という見方があるように、一部の助動詞・補助動詞は歴史的に見ると、統語的な結合であったが、次第に融合して、形態論的な領域に移行していくというプロセスが見られる。少なくとも、これらの用法においては、具体的な意味を持つテクレルやテクルが抽象的な意味を持つ形式へ変化したことが顕著にみられる。

ておく。)の「私」を話題性の高い部分にしている。このような対立は、**話題性の対立**⁵と見なすことができる。

上記の二つの対立は、広義的にヴォイス(態)範疇⁶(1bは受動態であり、2bと3bはそれぞれ受益態、逆行態とも呼ばれている)の対立と認められる。

統語論的側面

次に、動詞述語と名詞句の統語的關係に注目する。ここで、対応する基本文(ひとまず、「能動文」と呼ぶことにする)の有無を一つの指標とする。(4)(5)(6)の受身文、テクレル授受構文、テクル移動構文の使用例と、括弧内の対応する能動文と比較してみよう。

括弧内の能動文への変換から分かるように、以下のa⁷においては、〈私〉に対して、「を」格(対格)や「に」格(与格、目的格)などが取られ、「被動者」や「対象」の意味役割⁸が確認される。よって、名詞句と動詞述語「殴る」、「売る」、「投げる」との間には、統語的關係が成立するという。一方、bの用法に関しては、対応する能動文が非文になってしまうように、動作主〈娘〉、〈相手の選手〉、〈赤ちゃん〉が行う動詞事象「早起きする」、「倒れる」、「泣く」と〈私〉の間には、前記のような**統語的關係が一切成り立たない**。

(4) a 太郎に殴られた。

(太郎が私 を 殴った。)

b 早寝した娘に早起きされました。

(*早寝した娘が私 を/に 早起きしました。)

(5) a 田中は私に本を売ってくれた。

(田中は私 に 本を売った。)

b 相手の選手が急に倒れ⁹てくれた。

(*相手の選手が私 を/に/のために 倒れた。)

(6) a 相手は私にボールを投げてきた。

(相手は私にボール を 投げた。)

b 気づきづらいところの貼り紙のみのお知らせだと、お父さんはほぼ100%見落としてくるな。

⁵ なお、1bの場合は、動作主にほとんど話題性がなく、2bと3bは動作主が主語としてのステータスを維持し、一定の話題性を保持していることに注意する必要がある。また、話題化の仕組みについても区別する必要がある。受身は動作を行う側と受ける側どちらの立場から描くかという視点から見る話題性であり、人称と関わらないことが多い。テクルとテクレルの場合は、動作を行う側と受ける側どちらの方が話し手にとって共感性が高いという視点から見る話題性であり、人称と強く関わる。

⁶ 文法範疇(文法カテゴリー)とは、語形変化による意味の変化を分類したものであり、主に、ヴォイス、アスペクト、テンス、モダリティなどがある。

⁷ 前記用例(1)～(3)の「a」や後記用例(7)～(9)の「a」と同種類とは限らない。

⁸ 動詞と名詞句の意味関係を分類したものである。例えば、動作主(先生が花子を褒めた)、対象・被動者(先生が花子を褒めた)、目的(学校に行く)、道具(スマホで調べる)、起点(東京から来る)などがある。

⁹ 本研究で用例として挙げられる「倒れる」は全て非意図的な動詞事象であることに注意。

(Twitter 2021.05.17)

(*気づきづらいところの貼り紙のみのお知らせだと、お父さんはほぼ100%私
を/に 見落とすな。)

統語的な関係が成立しないにもかかわらず、b類構文は、助動詞・補助動詞を介して、動詞事象を名詞句に関係づけることができ、後者に対する影響を表すことができる。

意味機能的側面

最後に、意味機能の側面に注目する。レル・ラレル、テクレル、テクルの主な用法を次のように提示する(用例の一部は森田 1968、澤田 2009などを参照したものである。なお、出典を明記していない用例は筆者の作例である。)

- (7) a 太郎に殴られた。
b 早寝した娘に早起きされました。
- (8) a 太郎が花子に花を贈ってくれた。(澤田 2009)
太郎が花子に花を摘んでくれた。(〃)
b 雨が降ってくれた。
この傷、明後日には治っていてくれないかな。
- (9) a 留守だったのでメモを残してきた。(順次性移動) (森田 1968)
明日その本を持ってくる。(並行性移動) (〃)
大西洋を泳いできた。(状態性移動) (〃)
出張から帰ってきた。(複合動作の移動) (〃)
b 相手側の方が、一方的に協定書を破棄してきた。(澤田 2009)
相手は甘い球を逃さず打ってきた。(〃)

a類とb類は、命題の具象性の違いからも分別できる。

a類の用法は、「物理的な事象の接近」を表すものである。これらの用法は、現実世界で物理的に感知、あるいは確認することができる点で共通している。例えば、移動構文¹⁰(9a)の場合は、物や人の接近(ここでは、話し手に向かうことを意味する。以下、同じ。)が表現されている。授受構文(8a)の場合は、物の接近や行為の接近、つまり、動作が対象に及ぶことが表現されている。受身文(7a)の場合は、行為の接近が表現されている。物、人、行為の接近はいずれも客観的な世界で真偽(いわば、客観的な真理値)が確認できる事象であり、話し手の認識・判断の「伝達」としての運用が可能である。

¹⁰ 移動構文には、空間性にとって変わる概念として、時間的なもの(アスペクト的用法)もあるが、紙幅の都合上、本論では扱わない。

a類と異なって、b類は「心理的な事象の接近」を表すものといえる。例えば、移動構文9bの用例では物や人の物理的な移動が実在せず、授受構文(8b)と受身文(7b)の用例でも、話し手に仕向ける行為が確認されない。b類は受け手と無関係な動作や事態を構文によって操作することで、「心理的な事象の接近」、具体的には受益や被害などの感情の「表出」という言表態度を表すものである。

以上三つの側面の特徴(つまり、ヴォイス的な機能を有し、名詞句と動詞述語との統語的な関係を要求せず、命題の具象性が高い¹¹⁾)を共有する複雑構文は、動詞の派生形によって、ある名詞句と格関係を持たない非意図的動詞事象を、当該名詞句に「無理矢理」に関与させることができ、受益や被害などの言表態度を表す。本研究ではこのような構文を間接関与構文と定義する。

2. 研究目的

日本語における上記のような構文は、他言語でほとんど報告されておらず、学習者の理解や自発的運用を困難にさせている。例えば、日本語母語話者が日常会話において多用しているのに対して、学習者の多くは、助動詞・補助動詞の使用を意識せずに、次のような表現を選択してしまう。

(10) 早寝した娘が早起きしたので、(私は)いささか眠いです。

(11) 相手の選手が急に倒れたおかげで、(私は)優勝することができた。

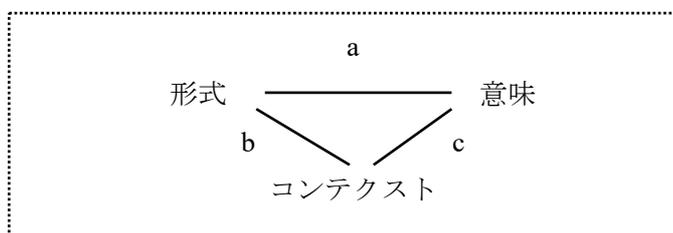
(12) 赤ちゃんが別々に泣くので、なかなかつらさあるな。

間接関与構文の使用は、話し手が事態に関わる参与者間の社会的、心理的関係性をどう捉えるかによって、表現を選択した結果である。一方、間接関与構文の不使用は、文法的な誤りではないが、文脈状況や伝達態度によっては不自然とされることがある。これは学習者が日本語の語用論的な規範を理解できず、母語の規範をそのまま適用することが主な原因である。ここで、語用論研究の内容を紹介しておく。柴谷(1989:388)によれば、

語用論(pragmatics)とは、言語形式、意味およびコンテキスト(文脈、筆者注)の三つの要素の関わり合いを対象とした分野である。図1(=【図0-1】、筆者注)のa線のように、文法論が言語形式と意味を関係づける機構の解明を研究対象としているのに対して、語用論はb線およびc線の関係を対象とし、文字どおり、具体的なコンテキストにおける言語の適切な用い方に焦点を当てた研究分野である。

¹¹ 同時に、語彙的意味内容である「物理的移動」などが希薄化、漂白化される。

【図 0-1】形式、意味、コンテキストの関わり合い



間接関与構文を含めた助動詞・補助動詞に関して、これまでの研究は、主に a 線のように、言語形式と意味の関連が対象とされている（久野 1983、益岡 1992、柴谷 1997 など）。第 1 節で記述した三つの特徴も、概ね a 線の研究対象に準ずるものである。

しかし、a 線の研究のみでは、助動詞・補助動詞全体における意味発達の違いや、いわゆる「文法化」のプロセスの問題を十全に解釈できない。構文が実際の発話の中でどのように使用されているのか、場と文脈には如何なる特徴があるのかを重視して、その成立機序を把握する研究、つまり b 線（例えば、場と文脈¹²がいかに言語形式に影響を与えるのか）や c 線（例えば、場と文脈がいかに受益や被害という慣習的な理解を可能にするのか）のような語用論的研究が不可欠である。これまでの数少ない語用論的な研究¹³は、個別の構文の中に限定されており、具体的な意味内容とコンテキストとの対応関係、つまり c 線に偏る傾向が見られる。そのため、より広い視野からの三要素（形式、意味、コンテキスト）の対応関係の統一的な説明がなされていない。

そこで、本研究では、会話の参加者の性質を重視する語用論的な観点を取り入れて、間接関与構文の成立や意味・機能特徴を統一的な枠組みから捉えることを目的とする。第一節で述べた三つの特徴が有機的に連結していることを論じることによって、助動詞・補助動詞の文法化条件を考察し、日本語の類型論的普遍性や個別性の一端を提示することを試みる。

3. 本論文の構成及び各章の概要

ここで、本論文の構成について述べておきたい。本論文は第 1 章から第 8 章まで、全 8 章の構成である。第 1 章では間接関与構文に関わる先行研究や基本概念を概観し、3 つの問題点を提示する。第 2 章から第 4 章にかけて、個別の間接関与構文を「間接的授受構文」、「間接的移動構文」、「間接受身構文」の順に記述する。第 5 章は、第 2 章から第 4 章の総括に当たり、間接関与構文の諸相を考察し、構文の成立や意味・機能特徴を統一的な枠組み

¹² 会話の参加者物理的、心理的、社会的位置と情報分布の状況を指す。

¹³ 待遇性の観点から授受構文について述べた宮地（1965）、山田（2004）や、方向性を持つ点で共通している授受構文、移動構文を取り上げ、「対人的機能（ポライトネスを動機付けとした、聞き手との関係の調整に関わる発話の機能）」という観点から意味論レベルで説明できない用法を説明している山本（2002）などがある。

から捉える。第6章では、間接関与構文のモダリティ性を論じる。第7章では間接関与構文の文法カテゴリーとの関連で、補助動詞の文法化をまとめて考える。第8章は本論文の全体のまとめである。具体的には、

第1章は導入である。先行研究を踏まえながら、本論文の研究目的に関わる「間接関与構文」の3つの側面の3つの問題点を提示し、研究方法及び調査方法を紹介する。

第2章では、テクレル間接関与構文について分析する。授受補助動詞の非意図的動詞接続に焦点を当てて、テクレル、テモラウとテヤルの違いを用例調査によって明らかにする。さらに、違いの原因を本動詞の意味特徴や、日本語の語用論的特徴から解釈する。

第3章では、テクル間接関与構文について分析する。移動系補助動詞の形式と意味の面において観察される二つの非対称性に注目して、いわゆる「心理的移動構文」テクルの発達を日本語の語用論的な特殊性から説明する。

第4章では、レル・ラレル間接関与構文、つまり間接受身構文について分析する。実例の調査・分析から、間接受身構文の成立に関わる諸特徴を考察する上で、従来構文・意味レベルでは十全に捉えられない問題点を語用論的な観点から説明する。

第5章は、第2章～第4章の総括に当たる。第2章で論じた周辺のテクレル授受構文、第3章で論じた周辺のテクル移動構文、そして第4章で論じた間接受身構文を「間接関与構文」と統一的に規定して、共通した諸特徴を確認する。その上で、「無関係な動詞事象の実現に対する話し手の把握」という統一的な枠組みから本構文の成立原理を分析する。この分析によって、問題点1～問題点2を解釈する。

第6章では、主に間接関与構文のモダリティ性を論じる。「利益」や「被害」の意味内容を再確認し、その発生背景を考察した上で、助動詞・補助動詞の利害性のモダリティ性を論じる。さらに中国語との対照から、いわゆる「利害性」の意味の表現方法について論じる。

第7章では、一つの補助動詞における複数の文法カテゴリーの連関を論じる。第6章で論じた間接関与構文テクレル、テクルのモダリティ性と、他の補助動詞テシマウ・テオクのモダリティ性との比較を通じて、日本語補助動詞の文法化に関わる二つの「主観化的制限」を指摘する。この分析によって、問題点3を解釈する。

最後の第8章では、本論文で述べたことをまとめ、間接関与構文に関わる3つの問題点の解釈を行う。さらに、今後の課題や展望について述べる。

第1章 間接関与構文の問題点

1. はじめに

この章では、現代日本語の「間接関与構文」を概観し、構文に関わる基本概念や問題点を提示する。具体的には、第2節において、序章で提示したテクレル、テクル、レル・ラレル間接関与構文の三つの側面に纏わる重要な概念及び枠組みを提示した上で、3つの問題点を指摘する。第3節において、本研究の研究方法及び調査方法を確認する。

2. 間接関与構文に関わる基本概念及び問題点

本節では、間接関与構文の三つの側面を考察する。関連概念を紹介した上で、3つの問題点を提示する。

2.1. 間接関与構文のヴォイス性

まず、間接関与構文の特徴 1-ヴォイス性に関わる研究を確認する。その前に、ヴォイスの定義を述べておく。ヴォイスとは、一般に、アスペクト、テンス、ムードなどと並んで取り上げられている動詞の文法カテゴリーである。研究者によって、様々な定義の仕方があるが、ここでは、意味構造の側面を重視する村木（1991）の定義を取り上げる。

ヴォイスというのは、何に視点をおいて表現するかという文の機能意味構造にもとづく統語論的な側面と、述語になる動詞がどのような形態をとるかという動詞の形態論的な側面の相互関係の体系である。（村木 1991：1）

以上に述べたヴォイスのカテゴリーを村木（1991）が挙げた以下のような典型的な能動文と受動文の対立によって確認しておこう。

- (13) a 猫が ねずみを 追いかけた （こと）
b ねずみが 猫に 追いかけられた （こと）

村木（1991）によれば、上の二つの文は、同じ事象を表しているという点で共通しているが、以下の三つの点で相違が認められる。

- ① **文の意味構造**：能動文である（13a）では、主語が動作の主体である「猫」であるのに対して、受動文である（13b）では主語が動作の客体である「ねずみ」である。すなわち、能動文の（13a）は、「おいかける」という動作が、そこ（＝猫）から起こる「猫」を中心に述べた文であり、受動文（13b）は、「おいかける」という動作がそこ（＝ねずみ）に及ぶ「ねずみ」を中心に述べた文である。能動文では、

動作がそこから発するものを中心に述べていて、…受動文では、動作がそこに及ぶものを中心に述べている。

- ② **名詞の統語形式**：能動文である(13a)では、動作主体が主格で客体が斜格(主格以外の格、ここでは対格)であらわされているのに対して、受動文である(10b)では動作の客体が主格で主体の方が斜格(ここでは与格)であらわされている。
- ③ **動詞の形態**：能動文である(13a)では、動詞の語形が「追いかけた」という基本形であるのに対して、受動文である(13b)ではそれが「追いかけられた」という派生形である。すなわち、受動文の動詞には、受動を特徴づける動詞性の接尾辞-ラレ-が存在するが、能動文の動詞には、このような-ラレ-が存在しない。

冒頭でも指摘したように、レル・ラレルやテクレル、テクル助動詞・補助動詞を使用する間接関与構文と基本(無標)文の対立は、①-文の意味構造(どの関与者¹⁴に話し手の視点と共感を寄せるかに基づいて対立している)や③-動詞の形態の点で見られるが、②-名詞の統語形式の交替(または、文法関係の変更)の点においては受身文にしか見られない。そのため、3形式を述語とする構文は典型的なヴォイスとは言えないが、本研究では意味の側面を重視して、広い意味でのヴォイス¹⁵と認めておく。

村木によれば、「日本語のヴォイスには、同一事象を異なった関与者から表現することによって対立する変形関係に基づくタイプのもの、ある事象を述べた文と別の関与者が加わり、その事象を述べた文との間に成り立つ派生関係に基づくもの」がある。変形関係に基づくタイプは(10)のような直接受身が典型的である。一方、本研究で論じられるヴォイスは基本文に比べて、「受け手」という別の関与者が加わったため、「派生関係に基づく」タイプと見られる。

さて、助動詞・補助動詞のヴォイス性に関して、これまでの研究の多くは、ある特定の個別形式、あるいは有対形式を対象としてきた。受身文に関する研究も、枚挙にいとまがない。テクレルのヴォイス性に関して、対立する形式テヤルやテモラウと同時に議論されるものが多々ある。テクルについては、近年〈逆行態〉という比較的新しい概念から取り上げられてきているため、ここで紹介しておく。

テクルの一部の用法(上記の3b、6b、9b)に関して、Shibatani(2003)をはじめ、古賀(2008)、澤田(2009)など一連の研究では「行為の方向づけ」用法に分類し、〈逆行態〉を表す文法的要素と分析しており、人称階層に依存した普遍的なヴォイス現象として位置付けている。澤田(2009:3-4)は次のようにまとめている。

¹⁴ 本研究の「参与者」に相当する。

¹⁵ 他方、山田(2004:23)は、テクレル、テヤルやとテイク・テクルは、補助動詞形式として他の動詞に選択的に付加される点から、述語を構成する文法的要素である文法カテゴリーとしての要件を備えていると考え、このような文法カテゴリーを「方向性」(話し手への求心的方向性・話し手からの遠心的方向性という対立)と呼ぶ。つまり、単に仕手側の立場・受け手側の立場という区分によるヴォイスのカテゴリーと区別している。

言語の普遍的傾向として、「一人称、二人称>三人称・近接>三人称・疎遠」という人稱階層（高位>低位）が認められる。人稱階層と他動性の相互作用が文の形を決定する言語がある。そこでは、高位の名詞項（動作主）から低位の名詞項（被動作主）に対して行為がなされる場合は「順行態」が選択され、逆に、低位の名詞項（動作主）から高位の名詞項「被動作主」に対して行為がなされる場合は「逆行態」が選択される。

典型的な言語の最たるものではないが、現代日本語にも下記の用例が示すように、「順行態」と「逆行態」の区別を積極的に明示する特徴が見られる。Shibatani (2003 : 274) からの用例 (14) を比較してみよう。（原文はローマ字表記）

- (14) a ケンが 花子に ボールを 投げた。 (順行、筆者注)
- b 僕は 花子に ボールを 投げた。 (順行、〃)
- c ?¹⁶ケンが 僕に ボールを 投げた。 (逆行、〃)
- d ケンが 僕に ボールを 投げて きた。 (逆行、〃)

(14a) (14b) は人稱的に高位の動作主「ケン」（本用例では話し手側寄りの主体と設定されている）、「僕」から人稱的に低位の被動作主「花子」（本用例では非話し手側寄りの主体と設定されている）に対しての行為、つまり「順行」的な行為を表すためには、テクルやテイクのような形式を用いる必要はなく、無標の形式が選択される。一方、人稱的に低位の動作主「ケン」から人稱的に高位の被動作主「僕」に対しての行為、つまり「逆行」的な行為を表す場合は、(14d) のようにテクルの有標の形式が選択され、(14c) のような無標形式は不自然になってしまう。

さらに、澤田 (2009 : 9) は〈行為の方向づけ〉を〈対象の移動〉、〈行為の方向性〉、〈間接受影〉の3パターン（それぞれ、下記用例 15~17 に示す）と下位区分し、テクルを「場所ダイクシス（直示）」から拡張された「心理的ダイクシス」、つまり「遠/近」の心理的距離に基づき事象を話し手に関係づけるダイクシスと位置付ける。

- (15) 対象の移動：友人が沖縄産の紅茶を送ってきたので驚いた。
- (16) 行為の方向性：彼は真剣なまなざしで怒ってきた。
- (17) 間接受影：相手側の方が、一方的に協定書を破棄してきた。

（以上、澤田 2009 より）

¹⁶ Shibatani (2003) では「*」と表記しているが、それはcの例文が「僕」の視点から見ると不自然なためであろう。一方、文学作品などのように、一人称の「僕」を三人称として、書き手が傍観して語る場合は適格な文にもなる。そのため、筆者は「?」とする。さらに、このc、dの対照例は心理的な影響性の差異を示さないことを断っておきたい。

本研究で取り上げるテクルの間接関与構文は、物理的移動の軌跡が確認されず、心的態度を伴う上記の (16) (17) の心理的移動用法に対応する。

以上、間接関与構文の特徴 1-ヴォイス性に関わる重要な概念を確認した。これまでの研究を振り返ると、以下の問題が挙げられる。

問題点 1 - ヴォイスとしての間接関与構文の使用実態に関する記述が不十分である。

間接関与構文について、これまで、文脈情報を提示せずに、動作を受ける側の人称制限¹⁷などを無視した不自然な作例に基づく研究（特に、間接受身構文の研究の多くは、「?山田は同僚に出張された。」、「?田中は娘にその青年と結婚された。」のような不自然な作例が認められる。）が多数挙げられ、構文の使用実態を忠実に反映できていない。

また、前接動詞（主動詞）の語彙的意味の制限、つまり、「V レル・ラレル」、「V テクレル」や「V テクル」の「V」に関して、具体的にどのような意味タイプの動詞類が入るのかという問題について、精密に記述されているとは言い難い。例えば、間接受身構文や本研究でいうテクレル間接関与構文の主動詞に関して、従来の研究では、意図性に関わる「能格性」¹⁸特徴に重点を置いて考察している。そのうち、影山（1996）は「被害受身には、非能格動詞と他動詞のみが現れ、非対格動詞は現れない。」という非能格性制約を立てている。また、テクルに関わる逆行態に関しても、古賀（2008：251）は、「主語として統語的に実現される逆行構文の動作者は、意図的に動詞事象を遂行する動作者でなければならない。」と述べ、前接動詞の意図・意志側面の意味的制限の存在を指摘している。一方、筆者による予備調査では、これらの制約に反する使用例が多数出現している。

以上の問題は、いずれも用例調査の不十分さによる。

¹⁷ 例えば、日本語感情形容詞文（心理的述語の一種、他にも「たい」「欲しい」などの助動詞がある）の直接形式の感情主体に、人称制限（すなわち、感情主は述語が断定形を取る平叙文では一人称に限られる）があることはよく知られている。

- (1) 僕はとても悲しい。
- (2) *花子はとても悲しい。

上記の用例では、一人称を感情主体とする直接形式 (1) が適格な文であるのに対して、三人称を感情主体とする直接形式 (2) が不適格な文になってしまう。

¹⁸ 非能格動詞と非対格動詞は Perlmutter & Postal (1978・1984) が提唱した「非対格性」という概念に基づいた自動詞の分類方法である。その詳細について、本研究では影山（1996）の和訳を参照した。非能格自動詞：a.意図のないし意志的な行為、b.生理的現象；非対格自動詞：a.形容詞ないしそれに相当する状態動詞、b.対象物を主語に取る動詞、c.存在ないし出現を表す動詞、d.五感に作用する非意図的な現象、e.アスペクト動詞、f.持続動詞。

2.2. 間接関与構文の統語論的特徴

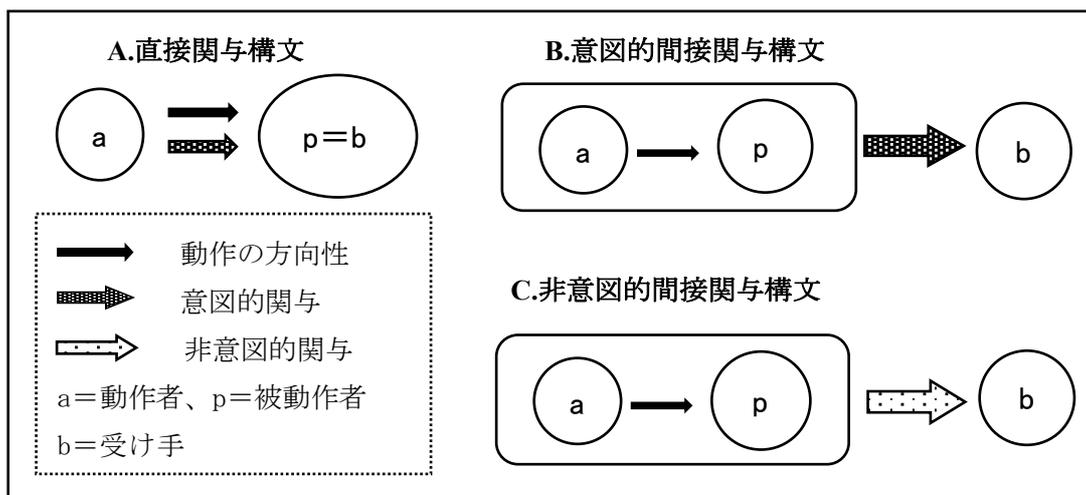
次に、間接関与構文の統語論的特徴に関わる基本概念及び問題点について確認する。統語論的特徴は、名詞句と動詞述語の間に存在する統語上の格関係と意味上の関連性の対応が議論の対象となっている。

まず、「間接関与」と「直接関与」について、山田（2000・2004）が日本語のベネファクティブ（受益）の方向性を論じる際に導入した（18a）と（19a）の構造的な分類を見てみよう。（18a）は、事態に含まれる動詞の項である「私」が受益者となっており、「売る」という行為の方向性とテクレルの表す利益の方向性とが一致している。これに対して（19a）は、「田中は走る」という行為自体はもう一人の参与者である「私」から独立して行われており、「田中」と「私」の間には何ら作用の方向性は存在しない。山田は、天野（1991）を参考に、（19a）のような事態の項が受益者となる場合を直接テクレル受益文、（19a）のような事態に含まれない参与者が受益者となる文を間接受益文と呼ぶことにした。

- (18) a 田中は私に本を売ってくれた。 b 田中は私に本を売った。
 (19) a 田中は私のために走ってくれた。 b 田中は走った。

本研究では両氏の構造的分類を参考に、前記の3形式を述語とする構文を〈直接関与／間接関与〉の枠組みに入れた。なお、両氏に比べて、動詞事象の意図性¹⁹の有無によって、より厳格な基準で「間接関与構文」の規定を行う。（19a）のような構文、つまり【図 1-1】で示したB類の意図的間接関与構文は、「のために」などのような受益者格が解釈され得るので、本研究で扱う純粋な間接関与構文（C類）と区別する必要がある。

【図 1-1】関与構文の構造的分類



¹⁹「意志性」という呼び方もある。ただし、本研究の関心の範囲では、基本的意味は同じであり、ここでは、意図性という用語を使用する。

間接関与構文に現れる主動詞述語は、自動詞と類似した性質を持っており、動作主の他動性や意図性²⁰を要求しないものが多く、もう一人の参与者「私」から独立して行われる事態を表す。

- (20) いわゆる白物家電には糸目をつけないことにしてるのおおお\ (^o^) / 。夏場とか壊れられたりしたら死んじゃうしーん

(Twitter 2019.08.11)

- (21) よくぞ保証期間中に壊れてくれた！ 一度人の手が入ると完璧なほど壊れなくなるので安心である。大した時計じゃないけど。

(Twitter 2020.11.28)

- (22) 個人大家さんと契約するような賃貸に住む奴は ATM には通帳定期的にいれて行こうな 大家さんも人間だから振り込んでいる行数を気軽に見落とすくるぞ。

(Twitter 2017.03.13)

(20) (21) はそれぞれ冷蔵庫、時計に関するツイートである。両者とも無情物であるため、受け手に働きかけよう、授与しようという意図の発動は、論理上考えられない。(22) の「振り込んでいる行数を見落とす」は、人間が行う行為であるが、動作主が何らかの動機で行ったわけではないため、非意図的動詞事象と解釈される。

非意図的（非対格的）動詞事象は通常、動作主を表す「主格」名詞以外に、他の名詞句と格の関係を持たないため、意味上の〈無関係〉につながる。ここで、次の問題が提起される。

問題点 2 - 間接関与構文の成立に関わる「無関係な事態の関与の統語的実現」の原理の説明がこれまでなされていない。

我々は、一般的に名詞句は動詞の意味役割を担うことによって、構文に対して意味的な貢献を果たしていると考えている。一方、3形式を述語とする間接関与構文は、助動詞・補助動詞を介して、統語的な関係が成り立たない（柴谷 1997 : 10 によれば、「構成的関連性」を持たない）動詞事象でも受け手に関係づけることができる。このようなことを可能にしているのは、どのようなメカニズムなのかを考える必要がある。

²⁰ 仁田 (1988) は、動詞の有している〈自己制御性〉（つまり、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質）といった意味的特性が関わっていると指摘し、「自己制御性を持った動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である」と分類している。本研究では概ね仁田 (1988) に従う。一方、次の二点が示すように、本研究では意志性をより狭義に解する。まず、考察の際には、単独な動詞の語彙的な意味よりも、文脈においての一つの動詞事象の意志性に注目する。次に、自己制御性以外にも、受け手に対して、動作主が結果を予想しながら動作を行ったか否かという側面（いわば、意図性、動機性）を一つの追加基準とする。

間接受身構文が文法的に成立し、被害(迷惑)の意味を創出することに対して、柴谷(1997: 9)は「意味統合」の原理を提唱して、このように説明している。

所与の構文において、関係するすべての指示機能を帯びる名詞句は何らかの意味的な貢献を果たすことによって適切に意味統合されなければならない。(=中略=)たとえ意味役割を負わない名詞句であっても、構文解釈において何らかの意味的な貢献を果たし、そのことによって意味統合が図られれば、その存在意義が確立され、文法的に認められるということである。

意味統合の原理は、間接関与構文全体の統語論的な成立要因を解釈する上で重要な概念である。しかし、もしこのいわゆる意味統合が無制限に図られるとしたら、あらゆる性質の名詞句が「間接的な心理作用を被った」主体として存在意義を確立することができてしまい、構文上の制限もなくなるはずである。実際、この予測に反して、本研究の調査から、間接関与構文の受け手名詞句には強い一人称側傾向があることが分かる。ここで、意味統合の具体的な条件をより精密に説明する必要がある。

2.3. 間接関与構文の意味・機能的特徴

現代日本語の間接関与構文は、中国語や英語などの他言語においてはほとんど観察されていないほか、歴史的にも後発的なものと見られる²¹。ここでは、間接関与構文の意味・機能に関わる基本概念及び問題について確認し、通時的な変化を反映する抽象化、または文法化を二つの側面から考察する。

2.3.1. 抽象化の過程について

まず、助動詞・補助動詞の意味の抽象化²²の過程について説明する。

日本語の助動詞・補助動詞は、実質的な意味を持つ本動詞に対して、物理的な意味が希薄化し、ヴォイス、アスペクトなどの文法的意味の標記に関係することが「文法化」や「主観化」の枠組み(益岡 1992、由井 1997、青木 2013・2019、三宅 2015、澤田 2009・2014、森 2010 など)で多く論じられている。

「文法化」とは、ある語彙や構造が文法的機能を果たすようになるプロセスであり、冒頭で記述した間接関与構文の特徴 3-意味の抽象化は、このようなプロセスによる意味・機能面での変化である。意味・機能の変化の原因に関しては、主に言語主体による認知やコミュ

²¹ テクル間接関与構文に相当する用法に関して、森(2010: 10)は「遅くとも17世紀前半には見える」と指摘している。テクル間接関与構文に相当する用法は、山田(2006)や森(2010)によると、明治期以降広がっていった。レル・ラレル間接関与構文に相当する用法は、山口(2018)の調査によると、近世前期以降に確認されている。

²² Desemanticization、これと似た概念で、意味の漂白化(semantic bleaching)が挙げられる。

ニケーション上のプロセス（とりわけ、「メタファーによる拡張」と「語用論的推論」²³による拡張というプロセスが広く受け入れられている。）が介在していると考えられている。また、これまでの研究で、文法化の際には一定の方向性を持つ意味の変化が観察されることも指摘されてきた。中でも、「主観化²⁴」の方向へと向かう傾向があることが、近年多く議論されてきている。

では、3形式を述語とする間接関与構文に関わる文法化の道筋（あるいは過程、原因）はどのように捉えるべきか。助動詞や補助動詞に関して、従来の研究のアプローチの方法は、大きく分けて、構文の「内的連関」²⁵から捉える観点と、「外的連関」から捉える観点という2つの流れがある。

まず、内的連関の観点からの研究を確認する。構文の内的連関というのは、一つの構文が表す意味の広がりの中にどのような秩序が認められるかを問題にするものである。益岡（1992：8）は例として、意味の拡張という概念から、移動構文テイクとテクルの「非継起型」（つまり、テイクやテクルの前接動詞が、移動を表す「行く」や「来る」以前に起こるタイプ。）各意味用法の連関を次の図式にまとめている。

- 意味 A（空間的離反・接近）：「ボールが転がって行った／来た。」
- 意味 B（継続・状態変化）：「物価が高騰していく／きた。」
- 意味 C（消失・出現）：「光が消えて行った。／問題が生じてきた。」
- 意味 D（行為の受領）：「家主は家賃を上げてきた。」

【図 1-2】非継起型テイク・テクル構文の文法化／意味変遷

本動詞→意味 A（空間的方向性）→意味 B（時間的方向性）
→意味 C→意味 D（心理的方向性）

内的連関の観点に相当する研究は他にも、テイクとテクルに関しては澤田（2009）、テクルとテヤル・テアゲルに関しては澤田（2014）などが挙げられる。本研究でいうテクル間

²³ 宮下 2006 によると、メタファーとは「異なった領域に属するものを、別の領域のものに見立てる認知プロセス」であり、語用論的推論とは、「あるコンテキストにおいてある形式が使われる際に生じてくる推意」が、しだいにその形式の意味として定着してゆく過程」である。

²⁴ 主観化の捉え方に関しては、Traugott と Langacker による、若干異なった二つの立場がある。宮下（2006：34）のまとめによれば、Traugott（1995）は「主観化を、命題に対する話し手の主観的態度が、次第に表現の意味に取り入れられてゆく語用論・意味論的なプロセスだ」と考えており、Langacker（1991、2000）の言う主観化は、「客観的に捉えられる事物や出来事の本来の意味が希薄化して、把握の背後にある概念主体の視点が次第に前景化するプロセス」と捉えられる。Langacker の主観化は、ある形式の意味にあらかじめ存在している認知主体の視点が浮かび上がる過程であるのに対し、Traugott の主観化は、ある形式に語用論的な過程を経て、それまでになかった主観的な意味が加わってゆく過程を指していると言える。

²⁵ 「内的連関」と「外的連関」は益岡（1992）による。

また、森（2010：12）は成立の時期や運用の類似性を主な根拠として、テクルの「行為の方向づけ」用法は授受補助動詞テクレルの用法の拡張を基盤として、構文的拡張がなされてきたと主張し、次のように述べている。

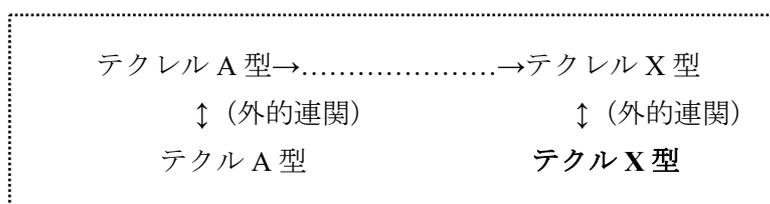
「-てくれる」が先行して、話し手へ向かう動作を特立して示す機能を担うようになったが、「対立型」の運用が進んだ事により、「-てくれる」と同様の制約を持っていた「来る」にも補助動詞「-てくる」の方向づけ用法が成立したと考えられる。

間接受身構文について、山口（2018）は、テモラウ構文と受身文レル・ラレルとの構造的類似性（格体制）や意味的対照性（利益／被害）を視野に入れて、受益専用形テモラウの発達を前提に、迷惑専用構文が確立していったという「類推」現象²⁷であると主張している。

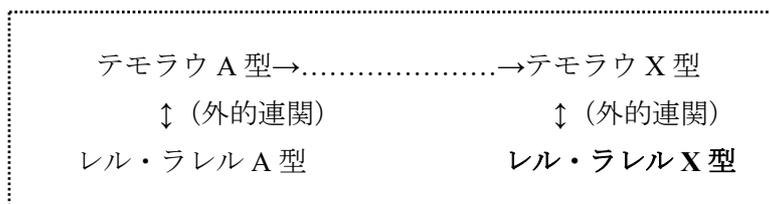
受益専用形テモラウが発達したことによって、それまで授益・被害に関わらず事態当事者間の広義の受影関係を表していた受身文が、受害構文として傾斜・確立していったことが十分に考え得る。また、この時に受益を表すテモラウの表現可能な領域と対照的な関係を成すように、受身文が受害を表す構文として前接動詞を拡大させたために、受身文においても新しい用法（迷惑型の間接受身構文、筆者注）が可能になった。

以上の分析はともに、意味・機能的な側面を出発点にして、文法化を捉えるものと言える。益岡（1992）の図式に倣ってまとめると、次のようになる。

【図 1-4】 テクル構文の文法化／意味変遷



【図 1-5】 レル・ラレル構文の文法化／意味変遷



²⁷ 現代語研究の見地から、テモラウ構文と受身文が関わり合って発達したという見方を示している研究には、村上（1986）や宮腰（2014）、當山（2015）などがある。

このような分析は、比較的文法化が進んでいるテクル X 型やレル・ラレル X 型と、より原始的な用法であるテクル A 型やレル・ラレル A 型との内的な関係の連続性が明確に確認されないことによる。

しかし、文法化を「内的連関」から捉えるにせよ、「外的連関」から捉えるにせよ、形式と意味の関連のみに注視する場合は次のような問題が生じてくる。

例えば、益岡 (1992 : 8) 自身も指摘しているように、テイク構文とテクル構文の間には、拡張の方向という面では平行性が認められるが、拡張の度合いという面では違いがある。

(23) (24) の a と b の比較から分かるように、【図 1-2】に示した拡張の先端領域に当たる意味 D の部分では、テクル構文だけが関与するのである。

- (23) a 相手チームはエースを立ててきた。(益岡 1992 より)
b * (相手チームに対して、) エースを立てていった。
- (24) a (自分の申込に関して、) 向こうが断って来る前にキャンセルした。
b * (あるオファーに関して、) 断っていく前にキャンセルされた。

このような「拡張の度合い」の非対称性は移動構文だけではなく、授受構文にも見られる。(25) のように、テクレルにおいて、非意図的動詞事象「不意に倒れる」を構文化することのできるのに対して、テヤルの非意図的動詞事象の形式がほとんど認められない。

- (25) a 相手の選手が急に倒れてくれたおかげで優勝することができた。
b * うちの選手が急に倒れてやったので、相手のチームが優勝した。

つまり、従来のアプローチでは、有対形式の文法化プロセス、あるいは助動詞・補助動詞群における文法化の度合いの差異を十全に解釈することができないと考えられる。

意味の抽象化は、助動詞・補助動詞文法化の一側面である。一方、なぜこれらの形式に文法化が起こりやすいのか、そして、助動詞・補助動詞形式内部における文法化の過程が均等に進んでいるのかなどのは、これまでほぼ不問とされており、体系的な説明が皆無²⁸である。

以上、意味・機能に関わる抽象化（文法化）の過程について、問題提起を行った。

²⁸ 益岡 (1992 : 8)、由井 (1996 : 21)、山本 (2007 : 73)、澤田 (2016 : 88) などは、テイクとテクルの非対称性を言及するに留まっている。また、澤田 (2014 : 44) はテクレルとテヤルの非対称性を指摘しているが、語用論的制約による文法化制約の研究は管見の限り、ほとんどなされていない。

2.3.2. 抽象化の結果について

次に、助動詞・補助動詞の意味の抽象化の結果に注目する。間接関与構文について、文法化の過程以外にも、意味・機能の側面では、以下のような点において、問題が挙げられる。

一つ目は、意味の内容となる「利益」と「被害」に関わる問題である。間接関与構文は、ほとんどの場合、テクレルは受け手に対する「利益」、レル・ラレルやテクルは「被害」の意味が義務づけられている²⁹。次の用例を見てみよう。

- (26) 2時間くらい前に冷凍庫に入れておくと程よく部分的に凍ってくれて、キンキンに冷えた感じがたまらない。

(Twitter 2018.08.31)

- (27) 明日冷えて凍られては、危険のこと考えて、玄関周辺の雪を排除してみました。ちょっと疲れる。

(Twitter 2016.01.30)

- (28) JR立川駅のみどりの窓口、したでに相談に行っても威張って、威張って平気で割引見落としてくるからマジ注意。詐欺だろ。

(Twitter 2013.04.22)

後続文脈からも見られるように、(26)の授受構文は、「たまらない」という望ましい事態、つまり利益の意味と関係し、(27)の受身文や(28)の移動構文は「マジ注意」「詐欺だろ」という望ましくない事態、つまり被害の意味と繋がる。

これまで、被害の意味に関する論議は、主に間接受身(被害受身、迷惑受身)の分野でなされている。そして、なぜ被害の意味が読み込まなければならないのかという問いに対して、久野(1983:205)は次のように論じている。

被害受身の意味「ニ」受身文深層構造の主文主語が、埋め込み文によって表される行為・心理状態にインヴォルヴ(関与、筆者注)されていればいる程、受身文は、中立受身として解釈し易く、そのインヴォルヴメントが少なければ少ない程、被害受身の解釈が強くなる。＝中略＝即ち、元々受身に出来ない筈の名詞句を受身の新主語にすると、それが、埋め込み文の動作、心理状態に直接インヴォルヴしたという解釈を動詞の意味以外の要素から補給してやる必要が生じ、被害受身の解釈が発生するという仮説である。(下線筆者)

²⁹ ここで、いわゆる「被害」や「利益」の意味は語彙からくる意味ではなく、構文からくるものである点や、これらの意味に反する周辺的な用法、つまり、利益を表さないテクレル用法(鈴木丹士郎1972など)や、被害を表さないレル・ラレルやテクルも存在することに注意する必要がある。

しかし、柴谷（1997）が指摘しているように、そもそもなぜ「意味補給」が必要なのかという原理的な問いを追究するには至っていない。柴谷（1997）は「意味統合」の原理を用いて次のように説明している。

意味統合を図る上で必要となる要件は、問題の要素が述語ベースによって言い表されている事象に対してある程度の関連性を表していなければならないということであった。問題の要素が直接的な物理的、心理的関与を有していない場合には、間接的な心理作用を蒙ったという意味補給がなされ、それによって確保された関連性はその要素の意味統合を保証するのだというのが我々の結論である。（柴谷 1997：18）

では、なぜ間接的な心理作用を蒙ることが「迷惑」を意味するのか。柴谷（1997）は Wierzbicka（1988）の観察を引用して、「ある事象に我々が直接的に関与しているかどうかということと、その事象による影響を肯定的なものとみるか、否定的なものとみるかということは関係があるようである。この関係は、意図的な行為とそうでない事象との観点から捉え直すことが可能であり、我々は意図的な行為は好ましい結果をもたらすために行うものと看做すのに対して、我々に関与することで、非意図的な事象は好ましくない結果につながると認識する傾向があるからだ」と分析している。また、この点に関して、金水（2004：54）からも次のような指摘がある、

Kinsui（1997）で、「（ら）れる」の意味は「脱意図性」とであると述べた。すなわち、主語の人物から見て、当該の行為が自分の意図からではなく行われることを述べる表現である。意図的な行為は主語の人物にとって通常望ましい結果をもたらすのであるから、これをあえて非意図的に描くということは、望ましくない出来事であったり、意外な出来事であったりすることを表すために用いられやすいことは十分想像できる。直接受け身での被害の意味は、文脈的効果に留まるのであり、そのような解釈が強制されるわけではない。間接受身は、文脈的意味を「（ら）れる」が取り込むことによって成立した表現であると見ることができる。（下線筆者）

上記の分析は、テクルやレル・ラレルの「被害」意味の説明に対して有効であるかもしれないが、ここで「テクレル間接関与構文も非意図的な事象を人に関与する構文であるのに、なぜ受益という好ましい結果につながるのか」という疑問が生じてくる。また、利益を表さないテクレル用法や、被害を表さないレル・ラレルやテクルが存在するという事実も決して無視してはならないだろう。

二つ目は、**モダリティ性に関わる問題である**。仁田（2009：19）によれば、「モダリティ」とは、「現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態一文の対象的な内容—に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方

を表した部分」である。本研究で取り上げる間接関与構文は、形式上、平叙文であるが、意図されている内容は常に感情表出的（具体的には、「利益」と「被害」）である。そのため、筆者は助動詞・補助動詞にモダリティ範疇の機能が形成されつつあると考える³⁰。2.1.の考察と合わせて考えると、間接関与構文には、ヴォイスとモダリティという異なった文法カテゴリーが一つの形式（助動詞や補助動詞）に同居している現象が見られる。

モダリティと他の文法カテゴリーとの関連について、風間（2011：33）は、ヴォイス、アスペクト、テンスなどの例をあげ、「一部のモダリティは、隣接する他の文法カテゴリーとさまざまな関わりを持ち、そして連続した面を持っている。」と指摘している。また、益岡（2013:208）も、文法カテゴリーは個々の独立性と相互の関係性という二面性を持っていると言及している。こうした研究を踏まえると、間接関与構文におけるヴォイスの意味とモダリティの意味の接点の問題が自然と提起されよう。

間接関与構文では、ヴォイスとモダリティという異なった文法カテゴリーが一つの形式に同居している現象が見られるが、両カテゴリーの連関を詳しく論じた研究は皆無である。この問題に対しては、「利益」や「被害」の意味・機能を起点にして、他言語における形式上の実現の仕方の差異を観察する類型論的な研究も期待される。

以上、特徴-3 **意味・機能**に関わる基本概念や研究概況を確認した。これまでの観察をまとめると、以下の問題が残されている。

問題点3－ 助動詞・補助動詞の「文法化」を引き起こす条件の説明が十分になされていない。「受益」と「被害」の意味の発生背景及び間接関与構文における異なった文法カテゴリーの接点を説明する必要がある。

3. 研究方法

第2節では、間接関与構文の成立に関わる3つの側面で3つの問題点を提示した。これらの問題点を解釈するために、本研究ではこれまでに構築されてきた文法理論に照らし合わせながら、質的分析と量的分析を相補的に組み合わせて、考察を行う。前者に関しては、母語話者による対照例の内省判断に頼り、後者に関しては本分野に不足していた各用法の用例調査・用例収集を行うことを中心とする。しかし、一部の用法は、周辺の且つ場面限定

³⁰ この点に関して、金水（2004）は、テ形接続助動詞の形式全般に関して、「個々の文脈を取り込んで、推論を導出し、その結果に対して動作主や話し手が「望ましい」「望ましくない」などと評価を与えるようなシステムである」という枠組みを示しているが、「述語語彙の論理的意味に収まらない意味のあり方を何であれ「モダリティ」という枠組みに放り込んでとりあえず処理してきた」という研究史の経緯を指摘しているが、本研究で扱う用法、いわゆる間接関与構文は極めて形式化が進んでいるため、広義的なモダリティと考えられよう。

的という性質があるゆえに、伝統的な書き言葉コーパスによるデータ収集は決して容易ではない。その場合は、Twitter の投稿から、用例を入手する。

Twitter とは、インターネット上で、不特定多数の人に向けて 140 字以内の文（ツイート）を発信したり、また他の人の投稿を読んだりすることができるソーシャルネットワークサービスのことである。インターネット上の投稿用例の妥当性³¹について、私的・即興的な表現や規範性に欠ける運用が多いため、安定性がなく、研究のデータとして有効性が低いこともしばしば指摘されているが、本研究では、生産性の高い、つまり、使用頻度の高い用法を扱うので、話し言葉の使用事実を忠実に反映する文法現象を捉えることが可能であると考えられる。また、伝統的なコーパスに比べて、リアルタイム性のある新規用法を記述することで、いわゆる文法化の方向性の一端を追うことも期待できる。

4. 本章のまとめ

以上、本章では、間接関与構文に関する先行研究を概観した。次の 3 つの問題点を提示して、本論文の研究方法及び調査方法を紹介した。

問題点 1 – ヴォイスとしての間接関与構文の使用実態に関する記述が不十分である。

問題点 2 – 間接関与構文の成立に関わる「無関係な事態の関与の統語的実現」の原理の説明がこれまでなされていない。

問題点 3 – 助動詞・補助動詞の「文法化」を引き起こす条件の説明が十分になされていない。「受益」と「被害」の意味の発生背景及び間接関与構文における異なった文法カテゴリーの接点を説明する必要がある。

問題点 1 と問題点 2 に対して、本研究では第 2 章から第 4 章にかけて、個別の間接関与構文を「間接的授受構文」、「間接的移動構文」、「間接受身構文」の順に考察し、第 5 章でまとめる。問題点 3 に対して、本研究では第 6 章で間接関与構文「受益」と「被害」の意味内容の発生背景やモダリティ性を論じる。第 7 章で間接関与構文の文法カテゴリーを取り上げ、補助動詞全体の文法化制限などを考える。

³¹ この点に関しては、田中（2003）、荻野綱男（2007）・（2017）、岡田（2013）・（2019）などに詳しい。

第2章 授受動詞構文の非対称性

1. はじめに

本章では、授受補助動詞に見られる間接関与構文について考察する。

現代日本語（共通語）の授受構文³²には以下のように、2つの特徴が挙げられる。中国語、英語などの言語には、見られない現象である。

特徴 1-授与（GIVE）動詞の語彙的分化

（テ）ヤルと（テ）クレルのように、話し手側から見る方向性（話し手側に向かうか、非話し手側に向かうか）によって、形式が分化される³³。（【表 2-1】）

【表 2-1】授与動詞の語彙的分化

	話し手側に向かう	非話し手側に向かう	語彙的分化
日本語	（テ）ヤル	（テ）クレル	分化
中国語	给 (gei) ³⁴	给 (gei)	未分化
英語	GIVE	GIVE	未分化

特徴 2-構文化する動詞事象の範囲が広い

物理的に存在する物に限らず、動作や恩恵などの抽象的な物の授受を構文化することが可能である。次の例（1）のように、現代日本語は「雨が止む」というような非意図的動詞事象まで、授受構文化することができる。

- (1) 雨が止んでくれたので、自転車で出発。

同一事象を中国語や英語で授受構文化することはできない。

しかし、日本語のみが授受構文化可能な抽象的な事象—非意図的動詞事象に関しても、方向性の違いによって差が見られる。それが（2）～（5）である。

- (2) 長い夜がとうとう、終わってくれた。
(3) 長い夜が、早く終わってもらいたい。
(cf. *長い夜が、早く終わってもらった。)
(4) *長い夜が、とうとう、終わってやった。
(5) *長い夜が、とうとう、終わってあげた。

³² 本動詞用法や敬語用法は本研究の考察から除外する。

³³ 大江（1975）、久野（1978）、寺村（1982）、山田（2004）など。

³⁴ 日本語の「与える」に相当する授与動詞。

(2) (3) のような求心型、つまり、話し手側に向かうテクレル、テモラウは構文化可能であるが、(4) (5) のような遠心型、つまり、話し手側から非話し手側に向かうテヤル、テアゲル構文は許容され難い。言い換えると、「長い夜が終わる」といったような非意図的な出来事に対して、話し手側に向かう求心型授受動詞の方が非話し手側に向かう遠心型授受動詞より構文化しやすいという非対称性が見受けられる。

本章では、このような非意図的動詞事象授受構文化の非対称性を中心に論じる。具体的には、第 2 節で授受範疇における非意図的動詞事象の構文化の差異を用例調査によって明らかにし、2 つの問題点を提示する。第 3 節で語用論的な観点からそれぞれの問題点を考察する。第 4 節で中国語との対照から前 2 節で述べた「授受構文における非意図的動詞事象接続の非対称性」から見られた日本語の特殊性を論じる。第 5 節でまとめを行う。

2. 非意図的動詞事象構文化の非対称性

本節では、まず「授受対象の抽象性」、「前接動詞の意図性」の基準によって、授受構文の構文パターンの分類を行う。現代日本語の授受補助動詞は話し手を原点として、求心型（テクレル、テモラウ）と遠心型（アゲル、テヤル）の対立が存在する。求心型とは話し手から内への方向性を持つ動作であり、遠心型とは話し手から外への方向性を持つ動作である。両種は補助動詞として、物理的な空間移動（A 類）以外に、行為などの抽象的な物の移動（B 類）を表すことも可能である。それぞれ（A1）～（A4）は物理的空間の移動を表し、（B1）～（B4）は社会的な空間の移動を表す。

A 類：物理的関与（物の移動+恩恵行為の移動）

- | | |
|---------------------------------------|-----------|
| (A1) テクレル：友人がプレゼントを <u>贈ってくれた</u> 。 | (物+行為 求心) |
| (A2) テモラウ：友人からプレゼントを <u>贈ってもらった</u> 。 | (物+行為 求心) |
| (A3) テヤル：友人にプレゼントを <u>贈ってやった</u> 。 | (物+行為 遠心) |
| (A4) テアゲル：友人にプレゼントを <u>贈ってあげた</u> 。 | (物+行為 遠心) |

B 類：社会的関与（恩恵行為の移動）

- | | |
|-----------------------------------|---------|
| (B1) テクレル：友人が娘を <u>褒めてくれた</u> 。 | (行為 求心) |
| (B2) テモラウ：友人から娘を <u>褒めてもらった</u> 。 | (行為 求心) |
| (B3) テヤル：友人を <u>褒めてやった</u> 。 | (行為 遠心) |
| (B4) テアゲル：友人を <u>褒めてあげた</u> 。 | (行為 遠心) |

A 類の物理的関与においてはいずれも移動対象（プレゼント）の物理的空間移動が確認できる。(A1) (A2) は話し手側「私」を指向する求心的用法であり、(A3) (A4) は非話

し手側「友人」を指向する遠心的用法である。B類の社会的関与は(B1)～(B4)は動作者による恩恵行為の移動が認められる。(B1)(B2)は話し手側(私)を指向する求心的用法であり、(B3)(B4)は非話し手側(友人)を指向する遠心的用法である。A類、B類はいずれも動作者が意図を持って行った行動であり、第三者からでも客観的な事象の移動として捉えることが可能であるが、山田(2000:100)は受益の方向性を論じるにあたって、(6a)と(7a)の用例を参照にして、二つの構造的な分類を導入した。

- (6) a 田中は私に本を売ってくれた。 b 田中は私に本を売った。
(7) a 田中は私のために走ってくれた。 b 田中は走った。

A類に相当する(6a)は、事態に含まれる動詞の項である「私」が受益者となっており、「売る」という行為の方向性とテクレルの表す利益の方向性とが一致する。これに対して、B類に相当する(7a)は、「田中が走る」という行為自体はもう一人の参与者である「私」から独立して行われており、「田中」と「私」の間には何ら作用の方向性は存在しない。山田(2000)は、(6a)のような事態の項が受益者となる場合を直接テクレル受益文、(7a)のような事態に含まれない参与者が受益者となる文を間接テクレル受益文と呼ぶ。

しかし、A類、B類以外にも、由井(1997)、澤田(2009)などから指摘されているように、一部の授受動詞には心理的関与を表す用法も存在する。この種の用法は、受益を表す「のために」を補っても成立しない。(C1)と(C2)を見てみよう。

C類：心理的関与（非意図的動詞事象の主観的関与）

- (C1) テクレル： 根付くかどうか心配していたけどこんなに綺麗に咲いてくれました。 (Yahoo!ブログ) (求心)
(C2) テモラウ： 梅雨時期でかなり泥汚れが目立ちますが、早く梅雨も明けてもらいたいものです。 (Yahoo!ブログ) (求心)

C類では、「花が私のために咲いた」、「梅雨が私のために明けた」の解釈が成り立たない。A、B類と違って、物や恩恵行為などの移動意味が背景化され、客観的な事象から話し手が関与された(ここでは、主に受益)という心理的な影響を表す授受動詞用法であり、非意図的動詞事象に後続するのが特徴である。本章では、最も抽象度の高いC類構文に注目して、授受動詞の持つ方向性の違いによる構文化の差異を検証する。

まず非意図的動詞について説明する。動詞の意志性に関して、仁田(1988)は以下のように定義している。

自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である。

本章では概ね仁田（1988）に従って、動作主の意志によって制御できない動作を表すものを非意図的動詞（=無意志動詞）と認定する。なお、非意図的動詞の選定方法に関しては、便宜上、意志性用法が想定されやすいもの（i, ii）を排除して、意志的用法を想定しがたい典型的な非意志的動詞（iii）のみを調査対象にした³⁵。

- i +意志性（他動詞、送る、褒める、教える、別れる、離れる など）
- ii ±意志性（知る、分かる、立つ、喜ぶ、暴れる、怒鳴る、負ける、好く など）
- iii -意志性（起こる、強まる、晴れる、咲く、落ちる、遅れる など）

現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT を用いて、授受動詞の前接動詞³⁶を調査した。対象の授受動詞は「テクレル」「テモラウ」「テヤル」「テアゲル」である。その結果、出現回数 ≥ 1 の非意図的動詞 109 語（代表的な動詞と語彙的近似性のある一部複合動詞を除く）を見出すことができた。各授受動詞の非意図的動詞接続の用例数を【表 2-2】にまとめた。

【表 2-2】授受補助動詞の非意図的動詞接続

方向性	授受動詞	異なり語数	のべ語数
求心型	テクレル	106 語	517 例
	テモラウ	28 語	67 例
遠心型	テヤル	10 語	14 例
	テアゲル	2 語	3 例

【表 2-2】を見ると、テクレル文が 106 語（517 例）と最も多く、テモラウ文が次いで 28 語（67 例）、テヤルとテアゲルがそれぞれ 10 語（14 例）、2 語（3 例）であったことが分かる。この調査から次の二つの結果が示される。

1 点目は、非意図的動詞接続は求心型授受動詞（テクレル、テモラウ）に多く観察されたのに対して、遠心型授受動詞（テヤル、テアゲル）ではごく僅かである。実際、テヤルとテアゲルの用例を詳しく観察すれば、(6)～(9)のような特殊用法が含まれており、実質的には 0 例に近い。例えば、以下の遠心型用例の「生まれる」、「売れる」、「消える」は特

³⁵ 主に可能形、命令形、願望形などの有無によって内省判断をする。

³⁶ サ変動詞や、「動詞連用形+デ」のパターンは対象外とする。

殊な場面において、非意図的動詞の意図的用法となる。(8) (10) (11) は非意図的動作を有意図化する表現であり、(9) は、受け手が存在しないため、授受関係が想定されない表現である。

非意図的動詞+テヤル

- (8) もしかしたら、この子の抵抗だったのかもしれないなあと思ったんです。絶対に生まれてやるっていうような。そう思うと、もう産むしかないような気になって...

(『今夜誰のとなりで眠る』 唯川恵 (著))

- (9) その際、何故か衣装はタキシードを着用することが多い。あまり「売れてやる!」というような意欲が感じられない二人組。

(Yahoo!ブログ)

非意図的動詞+テアゲル

- (10) これ以上くだらない言い合いをしなくてすむよう、君の前からきれいさっぱり消えてあげるよ。すべてがいいタイミングだ」

(『ロシア紅茶の謎』 有栖川有栖 (著))

- (11) 先進国は子供を買うのだろうか。子供は金を貰って、生まれてあげる。これが本当の資本主義だ。

(Yahoo!ブログ)

第2点目は、求心型と思われるテクレルとテモラウの差異の問題である。テモラウに比べてみれば、テクレルの動詞数 (106 対 28) や用例数 (517 対 67) が圧倒的に多いという事実が窺える。

上記二つの結果を踏まえて、次の二つの問題を提示したい。

問題Ⅰ-用例 (A1) ~ (A4)、(B1) ~ (B4) から示されるように、A、B 類の段階では求心型授受動詞用法があれば、ほぼ対応する遠心型授受動詞用法も存在する。しかし、抽象度の高い C 類においては求心型授受動詞用法に偏っている。このような非対称性の背景は、管見の限り、明らかにされていない。

問題Ⅱ-求心型授受動詞内部 (テクレルとテモラウ) の差異の背景、換言すれば、「テモラウ用法が抑制される」背景の究明も非意図的動詞の授受構文化の連続性を考えるにあたって、欠かせない重要な課題である。

次節では、この二つの問題取り上げて考察する。

3. 考察

非意図的動詞の授受動詞接続は、これまで多く論じられていない。また、「共起性に偏りがある」という現象に関する議論が行われていても、決して共起性の偏りにある背景(原因)が十全に説明されているとは言い難い。

授受動詞全般に関する論議ではないが、影山(1996:32)は「非能格性制約」を提唱し、「～にVしてもらう」構文は「非能格動詞(と他動詞)のみ現われ、非対格動詞は現われない。」と一般化している。これに対して、高見・久野(2002:303)は上記の制約に反する用例を多数列挙して、非対格動詞であっても「～にVしてもらう」構文に用いられる場合があると批判している。しかし、「～にVしてもらう」や「～がVしてくれる」構文に関して、高見・久野(2002)は「話せる」、「できる」、「聞こえる」、「見える」などの[恒常的状态]を表す動詞とは共起できないと述べている。

- (12) *スミスさんが、日本語が上手であってくれて、助かった。
- (13) *太郎が、中華料理が好きであってくれて、よかった。
- (14) ??このナイフはよく切れてくれて、助かる。
- (15) *家の近くに湖があってくれて、毎日散歩を楽しんでいる。

(以上、高見・久野 2002:300 より)

(12)～(15)の作例に関しては、筆者からすれば、すべて容認度の高い文であるが、両氏は、「授与動詞「くれる」は、「人がこちらに物を与える」という行為、変化を表すために、その補助動詞「～てくれる」も「～て」の埋め込み文の部分に、行為、変化を表す事象を要求する」として、「主語指示物が何も行わず、何の変化もしないで恒常的な状態にあることを示す事象は、この構文に現われない」と主張する。さらに、この制限に関して、高見・久野(2002:311)は「「～にVしてもらう」構文にもあてはまる。」と一般化した。それが(16)～(19)である

- (16) *スミスさんに日本語ができてもらって、助かった。
- (17) *太郎に中華料理が好きであってもらって、よかった。
- (18) *あなたに2.0の文字が見えてもらって、助かった。
- (19) *あなたにお金がたくさんあってもらって、嬉しい。

(以上、高見・久野 2002:311 より)

上記の記述に対して、澤田(2014)は、下記の(20)、(21)のように、「両授与動詞では状態動詞との共起性に差が見られる。」と指摘している。

(20) OK/?家のすぐ傍にコンビニがあってくれる(のが助かる)³⁷。

(21) *家のすぐ傍にコンビニがあってやる。

テクレルとテヤルの差異について、澤田(2014:44)は、クレルの特殊性(「くれる」は動作主を含む行為動詞でありながらも、「動作主の授益」ではなく、「話し手の受益」に焦点を当てた動詞である)が関係していると考え、

「くれる」は、動作主による授益に焦点を当てた授与動詞ではないために、動作主の存在を含意しない非行為的事象までも補文に取るB3型(筆者注:本研究のC類用法に相当する)にまで拡張し得たのだといえる。一方、「やる」は、動作主による授益に焦点を当てた動詞であるために、「てやる」へと文法化を遂げた後も、補部の事象は、恩恵を施す意図を有する動作主の存在を含意する行為的事象に制限され、B3型までは拡張し得なかった。

「動作主による授益に焦点を当てるか否かの違いに由来する」と説明している。

高見・久野(2002)の提起する「状態動詞との共起性制限」に関しては、本章の調査によると、用例(22)～(24)のように明らかに恒常的な状態に該当する事象でも求心型授受動詞テクレルやテモラウと共起するため、非意図的動詞授受構文の成立に関わる本質的な問題ではないと判断する。特に、(23)(24)は「ずっと」、「末長く」のような副詞と共起するので、一時的な状態ではないことが明らかである。

(22) ナショナリズム丸出しだったのは韓国チームだったでしょう?それとも、あれ?俺の記憶違いですかね?日本を背負って戦い、ヒーローであってくれた人へのコメントがこんなとは...あなたには本質が見えないようですね。残念だ。

(Twitter 2019.03.22)

(23) 付き合った当初はこんなに長く続くななんて微塵も思っていなかった。いまだに大好きで、そして大好きでい続けてもらうための努力をしています。駆け引きはおばあちゃんになっても続けます。ずっと好きでいてもらいたい³⁸から。

(Twitter 2019.12.18)

(24) みんなには末永く好きでいてもらいたいなあって思う。飽き性な人もいると思うけど、ずっとみていたいなあって思ってもらえるように頑張るゾゴ。

³⁷ 高見・久野(2002:306)は仮定法を用いることによって、この種のことを「変化する」[-恒常的状态]動詞とする。

a *家の近くに湖があってくれて、毎日散歩を楽しんでいる。(恒常的状态)

b 家の近くに湖があってくれたら、気持ちが落ち着くだろうなあー。

³⁸ 授受動詞には下線を付し、その他の注目する部分に破線を付した。

(Twitter 2019.04.14)

また、澤田 (2014) の「両授与動詞では状態動詞との共起性に差が見られる」という点については、前述の調査結果 (テクレル 106 語、テヤル 10 語) から検証されているため、本研究ではこれに従う。しかし、両授与動詞の差異の原因を「動作主による授益に焦点を当てるか否か」の違いに帰結することには疑問の余地がある。

なぜなら、澤田 (2014) の説明をまとめると、テクレル、テヤルにおける状態動詞との共起性の差異は、両授受動詞自身が「恩恵を施す意図を有する動作主」の存在を要求するか否かという構文的な制限に由来する。つまり、語彙意味上、ヤル動詞の焦点の所在は動作主による授益であるため、意図的な動作主を要求する。これに対して、クレル動詞の焦点の所在は動作主による授益ではなく、話し手の受益にあるため、動作主が背景化されていても文として成り立つという。仮にそうであれば、モラウ動詞の焦点の所在も動作主による授益ではないため、意図的動詞主体を要求せずに、クレル動詞と同様のレベルで非意図的動詞構文を産出するはずである。実際、本研究の調査からも示されたように、両者には大きな違いが存在する (動詞数 106 対 28、用例数 517 対 67)。澤田 (2014) の議論は、この点に関して妥当性を欠く。

本研究では、澤田 (2014) と異なり、構文レベルでは両授受動詞ともに非意図的動詞が表す事象との接続が認められるが、遠心型非意図的授受構文の産出が困難であるのは、語用論的な要因によって抑制されたからであると考えられる。つまり、「非意図的な事象=非関与的な事象を主観的に把握することが出来るのは、話し手側のみ」という制限が存在することが両授受動詞の差異の要因であると主張する。

以下、二つの問題を詳しく説明する。

3.1. 問題 I について

まず、問題 I -授受動詞の非意図的動詞が求心型に偏る現象について考察する。その前に、改めて「直示 (ダイクシス)」表現としての授受動詞の特徴を確認する。

直示とは、話し手・聞き手・発話時・発話場所などから構成される「発話場面」に依存して解釈が決まる言語表現 (ほかにも、人称代名詞、指示語などに関わる) であり、澤田 (2011: 165) は次のように説明している。

例えば、「私」、「昨日」、「ここ」、「来る」といった表現は、それぞれ、「話し手」、「発話時を含む日の前日」、「発話場所/話し手の近接空間」、「話し手領域への移動」といった意味を表すダイクシス表現であり、これらの意味を記述するためには、発話場面の要素 (話し手、発話時、発話場所) に言及しなければならない。この意味で、ダイクシス表現は、発話場面の要素を語義の中に取り込んだ表現とみることができる。

本章の冒頭で挙げた授与（GIVE）動詞の語彙的分化は、現代日本語授受動詞の直示性を反映する。分化の背景について、日本語が通時的に話し手領域への移動か、話し手以外の領域への移動かを区別しないことが可能な運用法「融合型」³⁹から、両者への移動を厳密に区別する運用法「対立型」へ変化した（近藤 1986、田窪 1990、森 2010、澤田 2011 など）という説が有力であるが、ここでは詳しい考察は割愛する。

さて、現代日本語の話し手側と非話し手側の区分化（形式上は、授与動詞「やる」、「くれる」；移動動詞「来る」、「行く」の分化のようにも反映される）は授受動詞の統語論的特徴（ここでは非意図的動詞事象の構文化に注目する）にどのような影響を与えるのかを見てみよう。

我々は、ある動詞事象を会話の参与者へ関係づけるためには、通常統語的な格関係が必要であると考えている。次の作例が非文になるように、非意図的動詞事象は一項動詞が代表的であり、主格しか取られないため、動作主以外の参与者へ直接に関係づけられないと考えられる。

(25) 雨が私*を/*に/*に対して/*…降る。

一方、これまで考察してきたように、現代日本語は授受系の補助動詞を用いて、一つの独立した動詞事象を動作主以外の参加者に間接的に関係づけることが可能である⁴⁰。

(26) 雨が降ってくれる。（この用例では、動詞事象の関係づけ先が話し手である。）

このような構文を成立させるためには、意味的な関連問題をクリアしなければならない、つまり、独立した動詞事象によって、受け手が何らかの影響を受けるなどという意味解釈がされなければならない。ここで、話し手側と非話し手側を積極的に区分することが重要な意味を持つ。なぜなら、このような区分化に伴い、話し手側と非話し手側との対等的な関係が崩れ、話し手側が事態の捉え方において極めて優勢となったことで、話し手を参照点にする

39 これは正保（1981：68）が日本語の指示詞を説明する時に使われた概念であり、「話し手が心理的に聞き手を自分に身近な存在としてとらえるような場合」にあてはまる。これとは別に、対立型とは「話し手が聞き手を心理的に疎遠な存在とみなすような場合」である。田窪（1990）はさらに、日本語ダイクシスの運用の歴史的变化を取り上げ、ダイクシスの運用法には“融合法”と“対立法”（話し手領域と非話し手領域を厳密に区別する）の二種が存在すると提示している。

40 柴谷（1997）は間接受け身の迷惑性を論じる際に、日本語の特殊性を次のように指摘した。「間接的な影響を蒙るという関連性だけで問題となっている意味統合が可能であるかどうかは、言語によって異なっていて、この点が日本語と朝鮮語・中国語との間の迷惑受け身をめぐるとの重要な相違点になっている。これらの言語では近接性に裏付けされた関連性の度合が高くなければ、意味統合がしにくいのだと考えられ、近接性が弱くても何らかの影響を受けたという関連性だけで意味統合が可能な日本語との間に顕著な違いを見ることができる。」現代日本語が「近接性が弱くても何らかの影響を受けたという関連性だけで意味統合が可能」の原因は本研究で論じられたこの性質に関わると考えられる。

という「話し手中心」の視点構図⁴¹が形成され、話し手側が無関係な動詞事象でも主観的（自由に）に把握することが可能になっている。

しかし、ここでいう主観的な把握には、制限があるという。つまり、動詞事象が話し手側（つまり把握者側）へ関与する場合に限られている。なぜなら、まず、益岡（1997：30）が内的状態述語の人称制限について論じる際に提唱した「私的領域」に関わる語用論的な原則を見てみよう。

- (27) 私的領域に属する事態の真偽を断定する権利は、当該の人物に専属する。したがって、他者の私的領域に属する事態の真偽を断定することによってその人物の権利を侵害することは回避されるべきである。

この時、求心型構文は話し手側への関与、つまり私的領域に属する事態を表わすため、問題なく構文化することができる。一方、非話し手側への関与を表わす遠心型の構文は、具体物や第三者から見ても関係性があると認められるような客観的な事象でない限り、非話し手側（つまり、他者の私的領域）の心情を話し手が主観的（勝手に）に把握することになってしまう。これは、(27)の語用論的な規則を違反するため、会話の場では基本的に排除される。

遠心型のテヤルが上述した A、B 類用法に止まり、抽象的な C 類用法までに発達していないのは上記の理由による。実際、このようなメカニズムは日本語の感情や心理を表す内的状態述語と類似している。

- (28) 長い夜がとうとう、終わってくれた。
(28) ' *長い夜が、とうとう、終わってやった。
(29) 私は寂しい。
(29) ' *太郎は寂しい。

上記のように、「長い夜が終わった」という独立した事象（「夜」という無情物主体が会話の参加者の誰かに利益を与えるために「終わる」という解釈は成り立たない。）について、(28)の場合はこの出来事の結果から、話し手側が何らかの影響を受けたという心情を語るため、(29)の内的状態述語のように、客観的な証拠性を要求せずに、本人の基準点から自由に語られる。これに対して、(28)'の「長い夜が終わった」という出来事を「非話し手側に何らかの影響をもたらした」とする表現は、会話の場において、非話し手側の心内領域を侵害する行為と判断されるため、(29)'の文と同じように適格性が落ちる。

⁴¹ つまり、認知主体が事態の中に入ってその事態を把握する構図という。Langacker (1985) の〈自己中心的視点配列〉、池上 (2011) の「主観的把握」、中村 (2004) の「Iモード」に対応する。

以上、問題Ⅰ-授受動詞の非意図的動詞が求心型に偏る現象を直示や語用論的な観点から解釈した。まとめると、話し手側と非話し手側を厳密に区別する現代日本語は、話し手の視点から事態を捉え、描写する性格が強い。この特徴により、出来事からの心理的な影響は話し手側に容易に言語化されるが、非話し手側には言語化され難い。ここで話し手側へ「関与させよう」という意味合いを実現させたのは、まさに話し手に接近することを表現する求心型テクレル、テモラウである。

3.2. 問題Ⅱについて

では、問題Ⅱ-「同じ求心型用法であるにも関わらず、非意図的動詞のテモラウ用法が制限されている」ことはなぜ生じるのだろうか。この問いを考えるにあたって、本節ではテモラウ用例から観察された二つの傾向に注目して、非意図的テモラウ構文が制限される理由を論じる。

テモラウの用例分析から、すべての実例は(30)～(33)のように、願望形(「たい」)や条件節(「なくてはなりません」)が代表的なパターンとなり、完了(実現)形用法が見当たらない事実が示されている。

- (30) 時代劇専門チャンネルを CATV で見ているのですがよくあれだけ悪人が出てくるのかと感心しながらも終盤しっかり解決されるストーリーだけに現実にもそのようなしっかりした人が現われてもらいたいものです。

(Yahoo!ブログ)

- (31) ハンバーガーショップ、子供たちは喜ぶでしょうが。私は、もっと他のものが出来てもらいたい～

(Yahoo!ブログ)

- (32) さきほどまでの、穏やかな印象が、豹変している。「あなたがたの組織は、一刻も早く潰れてもらわなくてはなりませんわね」

(『愛憎のメス』門田泰明(著))

- (33) フットボールチケットの売り方に対しては、正直、良い思いはしないし、消えてもらいたいと思う。すくなくとも、サポーターであれば、(特別な事情がない限り)定価で譲るものだとわたしは考えている。

(Yahoo!ブログ)

つまり、非意図的動詞のテモラウ用法は用例数が比較的少ないほか、アスペクト的にも抑制されることが分かる。また、非話し手側(動作主)格標示に目を向けてみると、ほとんどの非意図的テモラウ構文は上記の(30)～(33)のように、二格無標示となっており、二格標示の用例は67例中6例にすぎない。二格標示の6例はすべて有情物名詞句であり、この

結果は、堀口（1987）、山田（2004）などから指摘された（「テモラウは無情物が二格に来ない」という制限に合致する。以下、二格標示の用例を示す。

(34) 「うちやち、早いとこエンゾさんに治ってもろうて、また海に潜りにいきたいがよ」

（『桃色浄土』 坂東眞砂子（著））

(35) 彼はリボルバーを取り出した。「あんたには、消えてもらう」彼女は一步あとずさった。

（『遺産』 シドニィ・シェルダン（著）/木下望（訳））

(36) だって、彼らには早く売れて貰いたい！メジャーに行って貰いたいからね

（Yahoo!ブログ）

上述した2つの傾向、つまり、アスペクト制限と動作主格制限の理由について、本研究ではモラウ動詞の語彙的意味「働きかけ」性によると考える。

山田（1999・2004:121）は、テモラウ受益文の働きかけのあり方は、事態に対して作用を及ぼす意図と実際の積極的作用という観点から、「依頼的」、「許容的」、「単純受影的」と仮称できる3種類が認められると述べ、クレルと違って、モラウは話し手側を主語とし、働きかけも受影も表すと指摘している。これを受け、本研究では以下のように、クレルとモラウの語彙意味構造を簡略的に示す。

クレルの語彙意味構造：

- i. 非話し手側が行為を行う
- ii. 話し手側が影響を受ける。

モラウの語彙意味構造：

- i. 話し手側が働きかける
- ii. 非話し手側が行為を行う
- iii. 話し手側が影響を受ける。

いわゆる「依頼的」、「許容的」、「単純受影的」の3種類の違いについて、本研究では上記モラウの語彙意味構造における焦点の所在によって決まると考える。つまり、話し手側の働きかけに焦点を当てる場合は「依頼的」、非話し手側の行為に焦点を当てる場合は「許容的」、話し手側への影響に焦点を当てる場合は「単純受影的」テモラウ受益文とする。非意図的動詞テモラウ表現において、二格が抑制されたのは、焦点の所在に強く関わる。

動作主を二格で標示するテモラウ文では、働きかけに焦点が当てられ、話し手側の意図（依頼など）が積極的に主張される。依頼の行為は常に、意図性のある対象を要求するため、有情物動作主体が喚起され、意図性のない無情物が一般的に排除される。一方、非二格で標示されるテモラウ文の多くは話し手側の受影に重心が置かれる。話し手側の意図が捨象さ

れたため、動作主が有情物であれ、無情物であれ、求心型の影響であれば、ほぼすべての出来事を言語化することができる⁴²という。

非意図的動詞テモラウ表現におけるアスペクト的制限（つまり、実現形が抑制されることなど）も上記と同じ観点から説明できるだろう。以下、(37)～(38)の願望形用例と、(37)'～(38)の実現形用例を比較してみよう。

(37) 現実には、そのようなしっかりした人が現われてもらいたいものです。

(37)' *現実には、そのようなしっかりした人が現われてもらったものです。

(38) ハンバーガーショップにもっと他のものが出来てもらいたい。

(38)' *ハンバーガーショップにもっと他のものが出来てもらった。

願望形と完了形の場合、それぞれモラウ動詞意味構造（i. 話し手側が働きかける ii. 非話し手側が行為を行う iii. 話し手側が影響を受ける。）のどの部分に焦点を当てられるのかを確認しておこう。

願望形テモラウ（「たい」）

- i. 話し手側が働きかけたい ? （可能ではあるが、使役の願望を表す必要がない。）
- ii. 非話し手側が行為を行いたい × （「たい」は基本的に話し手の願望を表す。）
- iii. 話し手側が影響を受けたい ○

完了形テモラウ（「た」）

- i. 話し手側が働きかけた ○
- ii. 非話し手側が行為を行った ○
- iii. 話し手側が影響を受けた ○

願望形テモラウの場合、焦点を当てられるところは基本的に話し手側の受影のみである。純粋な求心的構造と解釈されるため、非意図的動詞への接続が可能である。一方、完了形テモラウ「た」の場合、焦点の所在は「話し手の働きかけ」「非話し手側の行為」「話し手側の影響」三つとも可能であるので、受影でない解釈も存在する。故に、非意図的動詞への接続が抑制されると考える。

⁴² モラウ動詞は荻野千砂子（2007）、山口（2017）から、「乞い求める」意味から「受け取る」意味へ、さらには「話し手側が受け取る」意味へと歴史的に変化していると指摘されている。本研究ではこのような変化を「焦点の移行」と称し、テモラウの非意図的動詞接続は、従来から存在していたものではなく、モラウ動詞の焦点の移行に伴って生じた後発的な現象であると考えられる。つまり、非意図的テモラウの成立には、「焦点の移行 → 単純受影可能 → 求心型 → 非意図的動詞接続可能」というプロセスが考えられる。

問題Ⅱに対して、ここまでの結論をまとめる。非意図的テモラウ用例数が比較的少ないのは、格標示やアスペクトなどの文法的制限が原因である。さらに極論すれば、モラウ動詞の語彙意味構造の特殊性（働き掛けと受影が併存する）に帰せられよう。

4. 中国語の授受構文との比較

前節では、非意図的動詞授受構文の非対称性の原因を考察した。本節ではこれまで論じてきた話し手側接近と非話し手側接近の構文化の非対称性が普遍的な現象か否かという問題を中国語との対照から考察する。

非意図的動詞事象の授受構文に関して、中国語でも似たような用例がある。次の(39)～(42)はBCC 漢語語料庫(BCC 中国語コーパス)⁴³から収集した「给(gei)」構文の用例である。それぞれ、非意図的動詞事象「生病〈病気になる〉」、「拉肚子〈下痢する〉」、「掉下〈落ちる／降りる〉」、「忘记〈忘れる〉」の授受構文である。

- (39) 哎呀！你可别给我生病、看大夫要花银子的。
〈直訳：おい、病気にならないでくれ、診断してもらうのもお金がかかるからね。〉
- (40) 两天没吃饭、一吃就给我拉肚子。（微博（ウェイボー）、以下 Weibo）
〈直訳：二日間ご飯食べていない、食べた途端に下痢してくれたとは。〉
- (41) 么哒麻利麻利哄、什么时候天上能给我掉下个这样的大宝贝儿啊。（Weibo）
〈直訳：オーン・マニ・パドメー・フーン、いつか空からこのような宝物が降りてくれるといいなあ。〉
- (42) 她别给我忘记所有台词！
〈直訳：（彼女が）セリフを忘れないでくれ！〉

上記の用例は、いずれも自称詞「私」を対象とする事態の関与である。

より求心型と遠心型の構文化の差異を知るために、本研究ではさらに「BCC 漢語語料庫」を使用して、典型的な非意図的動詞事象「下雨〈雨が降る〉」、「好起来〈治る・よくなる〉」、「掉链子〈ミスを起こす・失敗する〉」の授受構文の受け手の人称傾向を調査した。調査結果を【表 2-3】に示す。

⁴³ 北京語言大学が構築した多領域コーパスである。

【表 2-3】 中国語非意図的動詞授受構文の受け手人称分布

	受け手=一人称	受け手=二人称	受け手=三人称
雨が降る	给我下雨：70	给你下雨：0	给他下雨：0
治る・よくなる	给我好起来：55	给你好起来：0	给他好起来：0
失敗する	给我掉链子：16	给你掉链子：0	给他掉链子：0

【表 2-3】 から分かるように、自称詞「私」を受け手とする、つまり求心型に相当するタイプの用例が多数あるのに対して、対称詞「あなた」、「彼」を指向する遠心型のタイプの用例は全く観察されていない。これにより、やはり中国語も非意図的動詞事象を日本語の授受補助動詞に相当する成分「给 (gei)」によって、会話の参与者に関与させることが可能であることがわかり、また、日本語と同じように、求心型範疇の方に用法が集中していることが示唆される。

一方、上記の中国語の非意図的動詞用法はごく一部の授受構文に限定されているほか、文法形式の面でもかなり制限されている。本章で挙げている日本語の多くの用例は、そのまま中国語に訳すことができない。

- (43) 授受構文：相手の選手が急に倒れてくれた。
 (直訳：？对方向的选手给我们摔倒了。)

つまり、非意図的動詞事象の授受構文の発達に関して、両言語には大きな程度差が認められる。では、なぜこのような差異があるのか。筆者は、前節で指摘した視点構図の違いによると考える。

つまり、現代日本語において、非意図的動詞事象の授受構文が発達しているのは、話し手側自身を客体化せずに、その視点から物事を言語化する傾向があるからである。これに対して、話し手側と非話し手側をより対等に捉える中国語は、池上 (2011: 52) の示唆している「客観的把握」を好む言語であり、話し手側外部の事態をより中立的、客観的な視点からとらえようとする傾向がある。

- (44) 「客観的把握」：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする－実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に(自分の分身を含む)事態を把握する。

そのため、(43)のような構文は多くの場合、中国語では助動詞や補助動詞に相当するものを使用せず、(45)のように、事態の生起をそのまま述べる形となっている。

(45) 对方的选手突然摔倒了。〈相手の選手が急に倒れた。〉

以上、本節では第2章～第3章で述べてきた「授受構文における非意図的動詞事象接続の非対称性」の特殊性を中国語との対照から論じた。

5. 本章のまとめ

本章では、用例調査によって、「非意図的動詞事象を授受構文化すると、主に求心性の違いによって、用例分布の非対称（求心型＞遠心型、テクレル＞テモラウ）が生じることを明らかにした。さらに、求心型授受構文と遠心型授受構文の違いの原因について、本章では語用論的な観点（主に、日本語の視点構図や文脈構築の特徴）から二つの考察を行った。

2-I 求心型授受構文と遠心型授受構文の非対称性の背景について、本章では、とりわけ、授受動詞の分化に注目して、テクレル・テモラウの「求心的」意味と現代日本語の視点構図や会話モード（一人称中心、視点の固定化）との相互作用によって生じた現象であると考ええる。

2-II テクレルに比べて、テモラウの非意図的動詞接続が抑制される（具体的には、アスペクト制限、動作主格制限などが見られる）原因について、本章ではモラウの語彙的意味から出発した「働き掛け」と「受影」の併存性によるものと考ええる。

最後に、本章では、中国語との対照から、「非意図的動詞事象接続の非対称性」から見られた日本語の特殊性を強調した。非意図的動詞の授受動詞接続は、現象面でこれまで多く取り上げられてきておらず、主に構文論において論議が集中している。しかし、本章の用例調査からも示唆されているように、発話の場面を考慮に入れないと、いくら動詞特徴や格関係などから一般化しても、言語事実を十分に捉えることはできない。テクレル非意図的動詞接続の特徴は、方向性意味を持つ他の助動詞・補助動詞からも観察され、現代日本語「求心性を心理的に運用する視点が存在する」という特徴と連動する現象と考える。

第3章 心理的移動構文の非対称性

1. はじめに

本章では、テクル間接関与構文について考察する。

方向性の対立をなす現代日本語のテクル（て来る）、テイク（て行く）移動構文は、話し手を基準点としたウチとソトを区別するという視点の設定に関わっており、意味用法においても多様性が見られる。そのうち、特にテクル、テイクの空間的用法や時間的（アスペクト的）用法については、これまでの研究において多数取り上げられている（森田 1968、近藤 1985、今仁 1990、坂原 2012 など）。しかし、次の用例（1）（2）が示すように、日本語の移動構文は、空間や時間の移動以外に、話し手側の心的態度を表す特殊な用法も存在することが近年注目されており、その成立の機序が問われつつある（坂原 1995、古賀 2008、澤田 2009、森 2010、清水 2010 など）。本研究ではこのような用法を「心理的移動構文」と呼び、この用法に見られる二つの非対称性について論じる。まず、次の対照例を見てみよう。

- (1) 自分が否定されて、笑われて嫌なくせにお前は笑ってくるの？

(Twitter 2020.04.25)

- (2) 医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断ってくる。

(Twitter 2020.05.02)

- (1) a *人が否定されて、笑われて嫌なくせにお前は（人を）笑って行くの？

- (2) a *医師が PCR を必要と判断したのに保健所が（患者に）検査を断って行く。

- (1) b *人が否定されて、笑われて嫌なくせにお前は（人を）笑ってやるの？

- (2) b *医師が PCR を必要と判断したのに保健所が（患者に）検査を断ってやる。

- (3) ガストでトイレ入りたいのに 1 時間待っても出て来なかったから蹴っ飛ばしてやったわ！！

(Twitter 2020.05.02)

- (4) 休日出勤にフル残業してやるだけでも感謝してもらいたいののに更に 2 時間残業って言われたので断ってやった。

(Twitter 2020.08.28)

非対称性 I : (1) (2) と (1 a) (2 a) との対照から観察されるように、形式の面において、「心理的移動」構文は主に (1) (2) のテクルが使用されており、対応するテイクの使用 (1 a) (2 a) が不適格になる。

非対称性 II : (1) (2) と (1b) (2b) との対照から観察されるように、意味機能の面では、求心型、つまり話し手側へ向かう「心理的移動」テクル (1) (2) は前接動詞の意図性⁴⁴を問わずに表現可能なのに対して、遠心型、つまり話し手側から外への方向性を持つ「心

⁴⁴ 動作主体の自己制御性(動きの発生・過程・達成を自分の意志でもって制御できるか否かといった性質)

理的移動」の代替形式に相当するテヤルは (3) (4) のような意図的な動作に限られ、上記 (1b) (2b) のように、非意図的な動作としての解釈が文の不適合性に結びつく。換言すれば、(1) (2) では非意図的な動作からの心的影響が表現できるのに対して、(1b) (2b) では意図的な動作からの影響しか表現できないという非対称性が見られる。

上記二つの非対称性に着目して、本研究ではテクル心理的移動構文の統語特徴及び発達の背景を追究することを目的とする。具体的には、第3節で一つ目の非対称性を既存の「逆行態」理論から解釈し、求心型表現テクルの「話し手側受け手」視点標記機能を論じる。第4節で二つ目の非対称性を、現代日本語の視点構図と「主観的把握」の関係から分析する。第5節でまとめを行う。

2. 移動構文

現代日本語のテイク、テクル構文についてはこれまで様々な分析がなされてきている。その中でも主に注目されているのは、両構文の直示機能と意味用法に関わる問題である。前者に関しては、移動補助動詞は話し手を基準点として、「求心型」(テクル)と「遠心型」(テイク)の対立が存在することがかねてより指摘されている(久野 1978、寺村 1984、近藤 1985、今仁 1990 など参照)。後者に関しては、前接動詞との関係や空間、時間、心理の段階性に基づいて、様々な構文パターンの分類が行われている(森田 1968、近藤 1985、坂原 1995・2012、澤田 2009 など)。特に、空間を前提とした段階性の分類においては、空間的移動と時間的移動の2種類が多く取り上げられている。例えば、次の用例が示すように、テクルとテイクは補助動詞として、物理的な空間移動(A類)のほか、時間などの抽象的なものの移動(B類)を表すことも可能である。それぞれ(A1)～(A2)は物理的空間の移動を表し、(B1)～(B4)は時間軸における移動を表す。

A類：空間的移動(発話地点「ここ」を中心に、人や物の移動方向を捉える)

- A (1) 友達がその本を私のところに持って来た。
- A (2) (私は) その本を友人のところに持って行った。

B類：時間的移動(発話時間「今」を中心に、推移方向を捉える：継続、始動)

- B (1) 今まで、じっと耐えて暮らしてきた。(継続)
- B (2) 最近、だんだん痩せてきた。(始動)
- B (3) 今後は、どうやって暮らしていくの。(継続)
- B (4) 知らないうちに、顔が青ざめていった。(始動)

を意味する「意志性」と少し異なり、「意図性」とは、結果を予想しながら動作を行ったか否かという側面を重視する性質である。本研究では主に、動機性に関わる副詞「わざと」、「うっかり」、「思わず」との共起関係によって文脈から判断する。

空間的用法と時間的用法は、「テクル」「テイク」両構文において、ほぼ対照的に生起されている。両種類はいずれも、話し手以外の第三者（中立的な視点）からでも客観的な事象の移動、いわば「言表事態」として捉えることが可能である。一方、上記の A 類、B 類以外にも、森田 1968、張 1992、坂原 1995、古賀 2008、澤田 2009、森 2010、清水 2010 などからも指摘されているように、移動構文には心理的な影響を表す用法、いわば「心的態度」⁴⁵として捉えられる用法も存在する。次の C 類である。

C 類：心理的移動

C (1) 不況で、親会社が工賃を値切ってきた。

(坂原 1995 より)

C (2) 相手側の方が、一方的に協定書を破棄してきた。

(澤田 2009 より)

C (3) 医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断ってくるといいますが、保健所お断り事案に相応に covid19 の患者さんがいるくらい市中に蔓延している状況にないと、ちょっと過剰に検査を求めすぎているんじゃないかと思いません。

(Twitter 2020.05.02)

(C1) ~ (C3) では、話し手側への物理的な移動軌跡が確認されず、継続、始動などの時間的（アスペクト）的な意味も読み取れない。共通点として、非話し手側が行った動詞事象から話し手側が関与されたという主観的な心的態度を表す機能を持つことが特徴である。C 類に関して、Shibatani (2003)、古賀 (2008)、森 (2010)、清水 (2010) などは「行為の方向づけ」用法に分類し、テクルを「逆行態」（後述）を表す文法的要素と分析している。さらに、澤田 (2009: 9) は「行為の方向づけ」を「対象の移動」、「行為の方向性」、「間接受影」の 3 パターン（それぞれ、下記用例 5~7 に示す）へと下位区分し、テクルを「場所ダイクシス（直示）」から拡張された「心理的ダイクシス」、つまり「遠/近」の心理的距離に基づき事象を話し手に関係づけるダイクシスと位置付ける。

(5) 対象の移動：友人が沖縄産の紅茶を送ってきたので驚いた。

(6) 行為の方向性：彼は真剣なまなざしで怒ってきた。

(7) 間接受影：相手側の方が、一方的に協定書を破棄してきた。

(以上、澤田 2009 より)

⁴⁵ 本研究において「心的態度」型などの名称を採らないのは、「突然雨が降ってきた」のような始動用法と同時に心的態度の生起も伴う時間的移動型のテクルと区別したいためである。

本研究では、物理的移動の軌跡が確認されず、心的態度を伴う上記の(6)(7)のみを心理的移動用法として考察を進める。

3. 心理的移動構文の非対称性 I : テイク形式の欠如

2節に挙げたA類、B類の用例からも見られるように、テイクとテクルは基本的に、対称的な方向性を表すものとして、対(ペア)で扱われることが多い。しかし、移動構文がすべての意味用法において対称的な振る舞いをするわけではない。例えば、上記C類の心理的移動構文に関しては、主にテクル構文において使用され、テイク構文はほとんど産出されない。

- (8) 彼は真剣なまなざしで怒ってきた。
- (8) a *彼は真剣なまなざしで怒って行った。
- (9) 保健所が検査を断ってきた。
- (9) a * (うちの) 保健所が患者に対して検査を断って行った。

(8)(9)は、話し手側「私」が相手の行為「怒る」や「断る」を自分に関与させ、不利益を被ることを表現する文である。しかし、同様の関与はそれぞれの反対方向を表すテイク用法(8a)(9a)においては成り立たない。ツイッターの用例調査からは、次のような心理的移動構文に近似するテイクの新規用法(10)(11)(12)も僅かながら出ているが、時間的移動という解釈も可能であるほか、テクルの心理的用法に比べて生産性が低く、使用条件もより厳しいように思える。例えば、多数の用例が(10)(11)のように非完了相に現れる。

- (10) 性暴力にも、ヘイトにも、誰もが全力で怒っていく、そんな社会にしていきたい。それを目指さないでこの話をしても意味がない。
(Twitter 2019.03.06)
- (11) 帰るって時に雨がばちこり降っていく～
(Twitter 2020.05.28)
- (12) 採用してくれそうなところ自分から断っていった。
(Twitter 2018.05.17)

つまり、動作行為から話し手側が影響を受けることを表す求心型テクルは、遠心型のテイクに置き換えたとしても、同様の心理的移動用法を形成し難い。テクル、テイク構文の全ての意味用法をまとめると、求心型移動テクルが空間、時間、心理的用法において成立するのに反して、遠心型移動テイクはほぼ空間的用法と時間的用法に留まる。

ここで、なぜ心理的移動用法においてはテクルの形式しか発達していないのかという問題 I が提起される。

3.1. 考察

上記の問題に関して、本研究では従来の「逆行態」の理論を用いて説明する。これは、本章でいう心理的移動用法を「逆行構文」の下位用法とする立場からの解釈になる。まず、「逆行態」について説明しておく。Shibatani (2003) をはじめ、古賀 (2008)、澤田 (2009) など一連の研究では「逆行態」の現象を人称階層に依存した普遍的なヴォイス現象として位置付けている。澤田 (2009 : 3-4) は次のようにまとめる。

言語の普遍的傾向として、「一人称、二人称 > 三人称・近接 > 三人称・疎遠」という人称階層 (高位 > 低位) が認められる。人称階層と他動性の相互作用が文の形を決定する言語がある。そこでは、高位の名詞項 (動作主) から低位の名詞項 (被動作主) に対して行為がなされる場合は「順行態」が選択され、逆に、低位の名詞項 (動作主) から高位の名詞項「被動作主」に対して行為がなされる場合は「逆行態」が選択される。

典型的な言語の最たるものではないが、現代日本語にも下記の用例が示すように、「順行態」と「逆行態」⁴⁶の区別を積極的に明示する特徴が見られる。Shibatani (2003 : 274) からの用例 (13) を比較してみよう。(原文はローマ字表記)

- (13) a ケンが 花子に ボールを 投げた。(順行、筆者注)
- b 僕は 花子に ボールを 投げた。(順行、〃)
- c ?ケンが 僕に ボールを 投げた。(逆行、〃)
- d ケンが 僕に ボールを 投げて きた。(逆行、〃)

(13a) (13b) は人称的に高位の動作主「ケン」(用例においては話し手側寄りの主体と設定する)、「僕」から人称的に低位の被動作主「花子」(用例においては非話し手側寄りの主体と設定する) に対しての行為、つまり「順行」的な行為を表すためには、テクルやテイクのような形式を用いる必要はなく、無標の形式が選択される。一方、人称的に低位の動作主「ケン」から人称的に高位の被動作主「僕」に対しての行為、つまり「逆行」的な行為を表す場合は、(13d) のようにテクルの有標の形式が選択され、(13c) のような無標形式は不自然になってしまう。つまり、逆行構文においてはテクルの有標形式を使用するのに対して、順行構文ではテイクの形式ではなく、無標の形式を使用するのが普通である。⁴⁷

⁴⁶ 筆者は、このような区別は求心型と無標型の区別に近く、求心型、遠心型の違いとは別のものであると考える。

⁴⁷ 森 (2010) の歴史的な調査によると、このような有標化は近世以降の資料から初めて見られ、明治期になってから広がってきたという。また、山田 (2006 : 129) では、村上春樹の文章のような現代の文章に比

確かに、テクルによる「逆行態」の標示は、「友人が沖縄産の紅茶を送ってきた。」「ケンが僕にボールを投げってきた。」のような「対象の移動」類において義務性が高いように思える。しかし、「対象の移動」以外の用法の場合、例えば、次の(14c)のように、話し手「僕」の「受影」という評価的な意味を義務的に表現しなければ、特に順行態と異なった形式を取らなくても、不自然な文とならずにすんでしまう⁴⁸。

- (14) a (「そんなの無理だよ」って、) ケンが花子を笑った。(順行)
b (「そんなの無理だよ」って、) 僕は花子を笑った。(順行)
c (「そんなの無理だよ」って、) ケンが(僕を)笑った。(逆行)
d (「そんなの無理だよ」って、) ケンが(僕を)笑ってきた。(逆行)

さらに、(14c)と(14d)は「笑う」と言う行為は同様であるが、二文とも「受影」を表現する場合には、程度性の違いが生じる。つまり、(14c)より(14d)の方が「受影」の度合いが高く読み込まれる。なぜなら、補助動詞テクルを使用する後者の動作者の方が、より高い動作性を持つからである。これは、高い動作性と共起し易い副詞によって検証できる。次の(14f)の文がより適格になるのは、「ケン」の動作性が高いからである。

- e ?ケンがわざと僕を笑った。(逆行)
f ケンがわざと僕を笑ってきた。(逆行)

(13c)と(14c)とのテクル標示義務性の差異から、現代日本語における「逆行態」の標示は文法論的な現象というよりも、談話・語用論的な現象であると考えられる。無標示と対照的に、テクル標示は話し手側の受け手視点標示機能と受影標示機能を果たしている。前者の受け手視点の明示機能に関しては、次の対照例からも示唆される。なお、後者の受影明示機能については第4節にて説明する。

- (15) a 保健所が検査を断ったので、(我々は)自宅療養を余儀なくされた。
b 保健所が検査を断ったので、(保健所は)多くの批判を浴びた。
- (16) a 保健所が検査を断ってきたので、(我々は)自宅療養を余儀なくされた。
b ?保健所が検査を断ってきたので、(保健所は)多くの批判を浴びた。

べ、夏目漱石の文章では、求心的な動作に対して「てくる」が用いられることが少ないとの調査結果が出ている。澤田(2016)は山田(2006)、森(2010)の研究を踏まえ、明治時代における「行為の方向づけ」の「てくる」の標示による話者視点の明示化は多分に随意的であったと指摘している。

⁴⁸ この点に関して、久野(1978)からも、「行為が話者に向かう場合、話者の視点が目的語寄りであることを明示する「てくる」などの求心的直示形式の補強を必要とする動詞と、そのような補強を必要としない動詞とに分かれる。」との指摘がある。

上記の(15a) (15b)は、従属節(ここでは原因節)に補助動詞テクルが使用されていない。つまり無標であるために、視点の明示化がされておらず、「検査を断る」行為の主体「保健所」動作手視点と対象「我々」の受け手視点がいずれも候補として選択され得る。故に、主節の部分に、視点の所在が「我々」であっても、「保健所」であっても、従属節と一致させることができる。一方、(16a) (16b)の従属節では、補助動詞テクルによって視点の所在が「検査を断る」事象の受ける側、つまり「我々」に固定されている。視点の一貫性を好む⁴⁹日本語は、主節の視点主体を「保健所」へシフトさせる(16b)より、従属節と一致させる(16a)のほうが好まれるために、適格性が高いのである。

「行為の方向づけ」用法の内部、主に「対象の移動」用法とそれ以外の用法に存在するテクル標示義務性の違いは、心理的移動用法の発達の問題を考える上で重要である。本研究でいう心理的移動用法の由来に関しては、従来の研究ではテクルの基礎的な用法から拡張されてきたとされる論が主流である。例えば、澤田(2009)は、行為の方向づけの下位用法「対象の移動」、「行為の方向性」、「間接受影」を一連の拡張パターンと想定している。さらに、澤田(2016: 105-106)では次のように説明する。

「行為の方向づけ」用法において、対象移動型から受影型へと下位用法を広げてきており、求心的な行為に対する「てくる」等の有標形式による話者視点の明示化も強まってきた。

その他、森(2010: 12)は成立の時期や運用の類似性を主な根拠として、テクルの「行為の方向づけ」用法は授受補助動詞テクルの用法の拡張を基盤として、構文的拡張がなされてきたと主張し、次のように述べている。

「-てくれる」が先行して、話し手へ向かう動作を特立して示す機能を担うようになったが、「対立型」の運用が進んだ事により、「-てくれる」と同様の制約を持っていた「来る」にも補助動詞「-てくる」の方向づけ用法が成立したと考えられる。

澤田と森は共に、田窪(1990)の「ダイクシス運用法の歴史的変容」説、つまり、日本語は話し手領域への移動か、話し手以外の領域への移動かを区別しないことが可能な運用法「融合型」から、両者への移動を厳密に区別する運用法「対立型」へ変化したという説を継承して、テクルの「方向づけ」用法の発達を説明した。

『日本語歴史コーパス CHJ』を利用した本章の通時的調査によれば、近世までにはテクルの「方向づけ」用法が検出されないことは疑いようのない事実である。当然、「対立型」への変化がなければ、視点の表記機能を議論することも不可能になる。この点については、方

⁴⁹ 久野(1978)など参照。

向性を区別しないイクとクル両形式の敬語「いらっしゃる」などが心理的移動用法に馴染まないことも証左となる。

(17) *医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断っていらっしゃる。

一方、心理的移動テクルの具体的な発達過程に関しては検討の余地がある。なぜなら、仮に澤田 (2009)・(2016) のように、心理的移動テクルを空間移動から拡張してきた用法 (具体的には、空間的移動から心理的領域の移動へ) と解釈するならば、同様の拡張プロセスは他の用法、例えば、空間的移動から時間的移動、あるいはテクルの対立形式テイク (話し手以外の心理領域への侵入) などにも起こり得るはずであるが、実際、通時的に見れば、空間的移動と時間的移動の使用は古くから共存していて、拡張関係とは解釈しかねる。例えば、以下 (18) は空間的移動であり、(19) は時間的移動である。両用法は併存して用いられていた。

(18) ここにして家やもいづち白雲のたなびく山を越えて来にけり

(万葉集)

(19) 天の下知らしめしける天皇の天の日継と継ぎて来る君の御代御代隠さはぬ明き心を...

(万葉集)

さらに、後者の心理的移動テクルに関しては、テイクの形式がなく、主に、授与補助動詞テヤルを用いて、その対応する意味機能 (非話し手側への心理的影響) を司らせている。つまり、テクル内部の諸用法や対立用法を考察の射程にいれると、拡張のプロセスが通用しない部分が出て来る。

また、森 (2010) のテクレル用法の基盤 (話し手へ向かう動作を特立して示す機能を担う) から拡張されてきたとの考えは、前掲の行為の方向づけ型の下位用法の差異をうまく説明できない上に、類似した発達を持つ受身文などの位置づけに対しても解釈を与えることができない。なぜなら、現代日本語の受身文も話し手へ向かう動作を特立して示す傾向を有することが指摘されているからである。

(20) a 日本語：先生に呼ばれて、花子は学校へ行った。

〈中国語：？因为被老师叫、所以花子去了学校。〉

b 日本語：先生が呼んだので、花子は学校へ行った。

〈中国語：因为老师叫自己、所以花子去了学校。〉

c 日本語：先生が呼んで、花子は学校へ行った。

〈中国語：老师叫自己、所以花子去了学校。〉

(以上、日本語原文は下地 2004 より、対応する中国語表現は筆者による。)

(20) では受動態によって、話し手側の「花子」へ向かう動作を卓立させて、主文と同一視点を維持させる (20a) の用法が日本語として最も自然である。一方、視点の維持を別段要求しない言語、例えば中国語などは、(20b) (20c) のような表現をとる傾向がある⁵⁰。つまり、話し手へ向かう動作を特立して示す機能を担う表現は決してテクレルに限られず、日本語においてはより普遍的な現象であるという。

心理的移動用法の発達過程に関して、本研究では他の用法、または下位用法の発達を前提にして拡張されてきたのではなく、求心型視点の標示という談話・運用的動機⁵¹が確立されたことに従って、解放された (いわば、前接動詞に対する制限が少なくなった) 用法であると考え。具体的には、情報伝達の性質により、クルに含まれている基本的な意味項目—〈物理的移動〉、〈移動に伴う変化〉、〈名詞句への接近 (話し手側接近と非話し手側接近)〉が全て解釈されていないため、一部の意味項目のみが焦点を当てられる。つまり、ある概念内容から特定の意味項目を取り立てられるというプロセスが生じる。

焦点が当たらない項目は背景化、さらには脱落化し、補助動詞の形式化が起こる。一部のクル・テクル用法の成立プロセスを次のように例示する。以下、取り消し線は意味項目の脱落を示し、太字は意味項目の際立ちを示す。

空間的用法 1 : 〈**物理的移動**〉 + 〈変化〉 + 〈話し手側接近、非話し手側接近⁵²〉

(21) 名にし負はゞ相坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな (筆者注: クルが非話し手側接近を表す一例、この時期においては、話し手領域への移動か話し手以外の領域への移動かの区別が積極的にされていなかったと指摘されている。)

(後撰集・三条右大臣・十一 701)

時間的用法 : 〈**物理的移動**〉 + 〈**変化**〉 + 〈話し手側接近、非話し手側接近〉

(22) 夕潮満ちきて、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなるをりからなればにや
(源氏物語・濔標)

⁵⁰ 語順を重視する中国語では、「時間順序原則」(戴 1988) によって、動作主を文頭に置くことが優先される。

⁵¹ 主に会話文で使用されている事実から、文学形式 (文体) の変容によって、発話の場面が次第に重要となったことが一つの原因である。筆者による歴史コーパスの調査では、主に狂言などでの使用が見られた。また、この点は場面性が強調されたツイッターなどにおいて、用例が特に多く観察されることから傍証される。

⁵² 近藤 (1986) などによると、古典語や現代語一部の方言では、非話し手側接近の用法も観察されているという。

空間的用法2：〈物理的移動〉＋〈変化〉＋〈話し手側接近、非話し手側接近〉

- (23) 貴様は印判さへ捺せば宜いやうに拵らへて持て来た、何もむづかしい事はない
(『新袈裟物語』宮崎三昧)

心理的用法：〈物理的移動〉＋〈変化〉＋〈話し手側接近、非話し手側接近〉

- (24) 君に妻を持って妻を持ってと干渉がましく云ふて來るところを見ると、獨善孤立を可とする主張も何時の間にか取り消したに違ひ無い
(『緑の糸』幸田露伴)

以上のクル・テクル各用法の成立を直示の観点から見れば、典型的な空間的移動用法、時間的移動用法、心理的移動用法とはそれぞれ、「ここ」、「今」、「私＝話し手」の側面が使用場面に応じて焦点が当てられる構文である。意味項目の選択という見方はテクル各用法の間に存在する連続性も認めるため、より言語事実に合致する。例えば、「対象の移動」用法においては「物理的移動」と「話し手側接近」に重点が置かれるように、一つの文の中には複数の直示側面を伝達目的に応じて際立たせることが可能である。

- (25) 友人が沖縄産の紅茶を送ってきたので驚いた。

さらに、このような解釈は、間接受身構文や間接受影構文テクルの形式化過程（具体的には、話し手側視点の標示化）⁵³も一元的に説明することができる。各種の求心型構文が歴史的に、同時に誕生したとは断言し難いが、同じ原理に沿ってパラレルに発達するようになったと考える。なぜなら、本来の意味が新しい意味領域に浸透して新しい用法を誕生させるというプロセスより、最初から存在した複数の意味項目を発話の場面に応じて選択するというプロセスの方が安定しており、経済的だからである。

では、なぜテクルは移動性の意味項目を脱落することが可能であるのに対し、テイクの移動性の脱落が起こらないのか。3.1. 冒頭の部分において、逆行態の理論をもとに論じたように、非話し手側への接近を取り立てる場合は、既に無標の形式が存在していたため、テイクの使用が冗長になる。例示すると、(26)の無標文のように、視点所在の標記がされていないものの、通常、最初に出現する名詞句、つまり「保健所」の方が高い話題性を持つため、話し手側のものとされやすい。故に、非話し手側への接近を取り立てる構文になっており、テイクの使用を排除する傾向がある。

⁵³ 移動構文のみならず、高見・久野(2002)、古賀(2008)などの研究では、授受構文(テクル)や受動構文にも似たような形式化過程が指摘されている。

(26) 保健所が患者に対して検査を断った。

3.2. まとめ

以上、現代日本語の心理的移動用法は、テイク、テクルの方向の対立を示すものよりも、話し手側／受け手視点標示の対立、つまり有標／無標の対立を示すものであると説明した。無標の場合は視点の選択が比較的自由であり、有標の場合は話し手側に固定される。要約すれば、テクルは話し手側の受け手視点を標示することができる。さらに、本節では、このような対立は文法的な対立というよりも、談話・語用論的対立であると説明した上で、心理的移動用法の発達過程について論じた。先行研究に言及される「ダイクシス運用法の歴史的変容」の背景を主な原因と考えながらも、意味項目の選択原理による形式化という「パラレル説」を提案した。

4. 心理的移動構文の非対称性Ⅱ：非意図的用法の欠如

前節では、形式の面において、テクルの対立形式は無標形式であることを論じた。これを踏まえて、本節では意味機能の面において、求心型の「心理的移動」テクルと、その反対にあたる遠心型の「心理的移動」テヤル構文の差異に注目する。

まず、補助動詞脱落法などによって、テクル心理的移動構文の受影意味を明示する機能を確認する。次に、非意図的前接動詞の使用の側面から、日本語は構文によって関係性の弱い動詞事象まで受け手へ関与させることができるという特性を説明する。最後に、このような特性は主観的に事態を把握できる認識主体を好んで選択することを主張した上で、テクル非意図的用法の発達は本動詞「来る」の本義「話し手側への接近」に立ち返ると論じる。求心型構文テクルは、話し手側指向であるために、話し手自身より自由に内的状態、主に、心理的影響を把握することができる。一方、遠心型構文テヤルは非話し手側指向であるために、動詞事象から他者への心理的影響を、話し手側が一方的に解釈することが談話・語用論的な規則に違反する（私的な領域の侵入となる）ので、使用が厳しく制限されている。

4.1. 心理的移動構文の受影意味標示機能

テクル心理的移動構文は視点の標示機能以外にも、心的態度の表明機能を伴う⁵⁴。この点に関して、改めて、次の対照例を挙げておく。

(27) a 特徴的な白い帯は、美しさは勿論なのだがアリの食べ物になっているというのがとんでもない進化。蜜だけでは安心しない慎重派。人間だったら戦場でえげつない罠を仕掛けてくるタイプに違いない。

⁵⁴ 筆者は後者を前者の副次的な現象であると考ええる。

(Twitter 2020.04.25)

- b. ?この植物は人間だったら戦場で罾を仕掛けてこないタイプに違いない。

(27a) はある植物についての描写で、テクルによって、「罾を仕掛ける」事象の受け手側「獲物」などの視点を標示した一例である。一方、(27b) の否定形式も同様にテクルによって、「獲物」側視点を明示しているのにもかかわらず、適格性が(27a)より落ちてしまう。なぜなら、否定表現は通常、真理価値のある命題に対して行い、わざわざ表現された心的態度を否定する発話行為が無意味になりやすい⁵⁵ためである。

だが、(28) (29) のように、受け手視点の明示を重点的に機能する場合（「行為の方向性」用法など）には否定用法も存在する事実から、テクル形式の心的態度の用法が発展の途上にあることが示唆される。

- (28) デートしてて一言も褒めて来ない人って何なんだろうって思う。何がしたいんだろ。

(Twitter 2013.06.08)

- (29) オタクの中で2番目に信用している人です。LINE未読でも全く怒ってこないところがいい所です。

(Twitter 2020.05.04)

さらに、心的態度の詳細について、次の対照例を挙げる。

- (30) 話しかけるだけで何が可笑しいのかめっちゃクツクツ笑ってくるのめっちゃウザいけど好き。

(Twitter 2020.05.01)

- (30) a 話しかけるだけで何が可笑しいのかめっちゃクツクツ笑う...

- (31) 福岡県民のうちの親父定期的に「ひよこは東京銘菓ではない」って説明して来る。

(Twitter 2018.01.20)

- (31) a 福岡県民のうちの親父定期的に「ひよこは東京銘菓ではない」って説明する。

⁵⁵ 客体的な世界の表現つまり言表事態における否定は、その状態が存在しない状態やその状態と逆の状態を表すことになり、否定が無意味になるといったことは通常ない。それに対して、モダリティの否定はその額面通りのものであれば、把握の仕方や発話・伝達のあり方が存在しないことになってしまい、存在せずにはありえないものを存在していないと表現することになり、変なことになってしまう。(仁田 1989: 37)

(30a) (29a) はそれぞれ (30) (31) の原文から補助動詞テクルを脱落させた形式である。原文では中立的な動詞「笑う」、「説明する」が使われているのにもかかわらず、補助動詞テクルを後続させると、話し手への影響が生起される。一方、補助動詞を付加しない (30a) (31a) は、動作主体からの影響を読み取ることができず、ニュートラルな（あるいは、事実陳述的な）意味となり、話し手の発話意図を推測することが不可能になる。つまり、心理的移動構文には受影意味の明示機能が働いている。

現代日本語では、テクルのような話し手側への影響を表す構文と対立して、非話し手側への影響を表す構文も存在する。それは、移動構文のテイク形式ではなく、授受構文のテヤル形式である。

(32) 最後代わりに走ってやったのにまだありがとうと言われてねーんだけど
(Twitter 2015.02.27)

(33) 爆弾を人の家に仕掛けまくる男を退治する夢を見た。髪の毛掴んで鈍器でめちやくちや殴ってやった。
(Twitter 2020.02.29)

(32) (33) では、授与補助動詞テヤルを使って、非話し手側へ（いわば、遠心的な）の利益や不利益の影響を表している。影響の方向において、一見求心型と対称的になっているように見えるが、非意図的前接動詞との共起性に差異が見られる。

(34) 自分が否定されて、笑われて嫌なくせにお前は笑ってくるの？

(35) *人が否定されて、笑われて嫌なくせにお前は（人を）笑ってやるの？

(36) 医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断ってくる。

(37) *医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断ってやる。

上記の用例から、非意図的動詞が求心的影響を標示するテクルにおいて言語化され得る (34、36) に対して、遠心的影響を標示するテヤルにおいてはほとんど成り立たないという非対称性が見られる (35、37)。

ここで、なぜこのような違いが生じるのかという問題Ⅱが挙げられる。

4.2. 前接動詞の制限

問題Ⅱを説明するにあたって、まず意図性について考察しておく。心理的移動構文の前接動詞に関して、古賀 (2008 : 251) は、「主語として統語的に実現される逆行構文の動作者は、意図的に動詞事象を遂行する動作者でなければならない。」と述べ、前接動詞の意図側

面の意味的制限を指摘している。しかし、冒頭から用例を紹介してきたように、非意図的な行為による逆行構文も少なからず存在している。

(38) 夜泣きはいいけど別々に泣いてくるのなかなかつらさあるな。

(Twitter 2016.12.25)

(39) 息子とね、寝る前に寝室の窓から車の流れを見てたんだけどね、私の前髪を流してニコって笑ってくるのよ。とんでもねえ胸きゅんで死にかけて照れ笑いしてたらちゅーしてきたのよ。何この子。一歳半にしてそんなテク覚えたの？大丈夫？私は大丈夫じゃない。

(Twitter 2020.05.01)

(38) (39) は、いずれも幼児の行為に関する発話である。意志表示の能力がさほど発達していない赤ちゃんであるため、何らかの意図をもって、「わざ」と泣いたり、笑ったりするという解釈は到底想定できない。そのため、非意図的な行為による逆行構文も存在すると認められよう。

本章で取り上げられる構文における非意図的動詞の使用は常に「間接的関与」の意味と結びつく。まず、テクルと似たような用法をもつ間接受身を例にして、日本語の「関与」の仕組みを説明しておく。柴谷（1997：9）は間接受身の迷惑性を論じる際、次のような日本語の特殊性を指摘している。

間接的な影響を蒙るという関連性だけで問題となっている意味統合⁵⁶が可能であるかどうかは、言語によって異なっていて、この点が日本語と朝鮮語・中国語との間の迷感受身（筆者注：柴谷は関与受身を間接受身の下に分類する）をめぐる上での重要な相違点になっている。これらの言語では近接性に裏付けされた関連性の度合が高くなければ、意味統合がしにくいのだと考えられ、近接性が弱くても何らかの影響を受けたという関連性だけで意味統合が可能な日本語との間に顕著な違いを見ることができ

つまり、日本語は名詞句と関連性の弱い事象に対しても意味統合が可能であり、関与させることができると認識されよう。一方、筆者は関連性の弱い非意図的動詞事象を非動作者へ関与させるためには、通常、自分の意志や判断に基づく主観性の⁵⁷高い認識主体を要求する

⁵⁶ 意味統合の原理：所与の構文において、関係するすべての指示機能を帯びる名詞句は何らかの意味貢献を果たすことによって適切に意味統合されなければならない。...たとえ意味役割を負わない名詞句であっても、構文解釈において何らかの意味的貢献を果たし、そのことによって意味統合が図られれば、その存在意義が確立され、文法的に認められるということである。柴谷（1997：9）

⁵⁷ 言語行為における認識・概念化主体の心情・態度・信念に基づく様という。

と考える。なぜなら、動詞と名詞句の間に「を」、「に」、「に対して」、「のために」など、何らの格関係が取られる場合には、客観的に、いわば、事実に沿って、認識主体以外の人物からでも両者の関係（目的、対象など）を解釈することが可能であるが、非意図的動詞事象の場合は、意図性が消えると同時に、動詞事象と受け手との関係も希薄化されており、認識主体の一方的な解釈を喚起する。このような解釈を喚起できるのは主観性の高い認識主体にしかないからである。

(40) よく聞き専の人はダメみたいな風潮あるけど、口下手の人にも話してもらえるような配慮って大事 何度喋りかけても無視して来る人は流石にアウトだけ
(Twitter 2019.11.29)

(41) 落ち込んでる時とか、辛い時に、母さんに、私だって辛いのよー！！って言いながら泣いてくるの、正直めっちゃ嫌いだった...
(Twitter 2019.05.10)

(42) 「髪切ろうかなって言った時に『切りなよ』って言って来る女友達には要注意。髪はロングの方が男ウケ良いから、ライバル減らそうとしてる可能性ある」みたいな事ツイートしてる人が居て、どんな交遊関係なのってちょっとビックリした。
(Twitter 2020.05.09)

(40)～(42)では、前接動詞「無視する」「泣く」「言う」が意図的な行為であるとすると、それぞれの受け手との間に「を」「に」「に」のような格関係が成り立ち得るが、文脈上、三動詞が非意図的な行為と解釈されているため、非動作者との間に前述のような格関係が成り立たなくなる。故に、テクルは格の関係を持たない動詞事象を受け手へ関与させる表現である。

前文では、非意図的動詞事象の関与は主観性の高い認識主体を要求すると述べているが、この主体は日本語において、まさに話し手にほかならない。問題Ⅰの結論にも関連するが、テクルという求心型構文は、話し手側指向であるために、より恣意的に客観的な動詞事象を把握することができる。一方、遠心型構文テヤルは非話し手側指向であるために、客観的な動詞事象を非話し手側に関与させようとする行為は、「他者の私的領域への侵入は回避されるべきである」という語用論的な原則(=第2章(27))に違反するために、構文上では許容されていても、使用の場面において排除されることが多い。

4.3. まとめ

以上、非意図的動詞事象の求心型と遠心型の非対称に関して、本研究では認識主体（話し手側）と非認識主体（非話し手側）との差異から生じると考える。求心型構文テクルは話し手側指向であるため、より主観的に行為、または動詞事象からの間接的な影響を捉えること

が可能である。その一方、遠心型構文テヤルは非話し手側指向であるため、間接的行為や事象（例えば、名詞句と項の関係がないもの）からの影響を話し手が一方的に解釈することは語用論的な規則を違反するため、非意図的用法の「加害」、「授益」表現（つまり、利害を他者に加える表現）が排除される。

5. 本章のまとめ

本研究では、心理的移動構文テクルの二つの問題に対して、以下のように結論づけた。

- 3-I 心理的移動用法は、テクル、テイクの対立を基盤にした用法ではなく、有標、無標の対立を基盤とした用法である。また、発達の経緯に関しては、下位用法が段階的に意味拡張してきたのではなく、情報伝達の性質による意味項目の際立ち過程が原因となって、形式化される用法である。現代日本語は、話し手領域と非話し手領域の分化を背景に、話し手視点標示の義務性が強く要求されている。それと同時に、テクルなどの求心型助動詞・補助動詞は移動、変化、働きかけなどの具象的な意味項目が使用の場面において、背景化または脱落し、話し手側視点標示のみで構文として成り立つようになっている。
- 3-II 非意図的テクル構文の成立には強い主観性を持つ認識主体が要求される。遠心型テヤルの場合、非話し手側認識主体の感情や態度を話し手側が一方的に判断・確認することが不可能なため、非意図的動詞事象の構文化が排除されやすい。一方、求心型テクルの場合は話し手側が同時に認識主体であり、内側の心的態度を自由に表現することができるため、構文化の制限がより低い。

本章で考察した問題 I と問題 II は、いずれも視点構図の偏りから生じる副次的な現象であり、日本語の談話・語用論的な特殊性を反映している。

第4章 間接受身構文の語用論的考察

1. はじめに

本章では、受身文における間接受身構文について考察する。
現代日本語には以下のような特殊な受身文が存在する。

- (1) この家庭は、お父さんが朝早い仕事なので、夜半に赤ちゃんに泣かれては困るという実情があり、激しく揺すってあやしたということです。

(『ベビーエイジ』榎原洋一)

- (2) 夫だって、妻に仕事を辞められたらどうなるかぐらい、ちゃんと計算しているのです。

(『女が30代で自分を変える生きかた』桜井秀勲)

(1) は自動詞による受身文であり、(2) は動詞述語の事態に直接に関わっていない人物を主語とする他動詞受身文である。(1) の主語の項「この家庭」は、対応する能動文「赤ちゃんが泣く」の名詞句としては現れない。(2) の主語の項「夫」も、対応する能動文「妻が仕事を辞める」の名詞句としては現れない。つまり、二つの受身は対応する能動文が存在することを共通点とする。このような受身文は「間接受身構文」と呼ばれ、意味上の特徴からは、「被害受身文」、「迷惑受身文」⁵⁸とも称されている。

間接受身構文に関して、これまでは主に直接受身文との区別から様々な成果（三上 1953／1972、久野 1973・1983、寺村 1982、柴谷 1997、影山 1996、鷺尾 1997 など）が挙げられているが、自然な使用例に基づいた、いわゆる実証的な研究が僅少である。また、間接受身構文の研究は構文論・意味論に偏っている傾向があり、そのため、構文成立に関わる重要な側面、つまり参与者の語用論的な背景が見落とされている。そこで、本章は用例調査から間接受身構文の使用実態を把握した上で、参与者の性質を重視した語用論的な観点を取り入れて、構文成立をより正確に捉えることを目的とする。

具体的には、第2節で間接受身構文の位置付けを再確認して、構文の成立に関わる二つの問題点を提示する。第3節で用例調査を行い、間接受身構文のいくつかの傾向を示す。第4節で語用論的な観点を取り入れて、間接受身構文の各傾向を統一的に考察し、日本語において成立する背景を論じる。第5節でまとめを行う。

2. 間接受身構文の位置付け及び問題点

2.1. 間接受身構文の位置づけ

まず、間接受身構文の位置づけを確認する。現代日本語では、少なくとも以下(7)～(10)の受身用法が認められる⁵⁹。従来の研究では、主に構文(対応する能動文の有無、寺村 1982)

⁵⁸ 三上 (1953／1972)。

⁵⁹ 本研究では「に」格受身を対象にする。

と意味 (はた迷惑意味の有無、三上 1953/1972) の対立によって分類を行ってきた。(以下、
() 内は構文による分類、[] 内は意味による分類)

- (3) a 先生に褒められた。 (直接) [まとも]
b 先生に叱られた。 (直接) [まとも]
c 先生に見られた。 (直接) [迷惑]
(4) a 先生に絵を褒められた。 (間接) [まとも]
b 弟に昨日買ったばかりのお菓子を食べられた。 (間接) [迷惑]
(5) 隣の席で知らない人にスナック菓子をぼりぼり食べられて、嫌だった。 (間接) [迷惑]
(6) 早寝した娘に早起きされ、いささか眠いです。 (間接) [迷惑]

また、意味の面では、受け手がいかに物理的、あるいは心理的な影響を受けるのかという視点から受身を分類することもできる。鷲尾(1997)は被害の生じ方によって「語彙的被害」と「排除による被害」とを区別している。(以下、鷲尾(1997)による用例である)。

- (7) a 花子は太郎に子供をけなされた。
b 花子は太郎に自分の子供をほめられた。(子供=花子の子供)
c 花子は太郎に自分の子供をほめられた。(子供=太郎の子供)

(7a) (7b) は動詞の語彙的性質が迷惑性の有無に直結するため、鷲尾(1997)はこのタイプの被害を「語彙的被害」と呼び、当該受身を「関与受動」と呼ぶ。一方、受け手と動詞の直接目的語との所有関係が認められない(7c)は(7b)と違って、動詞の性質から独立した被害性が生じられる。同氏はこのタイプの被害を「排除による被害」と呼び、当該受身を「排除受動」と呼ぶ。この分類により、上記ほとんどの用例は「構文上間接的=意味上排除的」という対応関係が保たれるが、なお(4a)と(4b)のように、構文分類と意味分類の不一致が見られる。つまり、必ずしも迷惑の意味を表すとは限らない(4a)と(4b)⁶⁰を間接受身構文の類に入れると、「構文上間接的=意味上関与的」という対応関係が生じてしまう。これは先ほど示したほとんどの用例の「間接=排除」関係と矛盾する。

しかし、(4a) (4b) には「先生は私の絵を褒めた。」「弟は私のお菓子を食べた。」のように受け手が組み込まれた能動文があるため、本研究では(4a) (4b)の受身を直接受身の亜種とする。(【表 4-1】を参照)

⁶⁰ 持ち主の受身、所有受身とも呼ばれる。

【表 4-1】間接受身の位置付け

例文	3a	3b	3c	4a	4b	5	6
構文	直接	直接	直接	直接	直接	間接	間接
意味	関与	関与	関与	関与	関与	排除	排除

【表 4-1】に見られるように、構文による分類の基準（つまり、対応する能動文の有無）を見直せば、「直接＝関与」、「間接＝排除」という対応関係が認められ、従来混同されやすい(4a) (4b) と (5) を区別することができる。本章の主な分析対象である間接受身構文とは (5) (6) である。

2.2. 間接受身構文の問題点

前節では、間接受身の位置付けを再確認した。本節では、間接受身構文の成立に関わる二つの問題点を提示する。

まず、1 点目はいわゆる「間接的な事態の把握」の問題である。

間接受身構文は、「単文よりも複文の方が適格性が高い」という特徴が、日本語記述文法研究会（以下、研究会と略す）（2009）によって指摘されている。

(8) ?私は君にそこに立ってられる。

(9) 私は君にそこに立ってられると、仕事がやりにくいんだよね。

（研究会 2009 より）

(8) と (9) は同じ自動詞述語「立つ」を使っているが、文の単複の違いによって、容認度に差が生じている。複文 (9) の方が単文 (8) より適格性が高い。その理由について、研究会（2009）は次のように説明する。

間接受身文は主語の表す人物と事態の関係づけを表しているが、その関係づけは話し手の主観の中にあり、聞き手には理解しにくい場合がある。そのため、間接受身文は単独の 1 文としては不自然でも、複文の従属節として迷惑さの背景を補足説明する場合には自然になりやすい。

確かに、用例 (8) (9) で説明すると、間接受身構文の事態「(君が) 立っている」は直接受身と違って、主語の表す人物「私」と何ら格の関係を持たないため、両者の関係づけが明示されておらず、聞き手には理解しにくい場合がある。この時、迷惑さとしての「仕事がやりにくい」の背景を補足説明する成分にすると、自然な文になる。確かに、(8) と (9) の用例では「主語の表す人物（本研究では「受け手」と呼ぶことにする）」が同時に「話し手」

であるため、把握の対象が自分である場合には、直接的な関係がなくても、間接的な形で主観的に把握できると考えられる。しかしながら、「受け手」が「話し手」自身ではない場合、つまり、非話し手側へ向かう間接的な事態に対する話し手の把握様相はどうだろうか。少なくとも、次のような文は些か不自然である。

(10) ?太郎は君にそこに立っていると、仕事がやりにくいのだ。

ここで、構文の参与者の性質を考慮し、間接的な事態の把握の条件を考える必要がある。続いて、二点目は「間接受身構文が現代日本語の中で発達している背景」の問題である。間接受身構文は現代日本語の中で生産的に使われている⁶¹が、他言語にはほとんど見られない。この事実について、次のように、自動詞の受身の成立から論じられるものが多い。

日本語の自動詞ベースの受身はどの範囲で可能かというのを明確に線引きするのはかなり困難な問題である。いままで触れてきた言語よりも広い範囲において受動化が可能であるということは、無意志的な人間が関与する事態や、動物が関与する事態も受動化を許すことが明らかである。(柴谷 2000:155 下線筆者)

だが、今までの研究では、日本語の間接受身構文がどの程度で発達しているのか、いわば、構文化可能な動詞事象の範囲に関しては様々な見解が主張されており、構文の使用実態を正確的に反映できない議論が多々ある。また、他言語に比べて、現代日本語で顕著に発達している根本的な原因は何かという問題についても十全に指摘されているとは言えない。

以上、間接受身構文の成立に関わる二つの問題点を指摘した。こうした問題点を解決するためには、問題対象に対する実証的な調査が欠かせない。

3. 用例調査

間接受身構文の使用をより詳細に把握するために、本研究では書き言葉・話し言葉を含むコーパスと話し言葉を中心とする Twitter 用例に基づく実証的な方法をとる。採集した間接受身構文用例を整理した上で、文の成立に関わるいくつかの文法項目の傾向を分析する。

調査の最初の段階では、研究論文にある作例から間接受身構文と認められる自然な用例を採集し、そこから間接受身構文として使われる頻度の高い動詞を対象として、「現代日本

⁶¹ なお、沖縄島諸方言においては、間接受身構文に相当するものが発達していない可能性がある。例えば、島袋 (2009) は北部方言に属する今帰仁村謝名方言について、「先に行かれる」のような自動詞の受動文が作れないと指摘しており、當山 (2015) は「首里方言では、『太郎は雨に降られた』のような第三者主語の受動文を作ることができないか、非常に作りにくい」と指摘している。

語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ-NT) 中納言⁶²から用例を集めた⁶³。だが、周知のように、受身、尊敬、自発、可能の四つの意味を持つレル・ラレル文は表層の単語列から簡単に区別することができないため、本研究では前後の文脈を把握した上で、間接受身構文の判定を行った。一定の用例を集めた時点で、口語体で間接受身構文の使用頻度が高いと想定できたため、第二段階ではより話し言葉に近い Twitter のつぶやきも用例収集の対象とした。『分類語彙表』での自動詞項目を主な対象として、Twitter の高度検索機能を利用して用例検索を行った。最終的には、研究論文からの用例を 176 例、コーパスの用例を 235 例、Twitter の用例を 1466 例、合計 1878 例(述べ動詞数 446)を集めることができた。

本節では、間接受身構文の使用実態から、間接受身構文の成立に関わるいくつかの文法的な特徴を考察する。3.1.間接受身構文の述語動詞、3.2.間接受身構文の参与者、3.3.間接受身構文の複文傾向の順に論じる。

3.1. 間接受身構文の述語動詞

間接受身構文を考察する際、述語動詞は常に注目の的となる。特に、先行研究では、動詞の意図性(意図的/非意図的)の側面から論じるものが多い。例えば、研究会(2009)は、間接受身構文でもっとも多く見られるのが、有情物の能動主体が意図的な動作を行っている場合であると記述している。また、動詞の意図性に関わる「能格性」の対立から間接受身構文を考察したのが影山(1996)である。影山は「被害受身には、非能格動詞(と他動詞)のみ現れ、非対格動詞は現れない。」という非能格性制約を立てている。

影山の一般化を巡って、高見・久野(2002)は非能格性制約に反する用例(すなわち、非対格動詞でも間接受身構文に現れる用例)を数多く提示して、批判している。例えば、次の(11)(12)(13)はいずれも非対格動詞が間接受身構文になる用例である。

- (11) 乗客がいっせいに降りようとした勢いで、前の客に倒れられ、私も転んでしまった。
- (12) こんなに日照りに続かれては、田んぼが干上がっちゃう。
- (13) あいつに部長に昇進されたので、俺はもう定年まで課長どまりだよ。

(以上、高見・久野 2002 より)

しかし、高見・久野(2002)で挙げられた用例の多くは、内省による作例であるために、「間接受身文は非対格動詞にも現れる」ことを裏付けるためには有効かもしれないが、間接

⁶² 現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億以上のデータが格納されている。

⁶³ 間接受身構文の語彙的特徴などを調査目的とするなら、動詞の選定をより客観的な手法で(例えば、レル・ラレルの前接動詞を全て抽出して、中から間接受身構文を洗い出す。)行うことが望ましいが、本研究の主な関心部分ではないために、より効率的な手法をとることにした。

受身構文が実際にどのように使用されているのかを明らかにするには弱いと言わざるを得ない。

そこで、本研究では、非対格動詞／非能格動詞の対立（主に意図性の有無によって区別する）を一つの項目として、用例に対する調査を行った。その結果、非対格動詞が534例（延べ数）観察された。参考のために、一部の非対格動詞例を以下のように示す。なお、用例収集の段階では、レル・ラレルの前接動詞を全て抽出して、中から間接受身構文を洗い出すという、より客観的な方法を取らなかったために、この用例数は非対格動詞の使用比率に対して参考にならないことに注意する必要がある。

吹く、長生する、凍る、切れる、迫る、蒸発する、いる、死ぬ、生まれる、立ちこめる、生きる、焼け死ぬ、壊れる、先立つ、たなびく、降り込める、起きる、落ちる、止む、滑る、倒れる、成長する、転ぶ、噴火する、死亡する、亡くなる、咲く、溶ける、怪我する、なる、遅刻する、遅れる、降る、ぶっ倒れる、酔っ払う、寝落ちる、続く、病む、げっぷする、逝く、ビビる...

間接受身構文の述語動詞についての調査結果は、高見・久野（2002）「間接受身は非対格動詞にも現れる」説に合致する。非能格性・非対格性という構文的性質は間接受身構文の成立に直接的に関与せず、現代日本語は、非意図的な自動詞でも受身文として構文化することができる。

3.2. 間接受身構文の参与者

3.2.1. 参与者の有生性

間接受身構文の参与者の有生性⁶⁴をめぐる研究は盛んに行われている。例えば、研究会（2009：238）は「主語名詞（＝受け手、筆者注）は、その事態に巻き込まれて、迷惑を感じる主体という意味を持っている。無情物を主語とする間接受身構文は不自然である。」と述べ、「迷惑」の意味を受け手の有生性から説いている。また、動作主の有生性については、

無情物を能動主体（＝動作主、筆者注）とする場合には、能動主体の意志性は基本的に想定できないので、無情物を能動主体とする間接受身文は、一般的に不自然である。...ただし、「雨」や「風」「雪」に関わる自然現象は、例外的に間接受身文によく用いられる。...乗り物や機械を能動主体とする場合、乗り物や機械の動きの背後には、これら进行操作している有情物の存在が含意されている。

⁶⁴ 指示対象のもつ生物としての性質をいう。

と記述している。研究会（2009）の記述を検証するために、本研究では間接受身構文の参与者（受け手、動作主）の有生性（有情物／無情物）の観点から、用例分析を行った。調査結果を【表 4-2】に示す。

【表 4-2】間接受身構文の参与者の有生性

	受け手	動作主
有情物	1833	1552
無情物	45	326

参考のために、「受け手が無情物である」場合や「動作主が無情物である」という特異なパターンを次のように例示する。

a. 受け手＝無情物

- (14) フィジーとオーストリアの航空会社に去られ、また自国の会社による穴埋めもない日本の空港って一体...

(Twitter 2017.11.02)

b. 動作主＝無情物

- (15) 車で走ってて逆走自転車に前で転ばれたりなんかしたら避けれる自信ないよ

(Twitter 2017.10.24)

- (16) 切り位置遅い+天気に曇られ...ピントはばっちりなんだがな～

(Twitter 2017.02.21)

用例調査から見られるように、受け手と動作主が、いずれも有情物である場合が圧倒的に多い（受け手＝有情物：97%、動作主＝有情物：82%）。研究会（2009）などの記述の通り、無情物が受け手あるいは動作主になる場合は、(14) (15) のように、無情物の動きの背後にこれらをコントロールしている有情物の存在が認められる。それ以外にも、動作主が無情物の場合は、(16) のような自然現象のパターンが多く観察されている。

以上、間接受身構文の有生性傾向について考察した。

3.2.2. 参与者の人称傾向

本節では、従来の研究において、あまり注目されていない間接受身構文における参与者の人称の傾向に目を向ける。まず、【表 4-3】から受け手人称と動作主人称の傾向⁶⁵を見てみよう。

⁶⁵ 人称が明示されていない場合は、文脈によって判断する。

【表 4-3】間接受身構文の参加者の人称

	一人称	二人称	三人称
受け手	1470	22	386
動作主	2	72	1804

参考のために、受け手・動作主の人称、それぞれの構成パターンと用例数を下記 a~i のように挙げておく。

a. 受け手＝一人称、動作主＝一人称：1 例（再帰代名詞が動作主になる）

(17) 昨日の自分に続かれそうな予感がっ！！

(Twitter 2012.05.28)

b. 受け手＝一人称、動作主＝二人称：66 例

(18) 君に辞められてもしたら、ぼくたちは途方にくれてしまうだろうな

(『別れの薔薇でなく』 Lamb、Charlo 他/大沢晶)

c. 受け手＝一人称、動作主＝三人称：1403 例

(19) 一緒に居るようにしてるんですが、トイレやご飯を作りに行くときに泣かれて...ご飯を作るのも困ってます。

(Yahoo!知恵袋⁶⁶)

d. 受け手＝二人称、動作主＝三人称：3 例（すべての用例が非完成相に注意）

(20) あの人に正面に立たれてごらん w ほんとはほんとに息が苦しくて.....ww

(Twitter 2017.04.27)

e. 受け手＝二人称、動作主＝二人称:0 例

f. 受け手＝二人称、動作主＝一人称:1 例

(21) ...これで漸く夫婦になれた、もう今度こそ逃がさないよ」と、私は云いました。「あたしに逃げられてそんなに困った?」「ああ、困ったよ、一時はとても帰って来てはくれないかと思ったよ

(『痴人の愛』谷崎潤一郎)

g. 受け手＝三人称、動作主＝一人称:0 例

h. 受け手＝三人称、動作主＝二人称:6 例

(22) それに、先にあなたに泣かれたら彼氏は泣くに泣けません。彼はあなたに優しく接しながらも心の中では「泣きたいのはこっちじゃ！」って思ってたかもしれませんよ。

⁶⁶ 「Yahoo!知恵袋」、「Yahoo!ブログ」などは『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT』から収集している。

i. 受け手=三人称、動作主=三人称：380例⁶⁷

(23) 次の休み時間も、昼休みが始まった時も、明生たちは穂に逃げられた。3組の教室を覗いた時には、既にどこかへ行ってしまった後なのだ。

(『てのひらを、たいように』 島津出水)

表2では、用例の約8割が「受け手=一人称」であり、間接受身構文の受け手の一人称の傾向が見られる。また、「動作主=三人称」の用例は全体の96%を占めており、圧倒的に多く使われていることが示される。つまり、日本語の間接受身構文は話し手側領域内の対象を受け手とし、話し手側領域外の対象を動作主とする傾向がある。

さらに、具体例に目を移すと、(17)や(20)のように、話し手側領域内の対象を動作主とし、話し手側領域外の対象を受け手とするというごく稀な使用例もある。この場合の多くは、受け手の二・三人称に一人称の感情移入が行われたり、動作主の一人称を二・三人称化したりするという運用が認められる。

まとめると、日本語間接受身構文の使用には強い**人称的傾向**が見られる。受け手には、常に一人称側の名詞句であり、動作主は二・三人称側の名詞句が要求される。このような「一人称制限」の傾向は内的状態述語（感情や心理を表す述語）からも観察されている。

- (24) a 僕は寂しい。
b ?太郎は寂しい。

感情を表す形容詞述語「寂しい」に関して、主語が一人称の場合には(24a)のように自然な表現となるが、三人称の場合には、(24b)のように、不自然な表現となる。間接受身構文の一人称制限についてはこれまでほとんど注目されておらず、先行研究では、文脈も提示しないまま、受け手が三人称になる間接受身構文の作例を挙げられているが、その多くは容認度が低いと認識されている⁶⁸。

3.2.3. 動作主の格標示

最後に、間接受身構文の動作主の格標示の特徴に注目する。受身の格標示に関して、研究会(2009:238)は次のように記述している。

直接受身文と間接受身文には、能動主体の表し方について、きわだった違いがある。直接受身文では、能動主体は「に」を中心としながらも、「によって」や「から」、

⁶⁷ 半数近くがコーパス用例である。小説などの文体では登場人物への話し手の感情移入が可能であるために、「受け手=話し手」と見做して良いだろう。

⁶⁸ 例えば、「?山田は同僚に出張された。」「?田中は娘にその青年と結婚された。」のような作例がある。

「で」などで表されることもあるのに対して、間接受身文では「に」しか用いられない。

本研究では、実際に使われている間接受身構文の動作主格標示の特徴を検証するため、調査を行った。

【表 4-4】間接受身構文の動作主の格標記

	「に」標記	「から」標記	Φ（無標）
用例数	969	4	905

用例調査の結果は、【表 4】に示したように、無標 (Φ⁶⁹) 905 例以外の用例がほとんど「に」格標示 (969 例) となっている。残りの 4 例は「から」標示である。

- (25) そうかしら。信じないわ。あなたはわりあい女から騒がれる方だと思うわ。
(『青春の蹉跎』石川達三)
- (26) 不特定多数に募集かけた合同で見知らぬ人から参加宣言されてその上メ切間際に音信不通になられたりしたら胃がいくつあっても足らなさそう。
(Twitter 2016.10.06)

「から」標示の 4 例は自動詞述語を用いたが、(25) と (26) のように、「女があなたに対して騒ぐ」、「見知らぬ人が (私に) 参加宣言する」という能動文が可能であるために、純然たる間接受身構文とは言い難い。なお、今回の調査においては、「によって」動作主格標示の用例が出現しなかった。この結果は先行研究の指摘と合致する。

「によって」標示を排除することは、間接受身構文が直接受身文と区別する一つの特徴である。例えば、直接受身文が (27) のように動作主「によって」標示可能であるのに対して、間接受身構文の場合は (28a) のように、動作主「によって」標示が不可能となっている。

- (27) 太郎は何者かによって自分の息子を誘拐された。
- (28) a *太郎は花子によって泣かれた。
b * (私は) 花子によって泣かれた。

これは、「に」標示と「によって」標示の機能的な差異に由来すると考える。久野 (1986) は、動作主「に」標示は「主語寄りの視点を取る」機能があると述べ、「によって」標示は「中立視点を取る」、言い換えれば、動作主と受け手に直接的な関係性があることを卓立す

⁶⁹ 「に」格省略の例：「何しろあそこの院長は、〔患者に〕自殺なんかされるのが怖いから、それで無理に洗礼をすすめたのかもしれませんが。信者になったら自殺はできませんからね。」

る特徴があると指摘している。(27)の直接受身文は、動作主と受け手の直接的な関係性があり、中立的な視点を取ることができるため、「によって」標示が可能になる。一方、(28a)の間接受身構文は動作主と受け手の関係性を話し手が主観的に解釈するため、中立視点を取ることができない。(28b)のように、たとえ受け手を一人称に変えても、「によって」が制限される。

以上、本節では間接受身構文の参与者に関わる三つの傾向(有情物傾向、受け手一人称傾向、「に」格標示傾向)を、用例調査によって明らかにした。

3.3. 間接受身構文の復文傾向

本節では、間接受身構文の文構造について考察する。

直接受身文と違って、間接受身構文の成立は前後の文脈と強く関わると指摘されている。例えば、高見・久野(2002:255)は「被害受身文が適格となるには、主語指示物に対する迷惑の意味が示されなければならず、この迷惑の意味は、『られ』が現れる節のところまでの文脈と、その後ろに現れる文脈の両方で示されうる。」と示唆している。

(29) ??学生にプールで泳がれた。

(30) 泳ぎの下手な私の前を、学生にスイスイと泳がれて、泳ぐ気をなくした。

(以上、高見・久野 2002 より)

(29)の単文構造は(30)の復文構造に比べて、かなり容認度が落ちている。このような傾向を検証するため、本研究では、文の単複を一つの考察指標とし、計量的調査を行った。

集計の結果、複文の形で現れる間接受身構文が1729例であり、単文の形で現れる間接受身構文はわずか149例であった。この調査によって、単文での間接受身構文の使用が大きく抑制されている事実が窺えたほか、(31)と(32)のように、複文にならずに単文で使用される場合の多くは、未然相に偏る(Twitter用例の単文例の約半数が「レル・ラレル+ソウ」となっている)ことや、客観的な事実の伝達として用いられる用例が「逃げる」、「死ぬ」、「泣く」などのごく一部の動詞に限ることが明らかにされた。

(31) 息子は今日、7時に寝てるんだよね。明日は早起きされそう。

(Twitter 2014.01.30)

(32) 今日は酷かったわ！最後に新入社員にミスされそうになったわ。包材の入れかたが逆だったの。危なかったわ。

(Twitter 2016.07.09)

さらに、複文の使用実態をより細かく考察するため、本研究では複文の従属節に対して、下位分類を行った。分類の基準は主に野田(2002)の主文に対する機能からみた節の種類「連

用節、名詞節、連体節」を踏襲している。以下【表 4-5】に示すように、今回の調査から見られた従属節では、連用節タイプが圧倒的に多い⁷⁰。

【表 4-5】複文における間接受身構文の種類

	連用節	連体節	名詞節
用例数	1598	84	47

用例数の最も多い連用節の内訳（下位分類の基準も概ね野田 2002⁷¹に従う）をみてみると、(a)～(j)のように、多様な用法が観察されている。

a. 付帯状況・様態（「ように」「ままで」「ながら」「つつ」）

- (33) ふと、十年前、同じように雨に降られながらピザの町の、黄色い家がどこまでも続くアルノーの河岸をさまよっていたことを思い出した。

（『森有正エッセー集成』森有正）

- (34) 今まで鳴を襲ったような刺客は修練を積んだ連中だけさ。戦では、寄せ集めた兵に逃げられずに闘わせるのが一番難しいんだ。中には金だけもらって上手く逃げる傭兵もいるし。

（『業多姫』時海結以）

b. 程度（「ほど」「くらい」「かぎり」）

- (35) 「あったかいのは確かだな」「でも、そのために、他のあらゆることを犠牲にして？ご主人に逃げられてまで、毛皮を手に入れたがるなんて、まともじゃないわ」と、真弓はため息をついた。

（『盗みに追いつく泥棒なし』赤川次郎）

- (36) ただ酒に飲まれるひとは嫌いだし相手にゲロ吐かれるほど酔っ払われたりはしたくない！

（Twitter 2015.12.07）

c. 目的（「ように」「ために」など）

- (37) マストや索具装置を破壊することでカモに逃げられないようにするのが海賊のやり方だった。

（『トラファルガル海戦物語』ロイ・アドキンズ/山本史郎）

⁷⁰ この現象は間接受身構文が用いられる動機づけの解明にもつながると思われる。

⁷¹ 野田（2002）は意味的な観点から、付帯状況・様態を表すもの、程度を表すもの、目的を表すもの、時を表すもの、原因・理由を表すもの、条件・譲歩を表すもの、逆接を表すもの、引用を表すものなどと分類した。

- (38) それと、妻を先に死なせないように、また定年と同時に離婚されないよう夫は用心が肝要、ということでしょうか。

(『白い春風のように』山本美和)

d. 時 (「とき」「から」「前に」「後で」「間に」)

- (39) 再婚して、子供を産んで働いて、やがて年を取って先立たれた。夫に死なれた時は、沈み込むほど辛い思いをしましたが...

(『「愛・仕事・子育て」すべてが生活』加藤シヅエ/加藤タキ)

- (40) 隣でしかも演技中にガサゴソされたり携帯とか光るものいじられたときはたまったもんじゃない。

(Twitter 2015.07.06)

e. 原因・理由 (「て」「ので」「から」「ために」「だから」)

- (41) 呉月娘は西門慶が卓二姐に死なれたのでこうなんだろうと善意に解した。

(『金瓶梅』実著者不明/村上知行)

- (42) 美術監督の清水さんによれば、雨に降られたりして、渋い色合いが出た...とのことだ。

(『戦国自衛隊 1549 オフィシャルガイド』黒井敏典)

f. 条件・譲歩 (「と」「れば」「たら」「なら」「ても」「ところで」「ては」)

- (43) またオーナー側としても、「講師に逃げられたらスクール(講座)が終わってしまう」という弱みがあるため、強気に出られないという状況です。

(『はじめよう!カルチャー教室』犬塚義人)

- (44) 君に辞められでもしたら、ぼくたちは途方にくれてしまうだろうな。

(『別れの薔薇でなく』Lamb、Charlo 他 e./大沢晶)

g. 逆接 (「けれど」「が」「のに」「つつも」)

- (45) 「5月からは会ってない。メールだけだから私は悪くない。別れたくない」と泣かれたけど許す器量がありませんでした。

(Yahoo!知恵袋)

- (46) 彼は遊牧民の略奪にあい、助手の一人に逃げられたが、秘密の道具は守り通した。そして、チベットの未知なき原野を横断して、ニエンチェンタンクーラー山脈を越えた。

(『地図を作った人びと』ジョン・ノーブル・ウィルフォード/鈴木主税)

h. 引用 (「と」など)

- (47) しかし、男の人というのは勝手なものだ。女房に逃げられたと思ったら、すぐ新しい女房。まったく節操がないんだから。

(『OL 定年物語』松原惇子)

- (48) 周りにこないならいいけど、寝てる時動き回られたりって思うと寒気止まらないから。

(Twitter 2013.03.21)

i. 並列節（「たり」「し」「も」「て」など）

(49) 収容されている児童の多くは、両親に死なれたり捨てられたりした、薄幸の子供たちであった。

(『帝王コブラ』 門田泰明)

(50) テレビ直してもらってるけど、家族じゃない人に居間歩かれたり、扉触ってほしくない笑あとで掃除しなきゃ

(Twitter 2016.08.06)

j. その他（順接など）

(51) 柏原の農家に生まれた一茶は、幼名弥太郎。三歳で母に死なれ、継母は実子の仙六だけを可愛がった。

(『日本列島すぐ蕎麦の旅』 富永政美)

(52) もし突然、「この人に身体を触られた」と女に騒がれ、別の男が出てきて手首を掴まれ「あなた、痴漢したでしょう。見ていましたよ」と言われ、次の駅で駅長室に連れていかれたら、いったいどれだけの人が冷静でいられるでしょう。

(Yahoo!ブログ)

用例数の集計を【表 4-6】に示す。

【表 4-6】間接受身構文と連用節の下位分類

	付	程	目	時	因	条	逆	引	並	順
用例数	99	7	5	25	421	314	235	11	366	119

【表 4-6】から見られるように、連用節に現れる間接受身構文 1598 例の約 7 割が、後項述語との因果関係を表現できる節（原因・理由、条件・譲歩、逆接、順接）である。そして、用例から見られるもう一つの現象として、迷惑の意味が薄くなるものの多くが「ながら」、「つつ」型節の間接受身構文から観察されることにも注目すべきところである。

以上、本節では間接受身構文の「非意図的動詞の構文化傾向」、「参与者傾向（有情物傾向、受け手一人称傾向）」及び「復文傾向」を用例調査によって検証した。

4. 間接受身構文の成立

第 3 節で述べた間接受身の三つの傾向（①-「非意図的動詞の構文化傾向」、②-「参与者傾向（有情物傾向、動作主非一人称傾向、受け手一人称傾向）」及び③-「復文傾向」）は、一見それぞれ独立した個別の問題のように見えるが、根底では繋がっている。本節では語用

論的な見解を取り入れて、三つの傾向の関連性を統一的に考察する。さらに、中国語との対照によって、冒頭で挙げたⅠ-間接的な事態の把握、Ⅱ-間接受身構文が現代日本語で成立する背景に対して解釈を行う。

4.1. 間接的な事態の把握について

間接受身構文は、「雨が降った」のような非意図的動詞事象を構文化する特徴（傾向①）がある。非意図的動詞事象は通常、動作主以外の意味役割を導入しないため、一つの独立した（柴谷 1997：10 の言葉によれば、他の参与者と「構成的関連性」を持たない）事態として言語化される。間接受身構文の成立は、このような統語的な関係の成り立たない間接的な動詞事象でも、複雑述語⁷²の形で動作主以外の参与者に関係づけられることを意味する。

では、なぜ間接受身構文は無関係な動詞事象でも一定の対象へ関与させることができるのか。本研究では、用例調査による傾向②-「受け手一人称」、傾向③-「復文化」に強く関わると考える。

本論文では、会話の中にいる参与者への関与は、基本的に話し手側参与者への関与（求心型）と非話し手側参与者への関与（遠心型）の二パターンがあると想定している。話し手側と非話し手側の間には、程度の差こそあれ、ある事態に対しての把握の主観性（言語行為における認識・概念化主体の心情・態度・信念に基づく様という。）の差異が存在する。つまり、話し手側はある表現対象に対して概念化／言語化する主体であるため、常に高い主観性を維持しているという。

ここでの、間接受身構文の特徴①-「非意図的動詞事象を構文化する」と、傾向②-「受け手一人称」から示されたレル・ラレルの「求心的」特徴の関連性は明白であろう。つまり、通常話し手側の視点から、自らに向かう事態を捉える場合は、主観性の高さゆえに、格の関係がなくても、意味のレベルで事態からの関係性を「勝手」に把握することができる。なお、ここで、具体的な関係性を聞き手に伝えるためには、復文の形で補充説明をすることが好まれ、③-「復文傾向」と一致する。一方、非話し手側（二・三人称が代表的）に向かう動詞事象は、格関係で結び付けられる事象なら、客観的な真理価値があるゆえに、参与者の誰からも自由に捉えることが可能である（その結果、直接受身の場合は、二・三人称でも受け手になり得る）が、無関係な動詞事象の場合、非話し手側への心理的な影響を話し手側が勝手に捉えることになり、「他人の私的領域を侵害してはいけない」という語用論的原則（=25）を違反することになってしまう。「?太郎は君にそこに立っていると、仕事がやりにくいのだ。」のような文が、復文構造になっていても不自然であることはこの原因による。

以上、問題Ⅰ-間接的な事態の把握の原因を「方向性」と「私的領域」に関わる語用論的な原則から論じた。では、このような原則は他の言語にも適用するのか、次節において詳しく考察する。

⁷² 複数の動詞が結合して全体として一つの機能を果たしているとみなすことができる構造をいう。

4.2. 日本語における間接受身構文の発達

本節では、中国語との対照から、問題Ⅲ-日本語における間接受身構文の発達について説明する。

用例調査から見られるように、現代日本語の中では動詞であれば、受身文化できると言えるほど、間接受身構文が生産的に使用されている。このような現象は、他言語にはあまり見られない。例えば、中国語との対照で、先行研究では、特に自動詞受身の成立から多く論じられている。自動詞受身の成立をめぐるのは、主に二つの立場がある。

一つは、日本語にしか成立しない立場である。大河内（1983）によると、日本語で広く自動詞に成立する迷惑受身文は、まず中国語では成立しない。たとえば、

「死なれるってやっぱり嫌なものね」というせりふは中国語に訳されると…「若说死嘛、终究不是个味儿。（もし死ということになれば結局まずい）」のようになる。日本語では受身ということを示されている誰の死かという点も、中国語では分からなくなってしまう。

もう一つは、中国語にも成立する立場である（金田一 1988、木村・楊 2008 など）。例えば、自動詞の間接受身構文に関して、金田一（1988）は「これは東アジアの諸言語によく見られ、特に珍しいものではない。」と述べ、中国にも間接受身構文が存在すると認める。また、楊（1989）によれば、現代中国語では、(53) (54) のようなタイプの自動詞受身文が少数見られるという。

(53) 不注意让他跑了。

〈日本語訳：うっかりしてあいつに逃げられてしまった。〉

(54) 被他这么一坐、我什么都看不见了。

〈日本語訳：彼にこうして坐られると、何も見えなくなってしまった。〉

（以上、楊 1989 より）

中国語の受身文の特徴について、木村・楊（2008）は、

主語に立つ対象が単に動作行為を受けることを述べるだけでは成立し難く、動作行為の結果として対象が被る何らかの状態変化を明示する表現を述語成分に要求する

と述べ、VR 構造(動作行為を表す動詞(V)と、動作行為が対象にもたらす結果的状況(Result)を表す非対格動詞(または形容詞)とが結びついた複合的な動詞句構造)の概念から、「中国語の受動文とは典型的には、動作による対象への結果的影響を伝えるための構文であり、従って、その述語にはいわゆる VR 構造が最もよく適応する」と説明している。そのため、

自動詞の場合であっても、適切な VR 構造を構成してさえいれば、問題なく受動文が成立するという事実にも見て取ることができるという。例えば、

“咳嗽”は「咳き込む」という意味の自動詞だが、「シャオホン」が「咳き込む」ことの結果として「彼」が「目覚める（“醒”）」という意味を表す (c) は受動文として問題なく成立する。

- (55) 他 被 小红 咳嗽醒了。
彼 AM シャオホン 咳き込む-目覚める-PERF
<彼はシャオホンに咳で起こされた>

中国語の受動文は、動作による対象への結果的影響を具体的に述べるための構文である以上、(55) から結果補語の「醒」を落とした (56) が非文になると主張している。

- (56) *他 被 小红 咳嗽了。
彼 AM シャオホン 咳き込む-PERF
<彼はシャオホンに咳き込まれた>

木村・楊 (2008) は、他動詞も自動詞も、VR 構造を構成してさえいれば、受身文が成立するという条件を主張したが、「結果的状况を落とす」と、他動詞が「許容度が下がる」のに対して、自動詞の場合は「非文になる」という容認度の差についての説明はなされていない。さらに、実際の使用場面において、中国語では、有情物が動作主になるごく一部の非状態的な自動詞（「跑〈逃げる〉」、「走〈歩く〉」、「哭〈泣く〉」…）しか受身文化できないため、木村・楊 (2008) の構文構造による一般化は、言語事実に合致していないと言わざるを得ない。

以上、間接受身構文の成立について、本研究では構文の生産性から、「現代日本語固有の表現である」立場をとる。また、その発達の違いについて、VR 構造の関係と異なった視点から説明できると考える。その説明は、問題 I の結論にも強く関係する。まず、以下の用例から、現代中国語受身文の参与者の特徴を考察する。

- (57) 妈妈的上衣早已被我“扑通扑通”溅出来的水花和她自己流出来的汗液浸透了。
<直訳：？母の上着は私がドボンと飛び跳ねた水しぶきと、母自身が流れ出た汗でとっくに濡らされた。>

（『再见妈妈』 金河仁）

- (58) 许多儿时早已被遗忘的记忆在翻看父亲拍的那些老照片时被我一一想起。

〈直訳：？子供の頃のとっくに忘れられた多くの記憶は父が撮ったあれらの古い写真をめくった時に私に思い出された。〉

（『纯真博物館』 奥尔罕・帕慕克）

(59) 从我们居住的小区到牛蛙养殖场约有五里路、小表弟要开车来接被我们婉拒。

〈直訳：？私たちが住んでいる団地から牛蛙の養殖場までは五里の道のりで、いところが車を運転して迎えに来ようとするのを私たちに断られた。〉

（『蛙』 莫言）

(57) ～ (59) のように、中国語受身文は、一人称側「我〈私〉」、「我们〈私たち〉」や無情物「水花〈水しぶき〉」、「汗液〈汗〉」などでも動作主として構文化することができる。一方、これらの文を日本語の受身文に直訳すると、容認度が落ちる。この違いの原因について、杉村（2003）が指摘した「受身文使用の意味的動機付けの違い」が参考になる。

日语使用被动句的语义动因主要来自“说话人的主观感受”；汉语使用被动句的语义动因主要来自“客观世界的施受关系”。

上記の指摘を日本語に訳すと、日本語は、「話し手の主観的な感情」を受身文使用の意味的動機付けとしていて、中国語の場合は「客観的な世界の施受関係」を受身文使用の意味的動機付けとしているという違いがある。つまり、日本語の場合は、話し手の感情を導入する必要があるため、有情物、または話し手に近接する対象を受け手とすることが一般的に要求される。しかし、上記の用例においては、受け手の「母の上着」、「忘れられた多くの記憶」、「いところ」がいずれも動作主「私（達）」と比べると、話し手からほど遠い存在であるため、構文の成立が制限されている。

さて、杉村（2003）が指摘した「受身文使用の意味的動機付けの違い」は何によるのか。本研究では、日本語の「話し手中心」の視点構図によると考える。我々は、把握対象としての主客両側（話し手側と非話し手側）を超越的な視点から眺める言語においては、話し手側の主観性が比較的低く、常に表現内容の中に話し手側を取り込む言語においては、話し手側の主観性が高いと考える。前2章でも指摘してきたように、現代日本語は話し手側と非話し手側を敏感に区別する言語であるため、話し手側の主観性が格別に高い言語である。故に、関係性の薄い対象でも主観的に把握することができる。一方、中国語などの言語は、一人称の話し手をデフォルトにするという視点構図がないため、話し手側と非話し手側の関係がより対等である。関係性の薄い対象は話し手側からさえ主観的に把握することができず、間接受身構文が産出されにくい結果に結びつく。

このように、本研究では、日本語と中国語との間接受身構文の発達の違いについて、根本的には視点構図の差異によると主張する。

5. 本章のまとめ

本章で述べたことをまとめると、次のようになる。

間接受身構文の使用実態について：

- 4-i 間接受身構文の述語動詞：非意図的な自動詞でも受身文化することができる。受身文化が可能か否かは、述語動詞の意味的特徴のみから判断できない。
- 4-ii 間接受身構文の参与者：①、受け手は一人称が、動作主は三人称が顕著である。受け手人称は常に動作主より内側に位置する傾向がある。②、動作主、受け手ともに有情物が中心である。③、間接受身構文は「に」格で動作主を標示する。
- 4-iii 間接受身構文の複文傾向：特に、連用節となる間接受身構文が多く、連用節として機能する場合は後項述語との因果関係を表現できる節（原因・理由、条件・譲歩、逆接、順接）になることが多い。迷惑の意味が薄くなるものの多くが「ながら」、「つつ」型節の間接受身構文から観察される。

間接受身構文の使用実態から示唆された二つの回答：

- 4-I 間接受身構文は、「事象」と「受け手」の間には格の関係が存在していなくても、両者の関係づけを主観的に把握できる。それは「方向性」と「私的領域」に関わる語用論的な原則から説明することができる。
- 4-II 間接受身構文は現代日本語で生産的（文脈的な条件を整えば、どんな動詞でも受身文化することが可能である）に使用されているが、中国語ではほとんど発達していない。両言語の違いは、視点構図の差異から解釈できる。

以上、本章では日本語の特殊性から、間接受身構文の成立を分析した。

間接受身構文は、用例調査からも示されているように、発話の場面と参与者を考慮に入れないと、いくら前接動詞の語彙的特徴や構文的規則から一般化しても、言語使用の実態を十全に捉えることはできない。また、間接受身構文の諸特徴は、方向性の意味を持った他の助動詞・補助動詞からも観察されており、現代日本語「求心性を心理的に運用する視点が存在する」という特徴と連動する現象であると考えられる。

第5章 日本語間接関与構文の諸相及び成立原理

1. はじめに

第2章から第4章までそれぞれ論じてきたように、現代日本語では、テクレル、テクル、レル・ラレルといった助動詞・補助動詞を用いて、会話の参与者に直接的に関与しない非意図的動詞事象に関与させる構文が発達している。まず、次の用例 a 類と b 類の比較から間接関与構文を確認してみよう。

受身文

- (1) a 娘に嫌われて、相当悩んでいる。
b 早寝した娘に早起きされ、いささか眠いです。

授受構文

- (2) a 相手の選手が水を渡してくれた。
b 相手の選手が急に倒れてくれたおかげで、優勝することができた。

移動構文

- (3) a 赤ちゃんが自分の方へ一生懸命歩いてきた。
b 赤ちゃんが別々に泣いてくるので、なかなかつらさあるな。

a 類と b 類は、ともに「娘」、「相手の選手」、「赤ちゃん」を動作主として、話し手「私」を動詞事象の受け手とするが、動詞事象と「私」との間には異なった文法関係が見られる。

a 類の用例では、「私を嫌う」、「私に渡す」、「私に歩く」が成立するように、動作主が行う動詞事象「嫌う」、「渡す」、「歩く」は、「私」とある種の統語的な関係を持っており、直接的に関係付けることが可能である。

一方、a 類と違って、上記の用例 b 類においては、動作主「娘」、「相手の選手」、「赤ちゃん」が行う非意図的動詞事象「早起きする」、「倒れる」、「泣く」は、会話のもう一方の参与者側のものと統語的な関係を一切持たず、意味上の直接的な関与が見られない。それぞれの動詞事象は助動詞・補助動詞を介して受け手と関係づけられる。このような特徴から、本研究では b 類構文（間接受身構文、間接的な授受構文、間接的な移動構文）を「間接関与構文」と仮称する。

具体的な考察対象が異なった部分もあるが、いわゆる「関与構文」に関する研究は、他にも益岡（1979）、天野（1991）、山田（2004）などがある。益岡（1979）は「経験的間接表現⁷³」として、受動的間接関与表現「X が妻に死なれた」、非受動的間接関与表現「X が妻が死んだ」、受益的間接関与表現「X が息子を褒めてもらう」、擬似使動的間接関与表現「X が息子を病気で死なせた」などを挙げている。また、天野（1991）は益岡（1979）の定義に従って、第三者 X が事象に関わることを表す間接関与表現のうち、X が意図的な動きの引

⁷³ 事象に対して第三者の立場にある X が、この事象に間接的・消極的にかかわり、これを経験する、という事態を表したもの。（益岡 1979 : 346）

き起こし手でない場合を「経験的間接関与表現」とし、事象の第三者と、その事象の当事者との間の「意味的な密接性」という点での条件を示し、三つのタイプに分けた。その内、本研究の考察対象に関わる受動文・受益文については、「『Xが影響を受ける』という構文的意味に支えられて、意味的な緊密性が無くても「経験的間接関与」を表す」と指摘している。一方、筆者による「間接関与構文」の定義は上記より厳格的な意味でのものであり、非意図的動詞事象の関与を表すもののみを対象とする（詳細は次節において説明する）。

間接関与構文について、第1章では、ヴォイス性に関わる問題、統語論の問題、意味・機能に関わる3つの問題を提起した。本章では、第2章～第4章より考察した結果をまとめて、最初の二つの問題点を取り組む。

- 問題点1 - ヴォイスとしての間接関与構文の使用実態に関する記述が不十分である。
- 問題点2 - 間接関与構文の成立に関わる「無関係事象の関与の統語的実現」の原理の説明がこれまでなされていない。

具体的には、間接関与構文の諸相を確認した上で、本構文の成立原理を統一的な枠組みで分析することを目的とする。まず、第2章から第4章まで取り上げてきた3種類の構文に共通した構文、意味・機能、文体的特徴を第2節で概観する。次に、第3節で間接関与構文成立の原理を「主観的把握」と「助動詞・補助動詞の方向性」の関係から論じる。最後に、第4節ではまとめを行い、問題点1～問題点2を解釈する。

2. 間接関与構文の諸特徴

本節では、間接関与構文の諸特徴をまとめる。

本研究で取り上げる3種類の間接関与構文は、ともに「求心型」助動詞・補助動詞によって構成されており、共通した特徴を多く見せる。次節において、構文、意味・機能、文体的面での間接関与構文の特徴を概観する。

2.1. 構文的特徴

本節では、間接関与構文の構文的特徴を考察する。

2.1.1. 非意図的動詞事象の構文化

間接関与構文は、会話の参与者と関与した形で構文化する特徴がある。特に、非意図的動詞事象を構文化することができる。

まず、意図動詞と無意図動詞の区別を確認しておく。仁田(1988)は、動詞の有している「自己制御性」（つまり、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質）といった意味的特性が関わっていると指摘し、「自己制御性を持つ

た動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である」と分類している。

本研究では概ね仁田（1988）に従って、動作主の意志によって制御できない動作を無意図動詞とする。一方、次の二点が示すように、本研究では意図性をより狭義的に解する。まず、考察の際には、単独な動詞の語彙的な意味よりも、文脈においての一つの動詞事象の意図性に注目する。なぜなら、同じ動詞でも、動作主が意図をもたずに自然に行う場合（4）とそうでない場合（5）があるためである。

- (4) 脳出血は本当に怖い。元気で一緒にご飯食べてた人が急に倒れてそのまま亡くなったり。

(Twitter 2020.12.28)

- (5) 日本レコード大賞で豆柴の大群のメンバー一人がわざと倒れる。

(Twitter 2020.12.30)

次に、自己制御性以外にも、受け手に対して、動作主が結果を予想しながら動作を行ったか否かという側面（いわば、意図性、動機性）を一つの追加基準とする。

そこで、非意図的動詞事象を大きく二種類に分ける。一つは無情動作主が行う動詞事象（6）であり、もう一つは有情動作主が意志・意図を持たずに行う動詞事象（7）である。

- (6) 私はパソコンが壊れた時に数年分の写真が消えた事がありました。バックアップは大事ですね！

(Twitter 2020.12.23)

- (7) お客様がそこに座っている。

非意図的動詞事象は鈴木重幸（1972：318）が「さそいかける形と命令する形を本来の意味でもちいることのできない動詞」と指摘しているように、さそいかけ、命令、禁止のモダリティと合わない。そのほか、動作主の意図を要求する授受、または他者へ仕向ける行為とも論理上適合しないと想定されている。一方、日本語の間接関与構文においては、非意図的動詞事象が制限なく構文化されている。

- (8) いわゆる白物家電には糸目をつけないことにしてるのおおお\ (^o^)/ 。夏場とか壊れられたりしたら死んじゃうしーん

(Twitter 2019.08.11)

- (9) よくぞ保証期間中に壊れてくれた！ 一度人の手が入ると完璧なほど壊れなくなるので安心である。大した時計じゃないけど。

(Twitter 2020.11.28)

- (10) 個人大家さんと契約するような賃貸に住む奴は ATM には通帳定期的に入れて
行こうな 大家さんも人間だから振り込んでいる行数を気軽に見落とす
ぞ。

(Twitter 2017.03.13)

(8) (9) はそれぞれ「冷蔵庫」、「時計」に関するツイートである。両者とも無情物であるため、受け手に働きかけよう、授与しようという意図の発動は、擬人法⁷⁴でないかぎり、現実世界では考えられない。(10)の「振り込んでいる行数を見落とす」は、人間が行う行為であるが、動作主が何らかの動機で行ったわけではないため、非意図的動詞事象と解釈される。

2.1.2. 受け手の有生性傾向

前述のように、間接関与構文は動詞事象の意図性を要求しない。これはすなわち、無情物でも動作主に立てることが可能であることを意味する。一方、動作主と対照的に、間接関与構文の受け手の場合は、有情物(人)でなければならない。また、この受け手はほとんどの場合、話し手側に属し、省略されることが多く、明示されると文として不自然となりやすい。

- (11) ?鈴木さんは 早寝した娘に 早起きされました。
(12) ?相手の選手が急に 鈴木さんに 倒れてくれた。
(13) ?赤ちゃんが別々に 鈴木さんに 泣いてきた。
(14) ?私は 早寝した娘に 早起きされました。
(15) ?相手の選手が急に 私に 倒れてくれた。
(16) ?赤ちゃんが別々に 私に 泣いてきた。

(11)～(13)は、受け手を非話し手側の人「鈴木さん」と設定する作例である⁷⁵。(14)～(16)は受け手を話し手側の人と設定する作例であるが、(14)のような受け手明示の間接受身は用例調査から多く観察されていない。また、受け手を補完する上記の(15)(16)は意図的な行為としか解釈できず、間接関与構文としては成り立たない。受け手を有情物と

⁷⁴ ここで、「擬人法と認めれば、構文の解釈ができるのでは…」との指摘が予測されている。しかし、仮に、「擬人」による臨時的、修辭的な用法であると考えれば、遠心型の助動詞・補助動詞においても平行的に用法が見られたはずであるが、事実、2章～4章で考察したように、このような遠心型用法はほとんど発達していない。

⁷⁵ (183)～(185)は文体によって、自然な文になる場合がある。この点については、感情形容詞文の人称制限と似ている。甘露(2004, 2005)によれば、「報告」の文では視点は話し手から決して離れないため、一人称と二・三人称の間には埋まるべくもない溝が横たわり、それゆえに人称制限がかかるが、「語り」の文では視点は話し手から(空間的にも時間的にも)離れて展開するため、全ての登場人物が観察可能領域に入り、それゆえに人称制限は解除される。

要求することや、話し手側の者を受け手にする傾向は、当該構文の意味・機能と強く関わりと予測されよう。

2.1.3. 待遇形式

間接関与構文は通常待遇形式を持たない。

受身レル・ラレルは、間接関与、直接関与を問わず、元より待遇形式を持たない。また、テクレルとテクルの場合は、典型的な用法、つまり、直接関与においては待遇形式が用いられ得る (17a、18a) が、間接関与においては、基本待遇形式を持たない (17b、18b)。

- (17) a 先生が花子を褒めてくださった。
b ? 傷が治ってくださった。
(18) a 先生が帰っていらっしゃった。
b ? 相手が急に信号機を無視していらっしゃった。

(17b) が不自然になるのは、動作主体が無情物であるため、待遇形式の運用が不適切であることが原因の一つである、(18b) の場合は有情物であるが、マイナスの意味を持つ動詞事象「無視する」に対して上位に待遇するという意味的な衝突によって待遇形式が排除される。

2.1.4. 極性

間接関与構文は、否定化しない傾向がある。

授受構文に関しては (19b) のように、否定文も多く見られるが、受身と移動の間接関与構文の否定形はほとんど観察されていない。

- (19) a 妹はどうやら BL 本を送ってくれなかったようです...非常に残念...
(Twitter 2018.01.14)
b 今日はケンシロウの体調がなかなか治ってくれなかったので、...
(Twitter 2018.03.10)
(20) a 以前マーケットプレイスに出店している古書店に漫画単行本を注文したのに本を送ってこなかった。
(Twitter 2015.01.24)
b ? 歩行者が信号を無視して来なかったことを感謝する。
(21) a とくに付き合おうとも結婚しようとも言われませんでしたが、サボンいただきました
(Twitter 2020.12.26)
b ? 早寝した娘に早起きされませんでした。

上記(20a)(21a)は移動と受身の直接関与構文の否定形式であり、自然で容認度の高い用法である。これらに対して、(20b)(21b)の間接関与構文の否定形の使用は不自然な表現となりやすい。なぜなら、間接関与構文は非意図的動詞事象を構文化するため、意外な出来事の発生を表現する役割があり、想定外の出来事の否定、いわば「未発生」をわざわざ言語化することは表現価値を持たないためである。この点に関して、森山(1988)が間接受身構文の否定制限について示している次の見解が参考になる。

格関係を見ると、迷惑受け身(本研究の「間接受身」に相当する、筆者注)は、もともと独自に成立している動きに対して、その動きに対する非参画者(参与者、筆者注)を、いわば無理矢理に関与させるという意味になっている。＝中略＝動きに無理に関与させるという迷惑受け身の意味に対して、否定は、いわば、つなげつつ、そのつながりを否定し、その関与関係自体を否定することになるので、情報的に、表現そのものが無意味になることになる。

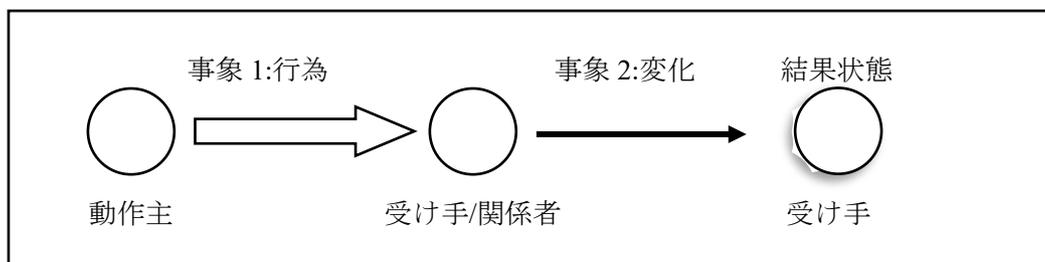
つまり、上記の用例において、直接関与構文の否定形式が自然に成り立つのは、客観的な「人」、「物」、あるいは「動作」の移動が成立していることが原因である。なぜなら、ここでの否定の対象は、受け手の視点からしか見られない「出来事との主観的なつながり」ではなく、会話のどの参与者から見ても成り立つような「客観的なつながり」と見なされるからからである。

2.1.5. 結果事象の焦点化

間接関与構文においては、結果事象が取り立てられる傾向がある。

ここでは、認知言語学の分野で用いられる行為連鎖のモデルを援用して説明する。行為連鎖のモデルとは、動作主から受け手に対して何らかの働きかけがあり、その影響を受けて何らかの結果が生じたという他動的な事象を想定し、次のように一般化したものである。

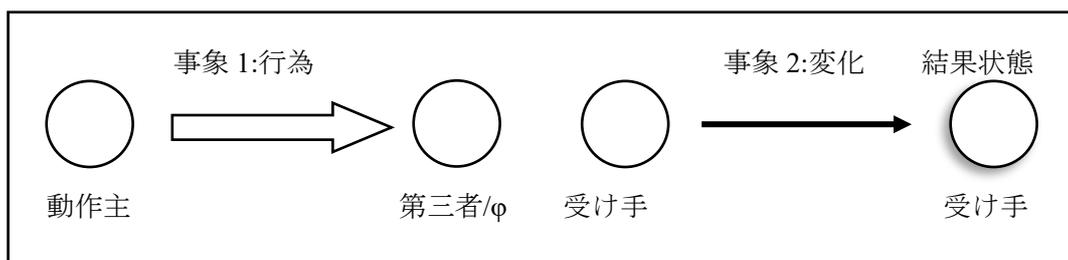
【図 5-1】 直接関与構文



直接関与構文は、おおむね以上のモデルで説明できる。中でも典型的なのは直接受身文である。例えば、「パソコンが子供に壊された」のような他動性の高い事象は、まず動作主「子供」が受け手の「パソコン」に対して行為を行う。（【図 5-1】では二重矢印で表記する。）次に、事象 1 が原因で、受け手「パソコン」が動かない状態に変化するという事象 2 が生じる。（ここでは一重矢印で表記する。）直接関与構文については、前項事象の受け手が同時に後項事象の主語、または、関係者であることに注意する必要がある。

一方、【図 5-2】に示すように、間接関与構文で統合された二つの事象の場合は、前項事象には受け手が存在しないか（「娘に早起きされた」）、後項事象の主語と無関係な第三者が選択されるか（「隣にタバコを吸われた」）の二つのパターンがある。いずれも、二つの事象の間に関連性が見られず、直接関与構文のような表層面での因果関係⁷⁶（例えば、パソコンに外力を加えることは、容易にパソコンに状態変化が起こる結果を予測できる）が読み込まれない。

【図 5-2】 間接関与構文



間接関与構文における前項事象と後項事象の因果関係は語彙的な意味ではなく、構造によって実現される。この場合、事象 1、つまり行為の部分の具体的な意味内容は重要視されなくなっており、背景化されている。これに対して、後項事象、つまり結果事象が取り立てられ、表現の主たる部分になっている。この点は、間接関与構文のアスペクト的特徴（例えば、現在進行形の有無）からも検証できる。

受身文：

- (22) a 今、ヤクザの人に殴られている。
 b ?今、パソコンに壊れられている／娘に早起きされている。

授受構文：

- (23) a 今、妻がコーヒーを淹れてくれている。

⁷⁶ 結果表現について、鷲尾（1997）は、結果述語が動詞の意味から予測することが不可能、つまり動詞の意味から完全に独立しているタイプを **Strong Resultatives** とし、結果述語が動詞の意味から完全に独立していないものを **Weak Resultatives** と分類している。間接関与構文の結果述語の場合は、動詞の語彙的意味から完全に独立している極端なタイプと言って良いだろう。

- b ?今、パソコンが壊れてきている。

移動構文：

- (24) a 今、あの人が荷物を持って来ている。
b ?今、あの人が信号を無視して来ている。

(22a) (23a) (196a) のような直接関与構文が進行形を持つのは、行為の部分が表現されているからである。一方、(22b) (23b) (24b) のような間接関与構文が進行形を持たないのは、動詞の語彙的な意味にも影響されているが、結果の意味合いだけが解釈されているためである。

2.1.6. まとめ

以上、間接関与構文の構文的特徴を概観した。間接関与構文は、直接関与構文に比べて、さらに抽象化が進んでおり、非意図的動詞事象でも構文化することができる。否定や待遇形式を持たない特徴からは、間接関与構文の語形などが直接関与構文より限定的であり、いわゆる脱範疇化⁷⁷の傾向が見られる。さらに、受け手有生・一人称傾向や結果事象の焦点化からは、間接関与構文が話し手の心の中で、発生した事象についての評価を表出する文脈に限定されつつあることが窺える。

2.2. 意味・機能、文体的特徴

本節では、間接関与構文の意味・機能、及び文体的特徴を概観する。まず、2.2.1.では動詞事象の表現類型に注目して、間接関与構文の動詞事象は「情意表出型」であることを指摘する。次に、2.2.2.では間接関与構文が表す具体的な意味内容を確認する。最後に2.2.3.では間接関与構文が使用される文体について触れる。

2.2.1. 「情意表出型」と「演述型」

ここでは間接関与構文の表現類型について取り上げる。

益岡 (1997) は、表現時において内面に存在する感情や意志を表すものを「情意表出型」の表現、表現者の認知 (知識) を表すものを「演述型」の表現と分類している。さらに、益岡 (1997) は、

- (25) 主観的表現における人称制限の問題を論じる場合、情意表出型の表現と演述型の表現を区別して扱わなければならない。演述型における人称制限は、事態の真偽に関する認識論的問題ではなく、私的領域に関わる語用論的問題である。

⁷⁷ 元の語彙範疇が持っていた形態統語的特徴の喪失という。

と指摘している。以上を踏まえて、本節では間接関与構文の表現類型を確認したい。まず、間接関与構文を使用しない無標の形式、つまり、助動詞・補助動詞を脱落させたものと比較してみよう。

- (26) a トマトが美味しくなってくれた ?かもしれません/?に違いない。
b トマトが美味しくなった かもしれません/に違いない。
- (27) a 雪に凍られた ?かもしれません/?に違いない。
b 雪が凍った かもしれません/に違いない。
- (28) a あの車が信号を無視してきた ?かもしれません/?に違いない。
b あの車が信号を無視した かもしれません/に違いない。

周知のように、表現者の認知（知識）を表すものは事態の真偽に関わるために、通常「かもしれません」や「に違いない」などの蓋然性のモダリティを後続させることができる。上記(26b) (27b) (28b) が不自然な文にならないのは、話者の内面にある感情から独立した客観的な事実として叙述することが可能であるためである、故に「演述型」表現に属する。一方、(26a) (27a) (28a) の間接関与構文の場合は、必ず動詞事象の受け手の存在を要求し、想定されていない意外な動詞事象に対する受け手の感じ方を表すため、「かもしれません」や「に違いない」のような蓋然性モダリティの接続が不適格となる。故に、「情意表出型」の表現と見られる。

2.2.2. 利益と被害

前節では、間接関与構文の表現類型を「情意表出型」とした。ここでは表出する「情意」の具体的な意味内容に注目する。間接関与構文は、ほとんどの場合、受け手に対する「利益」、または「被害」の意味が義務づけられている。

- (29) 最近、風呂上がりに凍りかけのフルーツゼリーを食べるのが最高に美味しいのでハマっている 2 時間くらい前に冷凍庫に入れておくと程よく部分的に凍ってくれて、キンキンに冷えた感じがたまらない。
(Twitter 2018.08.31)
- (30) 綺麗な雪の上歩くこと30分、とても素敵で感激でした。しかし、明日冷えて凍られては、危険のこと考えて、玄関周辺の雪を排除してみました。ちょっと疲れる。
(Twitter 2016.01.30)
- (31) メールスレッドを無意味に変なところで新しくしまくった上に、最初に質問してたことを見落としてくるやつ本当に不快なだけ
(Twitter 2010.10.28)

後続文脈からも見られるように、(29)の授受構文は、「たまらない」という望ましい事態、つまり利益の意味と関係し、(30)の受身文や(31)の移動構文は「危険」「不快」という望ましくない事態、つまり被害の意味と繋がる。さらに、無標形式に比べてみると、上掲(26)～(28)の対照例が示すように、a類の間接関与構文は、評価に関わる種類の事象(利益か、被害か)しか喚起させないのに対して、b類の直接関与構文の後ろには、ニュートラルな事象も、望ましい事象も、望ましくない事象などいずれも自由に接続させることができることが分かる。

2.2.3. 受け手側視点維持機能

現代日本語の間接関与構文は非意図的動詞事象を構文化することができる。ここでは、なぜこのような表現形式を用いることができるのかという疑問について考察したい。

まず、次のテクレルを用いる用例(32)～(28)と、テクレルを落とした対照例(27)'～(28)'を比較してみよう。

- (32) 彼女と同じ思いの医者が増えてくれることを望みます…。…
(32)' 彼女と同じ思いの医者が増えることを望みます。
(33) この身体の脂肪が気温で溶けてくればいいのに、とか思います(笑)
(33)' この身体の脂肪が気温で溶ければいいのに、とか思います(笑)

上記の用例において、非意図的動詞テクレル構文(32)～(33)は、文中の補助動詞クレルを脱落させても、(32)'～(33)'のように、ほぼ原文と同じ意味を維持して表現することができる。つまり、「事象の陳述+話者の気持ち」という複文で表しても十分である⁷⁸。それにもかかわらず、現代日本語では複文構造を使わずに、間接関与構文のような複雑述語を多用している。なぜだろうか。

これは、日本語の文脈構築の特殊性から生み出された傾向であると考えられる。日本語の文脈構築について、奥津(1983:78)は「一度立てた主語は、必要がない限り、途中で変えない」という「視点固定」の原則を指摘している。この原則により、日本語は、上記のような関与構文を使用すれば、主語を頻繁に変更せずに、視点を維持することができる。そうでない場合は、「脂肪が溶けた、(私は)嬉しかった」のように、視点を一々シフトしなければならない。次の用例は、テクルやレル・ラレルによって、文脈の視点を維持する一例である。

- (34) 「人虎伝」では、李徴は寡婦との逢瀬をある一家に妨げられ、その妨げてきた一家を焼き殺した因果応報で変身したとされているのに対し、中島は変身の理由を純

⁷⁸ 実際には、「医者が増えてくれた」、や「脂肪が溶けてくれた」のような会話の参与者から独立した事象に関して、英語や中国のような分析的な言語ではこういった表現が好まれる。

粹な内因性に求め、芸術家の実存の内面（芸術家の運命の悲哀や狂気）を告白的に描いている。

(Wikipedia⁷⁹)

この用例において、「妨げてきた」は、前文の「妨げられ」と一致して、視点を受け手側「李徴」に設定する役割が果たされている。

以上から、間接関与構文は、共通点として、受け手側に視点を固定する機能があると考えられる。

2.2.4. 文体の特徴

第2章～第4章における用例調査によって明らかになったように、間接関与構文の分布には強い文体的な偏りがある。直接関与構文と異なって、文章語の性質が強い『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）からの用例は極めて少ないに対して、口語体での使用が多い。特に、話し言葉に近いTwitterのつぶやきからは多くの使用例が見られる。その原因は、本構文の場の依存性や感情表現に関わる性質などが関与すると考える。

2.3. まとめ

以上考察したものをまとめると、直接関与構文に比べて、間接関与構文に使われる助動詞・補助動詞はさらに形式化が進んでおり、語形などが前者より限定的であることが分かる。特に、間接関与構文は話し手の心の中で、発生した事態についての評価を表出する文脈に限定されることが特徴である⁸⁰。このような共通性は「無関係な動詞事象の実現に対する把握」という統一的な枠組みで分析することができる。

3. 間接関与構文の成立原理

以上、間接関与構文の様々な特徴や傾向を考察した。これらを踏まえて、本章では間接関与構文の成立について議論する。まず、3.1.では「方向性」に着目して、間接関与構文と直接関与構文の差異を示す。3.2.では、「主観的把握」と「私的領域」の特性から、間接関与構文の成立原理を求める。なお、ここで展開する考察は主に前3章が提唱した「方向性による構文化の非対称性」に基づいている。

3.1. 「方向性」による構文の非対称性

まず、助動詞・補助動詞全体の特徴に注目したい。

⁷⁹ <https://ja.wikipedia.org/wiki/山月記>

⁸⁰ 間接関与構文の形式、意味・機能、文体的な特徴に関して、他にも様々な傾向が見られるが、ここでは割愛する。

現代日本語は、「来る」、「行く」、「くれる」、「あげる」、「やる」などのような方向性意味を持つ動詞を用いて、コンテキストにある空間、時間、または話し手/非話し手の遠近関係を分析的に指示する傾向がある。例えば、寺村（1982）、山田（2004）などの研究によると、文の参与者に関しては、話し手側を参照点として、動詞事象の求心的（話し手側指向）な関与、あるいは遠心的（話し手側指向）な関与を表すという「方向性」の対立が存在する。

この方向性の対立に関して、古賀（2008）は移動構文と授受構文を比較した上で、「順行範疇」／「逆行範疇」、「利益」／「不利益」⁸¹の対立を軸にして、用法分布をまとめた。本章では古賀（2008）の考察をもとに、さらに動作主の意図性の有無によって、次のように下位区分を行った。ここで特に注目すべきところは、網かけ部分で示される用法分布の非対称性である。（「φ」は、該当用法が基本的に排除されることを示す。）

【表 5-1】 求心型範疇と遠心型範疇の意味用法

	求心型範疇	遠心型範疇
中立	テクル/レル・ラレル/テクレル	動詞の無標形
不利益	意図的テクル/レル・ラレル	意図的テヤル
	非意図的テクル/レル・ラレル (①)	φ 非意図的テヤル (②)
利益	意図的テクレル	意図的テヤル
	非意図的テクレル (③)	φ 非意図的テヤル (④)

網かけ部分①～④の具体的使用例を見てみよう。

不利益：

(35) = ① 医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断ってくる。

(36) = ② *医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断って行く/やる。

利益：

(37) = ③ 相手の選手が急に倒れてくれたおかげで優勝することができた。

(38) = ④ *うちの選手が急に倒れてやったので、相手のチームが優勝した。

【表 5-1】 から見られるように、求心型の列では動詞事象の意図性を問わず、全ての用法が成立する。一方、遠心型の列では、②の非意図的動詞事象、つまり、受け手に対しての働きかけの意味が読み込まれない事象の不利益の授与（いわば、「加害」）＝ (36) と、④の非意図的動詞事象の利益の授与（いわば、「授益」）＝ (38) の形式は認められない。つま

⁸¹ ここでいう不利益、利益は、あくまでも主な傾向であることを断っておく。

り、非意図的動詞の不利益、利益用法が求心型範疇において生産的に言語化され得るに対して、遠心型範疇においてはほとんど成立しないという非対称性が見られる。このような非対称性はそれぞれの範疇の文法化の度合いの差異を意味する。

なぜこのような文法化の度合いに偏りが生じるのか。以下、前節で述べた（求心型助動詞・補助動詞を使用した）間接関与構文のいくつかの特徴から説明する。

3.2. 「主観的把握」と「私的領域」

第2節で考察したように、間接関与構文は、非意図的動詞事象という、受け手から完全に独立した出来事を受け手に関与させる構文であり、情意表出の表現価値を持っている。この場合、無関係な出来事をあえて関係づけるためには、事態に対する主観的な把握のプロセスが必要とされる。池上（2011：52）によれば、事態の把握には「主観的把握」と「客観的把握」の2つの基本類型がある、本研究でいう日本語の主観的把握は次のような特徴がある。

- (39) 「主観的把握」：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

池上（2011：60）は、「日本語のさまざまな文法的手段の機能には、〈事態〉そのものがどうなっているか、というよりも〈話者〉との関わりを示唆する意味合いが多く含まれている」と指摘し、受動態、授受動詞、移動動詞を例として取り上げている。また、「日本語話者にとって事態が（典型的には）〈話者〉（ないしは、〈話者〉の共感する〈当事者〉）との関連で捉えられ、意味づけされるのが自然で、場合によっては、中立的に捉え表現する方が困難である」と、日本語が主観的把握を好む言語であると捉えているが、なぜこのような文法的手段が実現されているのかは言及されていない。この点に関して、益岡（1997：30）が内的状態述語（つまり、人物の内的世界の事態を表すもの）の人称制限⁸²について論じる際に提唱した「私的領域」に関わる語用論的な原則が非常に示唆的である。

- (40) 私的領域に属する事態の真偽を断定する権利は、当該の人物に専属する。したがって、他者の私的領域に属する事態の真偽を断定することによってその人物の権利を侵害することは回避されるべきである。

⁸² 内的状態を直接に表出する文は、主語が一人称の場合には、「僕は寂しい。」「僕は芸術家になりたいよ」のように自然な表現となるが、三人称の場合には、「？太郎は寂しい。」「？弟は芸術家になりたいよ」のような断定形が不自然な表現となりやすい。

方向性から考える会話の参与者への事態の関与は、通常二種類が想定される。一つは、話し手側参与者への関与（いわば、求心型関与）であり、もう一つは非話し手側参与者への関与（いわば、遠心型関与）である。関係性のある事態の場合は、真偽に関する認識論的問題（つまり、演述型）であるため、主観的な把握を要求せずに、話し手側へも、非話し手側へも対等に関与させることが可能である。故に、直接関与構文は、求心型範疇においても、遠心型範疇においても発達している。

一方、受け手から独立した関係性の無い事態の場合は、様相が異なる。なぜなら、このような間接的な関与は、主観的な把握主体を要求することで、心理的述語（「悲しい」、「嬉しい」など）と高い類似性を持つ。言ってみれば、益岡（1997）が言う「私的領域」に属する事態である。

- (41) この傷、明後日には治ってくれると信じている。
- (42) 押しボタン式で変わる信号を無視してくるとかすごいよね。
- (43) ?この傷、明後日には治っていてあげる/やる。
- (44) ?押しボタン式で変わる信号を無視していく/やるとかすごいよね。

例えば、(41) (42) のように、「傷が治る」や「信号を無視する」という非意図的な事態の求心型な関与は、話し手を指向するために、主観的に把握することができる。一方、(43) (44) の遠心的な関与は、無関係な事態の実現による非話し手側への心的な状況の影響を、話し手側が勝手に判断するという発話行為になってしまう。この場合、他者の私的領域に属する心的状況を断定する行為になる恐れがあるため、通常会話において回避されている。故に、遠心型範疇の用法が比較的制限されている。

以上のように、「間接関与構文」の成立、そして求心型範疇と遠心型範疇の文法化の度合いの差異は、「主観的把握」や「私的領域」に関わる原則から説明できる。間接関与構文の成立は、対応する形式が一人称側を受け手とする文脈で繰り返して使われることにより、主観的な把握という意味プロセスが定着することで起こる。

4. 本章のまとめ

本章で取り上げた観点は、以下のものである。

- 4-I 3形式を述語とする間接関与構文には様々な構文、意味・機能、文体的共通性が見られる。直接関与構文に比べて、間接関与構文に使用される助動詞・補助動詞はさらに形式化が進んでおり、語形などが前者より限定的である。特に、間接関与構文は話し手の心の中で、発生した事態についての評価を表出する文

脈に限定されることが特徴である。このような共通性は「無関係な動詞事象の実現に対する把握」という統一的な枠組みで分析することができる。

4-II 間接関与構文の成立は、助動詞・補助動詞の「方向性」に強く関わる。本章では求心型範疇と遠心型範疇の文法化の度合いの差異を「主観的把握」や「私的領域」に関わる原理から、無関係な事態の主観的な関与は話し手側へ向かう「求心型」構文に適合することを説明した。間接関与構文の成立は、対応する形式が一人称側を受け手とする文脈で繰り返して使われることにより、主観的な把握という意味プロセスが定着することで起こると考えられる。

また、これまでの論述より、本研究の主な課題である問題点 1 と問題点 2 は次のように帰納・解釈することができる。

問題点 1-ヴォイスとしての間接関与構文の使用実態に関する記述について：①、参加者の受け手に関しては、心理的（内的状態）述語のように、人称制限があり、ほとんど一人称を対象とする。②、先行研究で指摘されているテクレル、テクル、レル・ラレルの非能格性制限（つまり、非能格動詞と他動詞のみに接続する）に反して、非対格動詞（本稿の非意図的動詞に相当する）を前接する構文も発達していることが本研究で明らかになった。③、典型的なヴォイス構文と異なって、間接関与構文には文体の偏りがある。主に口語体で使用されており、不特定な人に向けて書かれた文章ではほとんど出現しない。換言すれば、文脈の依存度が極めて高い構文であることが調査で分かった。

問題点 2-「無関係な事態の関与の統語的实现」について：間接関与構文の成立は、「独立した動詞事象の実現に対する話し手の把握」という統一的な枠組みから説明できる。助動詞・補助動詞の「方向性」に着目すると、「求心型」（話者側に向かうタイプ）と「遠心型」（非話者側に向かうタイプ）の文法化には度合いの差があることが本研究の調査で分かった。「事態」と「受け手」の間に、統語的な関係が存在していなくても、両者を関係づけるためには主観的な把握が必要である。話し手側へ向かう「求心型」は一人称側を把握主体（認識・知覚する主体）にすることから、この条件に合致する。さらに、日本語における一人称視点の主観性が特に高い原因は、現代日本語の「話し手中心」の視点構図（事態の中に身を置き、事態を直接体験する構図）や事態把握の傾向（他言語に比べて、話し手の視点が容易に移入されるために、関係の薄い事柄でも主観的に把握することができる）に帰納して考えられる。

第6章 日本語間接関与構文のモダリティ性

1. はじめに

前章では、現代日本語の間接関与構文の構文的側面を中心に、直接関与構文との比較を通じて考察した。本章では、間接関与構文の意味内容をより詳しく考察し、間接関与構文のモダリティ性を主張する。まず、第2節で、間接関与構文の具体的な意味内容「利益」と「被害」を分析し、その発生背景について論じる。次に、第3節で間接関与構文のモダリティ性を論じる。第4節で利害性の意味の表現方法を中国語との比較から考察する。最後に第5節ではまとめを行う。

2. 「利益」と「被害」について

第6章までは、間接関与構文において、非意図的動詞事象を構文化することができるという統語的な特徴を指摘してきた。本節では、このような特徴と間接関与構文の意味の関係に注目して、テクレル、テクル、レル・ラレルの「利益」、または「被害」の意味の発生背景を詳しく考察することを目的とする。

2.1. テクレルの「利益」

まず、テクレル間接関与構文の意味内容について紹介する。

テクレル間接関与構文の意味内容に関しては、「利益」としての解釈が典型的である。

- (1) ララはその場に座り込み、電話機を見つめながら、ベルよ鳴ってくれ、と祈り続けた。

(『星の輝き』シドニィ・シェルダン (著) /天馬龍行 (訳))

- (2) 反省のかけらもない声でふたりは笑った。美奈子の回復が遅れてくれてわたしのほうは助かった。

(『あした蜉蝣の旅』志水辰夫 (著))

(1) (2) は、後続の「祈り続けた」、「助かった」から、述べられている事象は話し手にとって好都合であることが分かる。

一方、用例調査では、次のような「被害」の意味を表すテクレル間接関与構文の使用も散見される。

- (3) まあネトウヨの大ボスが文章をまともに読めませんからね。子分たちに学があってくれては困るのでしょうか。支持してくれなくなりますもんね。

(Twitter 2019.07.07)

- (4) 特急利用 35 回目。電車が 20 分も遅れてくれては利用するしかない。仕事の期間延長されたし、40 回が見えてきたわ

(Twitter 2013.05.09)

(3) (4) は、後続の「困る」「利用するしかない」から、述べられている事象は話し手にとって不都合であることが分かる。ここで、テクレル間接関与構文は受益の意味に限らず、被害の意味でも用いられることが示唆されよう。

2.2. テクルの「被害」

次に、テクレル間接関与構文の意味内容を確認する。

テクレル間接関与構文に関して、従来の研究においては、「被害」としての解釈がメインになっている。

- (5) なんだこの病院受付 患者舐めてんのか... 質問に答える度に鼻で笑ってくるの腹立つなあ

(Twitter 2020.04.25)

- (6) 若い女にだけタメ口を使ってくるジジイ大嫌いだから滅んで欲しい。

(Twitter 2021.10.08)

(5) (6) は、後続文脈「腹立つ」「大嫌い」から、述べられている事象は話し手にとって望ましくないことが分かる。しかし、(7) (8) のように、話し手にとって望ましい状況を表す「利益」の用法も決して存在しないわけではない。

- (7) 昨日のコンクールでソプがめちゃくちゃ号泣してるのみてるのほんと辛かった、めっちゃ頑張ってたのにね、ハルぴっぴがそれみて俺の肩で泣いてくるのほんとかわいい笑笑 一年生来年頑張てね!!! 応援してるよ!!!

(Twitter 2020.01.19)

- (8) 猫には、ゆっくり両目を閉じて見せると、人間からの愛情表現になるらしいです!猫の方も、ゆっくり両目を閉じてくると、愛情表現らしいです。たまにやられます!これも悶え案件です(笑)

(Twitter 2020.12.03)

(7) (8) は、後続文脈の「ほんとうにかわいい」「愛情表現らしいです」から、述べられている事象は話し手にとって望ましいことが分かる。

以上の使用例から、テクレル間接関与構文に被害や中立の意味に限らず、受益でも用いられることが示唆されている。

2.3. レル・ラレルの「被害」

最後に、間接受身の意味内容に注目する。

間接受身構文は広く「迷惑受身」とも呼ばれることから分かる通り、出来事から受け手が間接的に不利益を被るという意味を表す。

(9) 真正面から写真撮りたいのに猫に目を閉じられまどろまれる。

(Twitter 2014.02.11)

(10) 国難の今安倍総理に病気になられては本当に困りますがご病気の際は安静に休養できる環境が必要です。この病気は無理が一番いけません。

(Twitter 2018.07.16)

(9) (10) では、それぞれ期待に反することを意味する「のに」や後続文脈「困ります」によって、述べられている事象は話し手にとって望ましくないことが分かる。

しかし、迷惑または被害の意味が表れないものも存在する。それが (11) (12) である。

(11) 昔、夜光虫に光られながら、泳いだなあ♪機能美溢れる提督指定の水着で...

(Twitter 2019.08.24)

(12) 今年もやってくれました～渋谷着いたらリムジンが迎えに来てみんなに騒がられながら乗車して東京 tower お台場 レインボーブリッジ連れてって来て優雅なドライブしてきた。

(Twitter 2015.10.04)

以上、間接関与構文は典型的に、テクレルが利益、テクルとレル・ラレルが被害の意味を表しているが、その反対側の意味も成り立つことを確認した。

2.4. 「利益」や「被害」の発生

では、なぜ間接関与構文において、動詞事象に対する「利益」や「被害」の意味が表され得るのか。ここでは、比較的研究の山積している間接受身構文を挙げて、通時的な観点から説明する。

間接受身構文の意味内容に関して、高見・久野 (2002:246) は「被害受身文の機能は、その主語指示物が、埋め込み文によって表されている事象により迷惑を被っており、その迷惑が「ニ」格名詞句の指示物のせいであると考えていることを示すことである。」と指摘し、間接受身構文は専ら迷惑、または被害の意味を実現すると定義づけている。しかし、本研究による用例調査の結果からも分かるように、非迷惑型の間接受身構文も存在する (用例 (11) (12) を参照)。実際、非迷惑型の間接受身構文の使用は、古代語からも観察されていると指摘されている。例えば、堀口 (1983)、柴谷 (1997・2000)、川村 (2009・2012)、山口 (2018) などは、自動詞による受身の使用が古代語和文にも存在すると指摘している。

(13) あわ雪に降らえて咲ける梅の花 (沫雪尔所落開有梅花)

(『万葉集』 一六四一)

(14) 夕ぐれ・あかつきに、川竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる。

(『枕草子』 一一九段 あはれなるもの)

(13) (14) の受身はそれぞれ、受け手の「梅花」「川竹」に、直接的に「降る」「吹く」という解釈が可能であるので、本研究の基準から直接受身とも認められる。たとえこれらの用例を間接受身と認めていても、意味の面での「迷惑」などが導入されている用法とは考え難い。なお、ここで重要なのは、形式上、古くから自動詞でも受身構文に進入していたという事実そのものである。

では、迷惑型の間接受身はどうだろうか。これに関して、次の他動詞を用いた例を間接受身と見る研究がある。

(15) 御前の竹を折りて、歌よまむとてしつるを、『同じくは、職にまゐりて、女房など呼び出できこえて』と持て来つるに、呉竹の名を、いととく言はれていぬるこそいとほしけれ。

(『枕草子』 一三一段・五月ばかり、月もなういと暗きに)

上記の用例は確かに、意味の面で「迷惑(被害)」が読み取れるが、本稿で定義した間接受身とは些か性質が異なった部分がある。なぜなら(15)の「呉竹の名」は受け手の思考領域にあるもの、いわば、関係物と捉えることができるからである。受け手の思考領域にあるか否かの判断に関しては、名詞句の定性(定/不定)を指標とすることが有効であろう。「呉竹の名」は、述語動詞「言ふ」が実行される前に、すでに話し手の既知情報として限定されている名詞である。つまり、(15)の用例も本稿で定義した「間接受身」とは言い難い。この点に関して、川村(2012:147)から次のような指摘がある。

古代語間接受身の多くは、主語者が文に述べられた物理的動きを直接被ったり、心理的態度などの対象となっているもの、あるいは主語者の所有物・関係者が動作対象となるものである。少なくとも、現代日本語では許容される「娘に交通事故を起こされる」「子に泣かれる」「親に死なれる」などに相当する例、また、家の中から外を見て「こう大雨に降られては花がだめになってしまう」とつぶやくような例は存在しない。
(=中略=) 明らかに〈はた迷惑〉を表すと言えるものは上代には見出しがたく、中古でも、知覚行為によるものを除けば限られたものしかない。 (下線筆者)

「迷惑」意味の発生を伴う間接受身構文の発達に関して、通時的な研究を行なったものには、堀口(1983)や山口(2018)などがある。堀口(1983・1990)は、間接受身の発

達の下地として、前述(15)の用例を「競合の受身⁸³」と呼び、「近世以降⁸⁴の例しか見出していない。近世後期になれば多彩な例を見ることができる。」と指摘している。また、山口(2018)の調査では、迷惑受身の使用は近世前期以降に確認したとの結果が示されている。

近世前期以前にみられる用法(当事者の受身)は、受身文の主語が動詞の表す事態に参与する項となる。この場合、受身文の主語への影響は前接動詞の表す事態から受ける。従って、非当事者の受身のように事態に対する見方(利害性)は、必要とならない。つまり、近世前期以前の受身文においては、受身文自体は利害性に関して問わない構文であり、受害の意味や受益の意味が読み取れる場合は、文脈や動詞の語彙的意味がその意味を担っているといえる。

以上、本研究で取り上げられている間接受身文は、形式上古くから存在していたが、意味内容の面においては、新しい用法であることを確認した。

では、動詞事象に対する「利益」や「被害」の意味の発生は何の背景に関わるのか。

この問題に対して、山口(2018)は、テモラウ構文と受身文との構造的類似性(格体制)や意味的対照性(利益/被害)を視野に入れて、受益専用形テモラウが発達したことによって、それまで授益・被害に関わらず事態当事者間の広義の受影関係を表していた受身文が、受害構文として傾斜・確立したと主張している。

この時(近世後期)に受益を表すテモラウの表現可能な領域と対照的な関係を成すように、受身文が受害を表す構文として前接動詞を拡大させたために、受身文においても新しい用法(迷惑型の間接受身構文、筆者注)が可能になった。

つまり、受益専用形テモラウの発達を契機として、その対義領域にある「迷惑」も専用構文を確立させていたという「類推」現象との考えである。このような考えは、異なった構文の間の意味的つながりを問題にするものと見られ、第一章で紹介した「外的連関(益岡 1992: 13)」の観点に当てはまる。

しかし、ここで、意味領域の類義性や対義性に基づいた類推の必然性が疑われる。なぜなら、自然言語において、「受益専用構文」が確立したため、その対極的な意味領域を成す「被害専用構文」も応じて発生しなければならない理由が保証されない。また、テモラウ領域に

⁸³ (15)の用例は、「呉竹を見せられた清少納言が先にその名を言ったので、それを教えようと思っていた人々がまいった」ということを頭弁が清少納言に語る言葉である。このような「主体があることをしようと望むのに、競合する相手が先にそれをしたためにその望みが失われる」が迷惑を被ることにつながると思う。

⁸⁴ 時代区分について、本研究では上代(奈良)、中古(平安)、中世(鎌倉・室町)、近世(江戸時代)、近代(明治以降)の五分法に従う。

おいても、決して次の(16)のような受益用法専用とは限らず、(17)の被害用法も散見する。

(16) 研究はべつにやりたくないけど積極的に退学するのもいやだから、大学に壊れて
もらって仕方なく退学したい。

(Twitter 2021.5.19)

(17) SD 復活 128GB がそう簡単に壊れてもらっては困る

(Twitter 2019.11.26)

いわゆる受益専用構文の確立と被害専用構文の確立について、本研究は、互いに条件関係とするものではなく、平行的に進行していた変化によるものであると考える。その変化は、あくまでも形式の方が先行していて、いわゆる「利益／被害」の意味は上位概念「受影」として、言語使用の場面で臨時的に加味されるものであると考える。

では、「受影」専用構文が確立した背景は何か？ここで、これまで論じてきた「間接関与」のプロセスが強く関わってくる。

まず、話し手が会話の中で無関係な出来事を参加者に関与させようとする動機を考慮しておきたい。池上(2012)が指摘しているように、「話者は問題の事態の中の自らにとって関与性があると判断される部分だけを言語化すればよい」。しかし、我々が論じてきた間接受身構文はこの原則に違反し、話し手と関わらない独立した出来事を敢えて言語化している。筆者は、このような構文的仕組みによってこそ、動詞事象が参加者に一定の心理的な影響を及ぼすという推論が生まれると考える。このような過程を可能にしたのは、まさにこれまで論じてきた話し手中心の視点構図の確立⁸⁵である。

実際、近世以降の間接受身構文の確立は、前接動詞の増加や口語会話に忠実した文献の増加と正の相関性が見られる。【表 6-1】では筆者が調査した各時代の作品におけるル・ラル例の用例数や会話文率⁸⁶を示している。ここで、前接動詞の多様化や近世以降のル・ラル例の会話文率の大幅な増加が窺える。(網掛け部分に注目)

⁸⁵ 本研究では「日本語が通時的に話し手領域への移動か、話し手以外の領域への移動かを区別しないことが可能な運用法「融合型」から、両者への移動を厳密に区別する運用法「対立型」へ変化した(近藤 1986、田窪 1990、森 2010、澤田 2011 など)」ことが関係すると考える。

⁸⁶ まず、歴史コーパスによって、各時代のル・ラル使用例を抽出する。次に、会話文に出現したル・ラル使用例を統計し、それぞれの比率を算出する。

【表 6-1】各時代⁸⁷のル・ラル前接語彙数／用例数及び会話文率

時代区分		ル・ラル用例	前接動詞異なり数	前接動詞の比率	会話文	ル・ラル会話文率
中古	平安	4414	415	9.4%	1318	30%
中世	鎌倉	3552	436	12.3%	797	21%
	室町	3952	665	16.8%	1829	46%
近世	江戸	3663	737	20%	2371	65%

これまで指摘してきたように、間接受身は、場面や文脈に強く依存する用法であり、現代語でほとんど一人称側を受け手とする口語体で使用されている。一方、近世以前の作品は作者が俯瞰的（あるいは、超越的）に語る文体構造が中心であった。作者の語りが内包されているため、会話文においても、人物の言葉を間接的に伝える部分が含まれ、完全な直接話法が多用されてはいなかった。このような文体では、作中人物の視点から語る「真」の会話が形成されにくく、当事者が自分から独立して行われる動詞事象を主観的に把握することが困難であった。一方、近世以降は「浄瑠璃」「滑稽本」などの口語的性質がより顕在化した文献が大量に増えていった。このような語り物文芸においては、完全な直接話法によって登場人物の言葉を演じる特徴があり、話し手の主観的な把握を条件とする「受影」などをより鮮明に表現することができると思う。

つまり、本研究では、いわゆる間接受身の出現は限られた文献資料の性質に関わる、漸進的な現象であると考えられる。ある時期まで間接受身の使用が見られなかったことは、決してこの時期において当該用法が全く形成していなかったことを意味するわけではない。山口（2018）は、間接受身と判断された僅か 5 つの用例から、当該用法の使用は近世前期以降に確認されると指摘しているが、実際、近世前期以前から、すでに用法が萌芽していたことも十分考えられる。

レル・ラレル間接関与構文と同様に、テクレルやテクルの具体的な意味内容も、助動詞・補助動詞の語彙的な意味と直接には関係せず、語用論的な要因によって左右されている。被害か受益かという点に関しては、恣意的なものであり、事象の接近をマイナスに評価すれば、心理的な負担感や嫌悪感を形成し、プラスに評価すれば、利益・喜び・歓迎などを形成する。一方、中立となる場合は、視点の標示機能のみが働き、評価の側面が背景化されると考える。

⁸⁷ 時代区分について、本研究では上代（奈良）、中古（平安）、中世（鎌倉・室町）、近世（江戸時代）、近代（明治以降）の五分法に従う。

以上、間接受身構文の意味内容「利益」や「被害」を確認し、意味発生の原理を間接受身の通時的発達から考察した。間接関与構文は、「求心的」構造を用いて、受け手への強制的な関与を表すことができる。この場合、迷惑、被害を受けるというよりも、話し手の言表事態に対する心的態度の表明としての運用が義務付けられている。次節では、この「心的態度の表明」のモダリティ性を論じる。

3. 間接関与構文のモダリティ性

前節まで、間接関与構文は意味内容として、典型的な傾向がある（つまり、テクレル≡利益、テクル≡被害、レル・ラレル≡被害）ものの、その逆方向の意味用法もあることを確認し、その成立の背景を通時的な観点から考察した。ここで、日本語の間接関与構文は、単純な「利益」や「被害」ではなく、共通点として、出来事に対する受け手側の心的態度の表明であることが分かった。本節では、間接関与構文のモダリティ性を論じる。

3.1. 間接関与構文のモダリティ性

まず、モダリティの定義を確認する。仁田（2009：19）は、〈命題（言表事態）〉と〈モダリティ（言表態度）〉を次のように区別している。

〈命題（言表事態）〉とは、話し手が外界や内面世界—現実—との関わりにおいて描き取ったひとまとまりの事態、文の意味内容のうち客体化・対象化された出来事や事柄を表した部分である。〈モダリティ（言表態度）〉とは、現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態—文の対象的な内容—に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表した部分である。

2節で論じた動詞事象に対する話し手の心的態度を表す間接関与構文は、意味の面において、モダリティ的な特徴を持っている。この点は直接関与構文と明らかに異なる。まず、助動詞無標記化からその違いを考察する。

これまで論じてきた間接関与構文の本質は、焦点の移動（受け手に対する視点の接近）ことにあり、動詞事象から受け手が影響を受けるという典型的な意味特徴をもたらすことである。このような性質は、直接関与構文と比較してみると鮮明になる。直接関与構文の場合は、動詞事象を話し手の感情や態度から独立して描くことができるため、一種の命題として捉えられる。例えば、次のような中心的なレル・ラレル受身文（いわば、直接受身）は能動文と同一の事象に対応する。

- (18) 先生が太郎を褒めた。
- (19) 太郎が先生に褒められた。

(20) ~ (31) の無標形式や直接関与の否定化がごく自然なのに対して、(32) ~ (34) の間接関与構文否定文の容認度が大きく下がっている⁸⁸。その理由について、森山 (1988) は間接受身構文に対して次のように指摘している。

格関係を見ると、迷惑受け身 (≡本稿でいう間接受身 筆者注) は、もともと独自に成立している動きに対して、その動きに対する非参画者 (参加者 筆者注) を、いわば無理矢理に関与させるという意味になっている。(=中略=) 動きに無理に関与させるという迷惑受け身の意味に対して、否定は、いわば、つなげつつ、そのつながりを否定し、=中略=その関与関係自体を否定することになるので、情動的に、表現そのものが無意味になることになる。 (下線筆者)

直接関与構文の否定文が高く評価されるのは、格関係のある動詞事象が成立したためであると思われる。つまり、ここでの否定の対象は、受け手の視点からしか見られない出来事との主観的なつながりではなく、第三者 (傍観者) から中立的に捉えられる事実である。一方、(32) ~ (34) の間接受身構文の否定化が低く評価されるのは、参与者と格関係を持たない (つまり、森山 1988 のいう「独自に成立している」) 動詞事象を参与者に「無理矢理」に関与させることによる。なぜなら、このような無理矢理ともいえる関与は、話し手の発話時における臨時的な心的態度の表出であり、わざわざ持ち出した心情をまたわざわざ否定すること自体が表現的に無意味になりやすいためである。この性質は、次のような否定形を持たないモダリティ助動詞「だろう (推量)」、「う・よう (意志)」と類似している。

(35) ??彼は日本人だろうではない。

(36) ??是非一度試してみようではない。

以上、無標構文との対照や、否定化制限の差異から間接関与構文のモダリティ性を論じた。ここで注意したいのは、間接関与構文における「心的態度」の表明は、主に助動詞や補助動詞の付加によって実現されるものであり、決して主動詞の語彙的意味から導入されるものではない (つまり、間接関与構文において、利益や被害の意味は語彙的意味から束縛されていない) ことである。このような事実は、構文全体のプラス/マイナス評価と主動詞のプラス/マイナス意味との相違からも窺える。

(37) しかし肝心の大臣としての仕事に見るべきものもなく、つまり政治家としての能力とは別のところで好印象と評価を得て出世されては堪らない。

⁸⁸ (32) ~ (34) の用例は、「保健所が検査を断ってこなかったことは意外だ」などのように、復文の形で容認性の高い表現になり得るが、ここで重要なのは、単文レベルでの容認差である。つまり、単文レベルでは上記の表現の否定文、特に過去否定が簡単に成立しないと考えられる。

(Twitter 2019.09.12)

(38) 電車が遅れてくれて逆に早く家に着けるっていうね

(Twitter 2021.10.05)

(37) の「出世する」は通常プラス評価の動詞であるが、受動文化されると、構文全体が「堪らない」というマイナス評価の意味になっている。(38) の「遅れる」は通常マイナス評価の動詞であるが、授受構文化されると、構文全体が「早く家に着ける」というプラス評価を表すようになっている。

モダリティ形式について、仁田(1989:35)は、①過去になるか否か、②否定になるか否か、③話し手以外の心的態度を表すか否かという要件の充足度によって、「真正モダリティ」と「疑似モダリティ」との区別を連続的に捉えている。

真正モダリティとは、命令を表す「シロ」、意志を表す「シヨウ」などが代表するような、「過去になることもなければ、否定になることもない」且つ、「話し手の心的態度に限られている」形式であり、主に発話・伝達を表すものに見られる。これに対して、疑似モダリティとは、「形式自体が、過去になったり、否定になったり、話し手以外の心的態度に言及したりするもの」であり、いずれも言表事態を表すものにしか存しない。

この点において、本研究で取り上げている間接関与構文は、過去形式になったり、未来形否定になったりすることもあるため、三つの要件の充足度が比較的低いと見られる。つまり、言表事態を表す疑似モダリティと認められる。では、間接関与構文のモダリティ性は日本語のモダリティ全体においてどのように位置づけられるのか、次節で詳しく考察する。

3.2. 間接関与構文のモダリティの位置づけ

まず、日本語のモダリティの形式分類を確認する。

井上(2006:137)によると、モダリティ表現には、次のように、1) 述語の活用形、各種の述語付加形式、2) 文副詞(文副詞相当表現)、3) 感動詞(間投詞)・間投助詞、4) イントネーション、5) ある特定形式の特定の用法などがある(紙幅の都合上、一部の用例を割愛する)。

述語の活用形：行く(断定)、行け(命令)、行こう(意志・勧誘)

述語付加形式：行きそうだ(兆候)、行きたい(願望)、行くだろう(推量)...

終助詞：いいよ(強調)、いいね(確認)、いいねえ(感嘆)、いいか(質問)...

副詞：たぶん/おそらく(推量)、どうも/どうやら(推定)...

感動詞・間投助詞：あ!(驚き)、え?/あれ?(意外)、これはね、これってさ...

間接関与構文は、主動詞の連用形式に助動詞や補助動詞を接続するため、形式上、述語付加形式のモダリティに相当することが明らかである。

次にモダリティの意味分類に注目する。

モダリティの意味分類については、いくつかの異なった見方があるが、本研究では井上(2006: 137)が整理した次のような分類を参照する。(一部の用例を割愛する)

- 1) 命題内容に対する話し手の判断のあり方を表すもの (判断のモダリティ、対事的モダリティ、命題めあてのモダリティ)
 - a 真偽判断のモダリティ (認識的モダリティ) : 確言 (～φ) 、推量 (ダろ う) 、蓋然性判断 (かもしれない) 、証拠性判断 (らしい) 、当然性判断 (はずだ) 、伝聞 ((～する) そうだ) 、説明 (のだ)
 - b 価値判断のモダリティ (当為評価のモダリティ) : 適当 (べきだ等) 、必要 (なければならない等) 、容認・非容認 (てもいい、てはいけない等)
- 2) 聞き手に対する発話態度・伝達態度を表すもの (発話・伝達のモダリティ、対人的モダリティ、聞き手めあてのモダリティ)
 - a 述べ立て b 表出 (意志、願望) c 働きかけ (命令、依頼、禁止、勧誘)
 - d 疑問・問いかけ・確認 e 強調 など

上記のように、モダリティは、主に命題内容に対する話し手の判断のあり方を表す「命題目当てのモダリティ」と「聞き手目当てのモダリティ」に分かれる。「命題目当てのモダリティ」の下には、さらに「真偽判断のモダリティ」と「価値判断のモダリティ」がある。第2節の考察結果からも分かるように、本研究で取り上げられている間接関与構文のモダリティ的特徴は(1b)の「価値判断のモダリティ」に最も近い。

「価値判断のモダリティ」について、これまでの研究は益岡(2007: 221)や高梨(2010)などが挙げられる。益岡は、「現実像/理想像」という対立(つまり、現実が述語無標形式、理想像が述語有標形式)における理想像を表す表現としている。また、高梨(2010: 25)は「評価のモダリティ」と呼び、「ある事態が実現することに対する、必要だ、必要でない、許容される、許容されないといった評価的な捉え方を示す」ものであると規定した上で、【表6-2】のように整理している。

【表6-2】高梨(2010)による評価のモダリティの意味分類

必要妥当系	a.肯定評価類 (といい、ばいい、たらいい)
	b.妥当類 (ほうがいい、べきだ)
	c.必要類 (なくてはいけない、必要がある)

	d.不可避類 (せざるを得ない、ないわけにいかない、しかない)
	e.その他 (ものだ、ことだ)
不必要系	ある事態が必要ではないという評価を表す (なくてもいい、必要がない、ことはない、までもない)
許容系	ある事態が許容されるという評価を表す (てもいい)
非許容系	ある事態が許容されないという評価を表す (てはいけない、わけにいかない)

例えば、発話時から「お部屋を掃除する」という動詞事象の実現が望ましいと表現する場合には、「お部屋を掃除するといいい／ほうがいい／必要がある／してもいい」といった形式群が用いられ、同一事態の実現が望ましくない場合には、「お部屋を掃除する必要がない／してはいけない」といった形式群が使用される。両氏が定義した評価的モダリティは、いずれも、述語付加形式の有／無によって事態に対して無評価／有評価の対立を区別する体系であるが、有評価の場合は未実現（つまり、発話時から未来へ）の事象に限定されている。

しかし、物事に対しての評価、あるいは価値判断は決して、未実現の事象のみに存在するわけではない。つまり、発話時より先に発生する動詞事象に対しても、評価することが可能である。例えば、「お部屋を掃除する」という動詞事象が実現したことに対して、それが望ましいか、望ましくないという価値判断の心理過程も十分ありえる。ここで重要なのは、【6-2】で挙げたような付加形式があるか否かの問題である。

この問題について、益岡（2007）は付加部におけるモダリティ要素を分類した際、「あいにく」、「幸い」、「残念にも」など付加語を収容するために、「評価のモダリティ」というカテゴリーを設けながらも、「評価のモダリティは、述語の位置ではそれを表すための形式を持たない点の特異である」と述べている。しかし、次の用例のように、既実現の事象に対する話し手の心的態度を表す専用形式（述語動詞の語形変化を伴う形式）は、少なくとも本稿で取り上げた一部のテクレル、テクル、レル・ラレルが当てはまる⁸⁹。

- (39) 雨が降ってくれた。(望ましい事態の実現)
(40) 友達の赤ちゃんが俺の顔を見る度に泣いてくる... (望ましくない事態の実現)
(Twitter 2010.3.28)
(41) 雨に降られた。(望ましい事態の実現)

⁸⁹ ここで注意したいのは、あらゆる「テシマウ、テクレル、テクル」形式が全てモダリティ的意味の担うと主張しているわけではない。例えば、「お部屋を掃除した」に対して、「お部屋を掃除してくれた」のような「望ましい」評価を表す表現が存在するものの、ここでの「くれた」はまだ語彙的な意味が色濃く残されているので、モダリティを表す機能語とは言えない。

「価値判断のモダリティ」として一般的に認められているものには、「適当」（「べき」、「ほうがよい」）、「必要」（「なければならない」、「ざるをえない」）、「容認」（「てもいい」、「てはいけない」）などがあるが、これらの用法との局面の違いにより、筆者は間接関与構文に伴うモダリティ性を「既実現」型の価値判断のモダリティと見て、「利害性のモダリティ」と呼ぶことにする。この種のモダリティは、適当、必要、容認などの「未実現」型価値判断のモダリティと対立する。つまり、両タイプはそれぞれ望ましい動詞事象と望ましくない動詞事象の既実現評価と未実現評価の差異を示すものであるという。「未実現」／「既実現」、「望ましい」／「望ましくない」の対立によって、「価値判断（評価）のモダリティ」には次の四通りの組み合わせがあると考えられる。

【表 6-3】 価値判断（評価）のモダリティ

動詞事象に対する評価	未実現	既実現
望ましい	適当、必要、容認 ...（べきダ...）	利益（テクレル）
望ましくない	非容認、禁止... （てはいけない...）	被害（レル・ラレル、テクル）

以上、間接関与構文のモダリティ性を価値判断（評価）的モダリティの一種——「利害性のモダリティ」と位置づけた。補助動詞のモダリティ性に関して、金水（2004）は、テ形接続助動詞の形式全般に関して、「個々の文脈を取り込んで、推論を導出し、その結果に対して動作主や話し手が「望ましい」「望ましくない」などと評価を与えるようなシステムである」という枠組みを示しているながら、「述語語彙の論理的意味に収まらない意味のあり方を何であれ「モダリティ」という枠組みに放り込んでとりあえず処理してきた」という研究史の経緯を批判している。しかし、本研究で扱う用法、いわゆる間接関与構文は極めて形式化が進んでいるため、広義的なモダリティと考えられる。また、このようなモダリティ性は、他の言語と比較するとより鮮明になる。詳しい考察は次節に譲る。

4. 「利害性」の意味の表現方法の類型論的考察

本節では、中国語との対照から、「利害性」の意味の表現方法について論じる。

前節までは、日本語で間接関与構文が発達しているのは、日本語の「視点の固定化」や「話し手中心」の特徴より生み出された表現であると示してきた。また、これまでの章では、日本語の特殊性を確認するために、間接関与構文が中国語においてほとんど発達していないことを所々指摘してきた。

例えば、間接受身構文について、第2章の用例調査からも見られるように、現代日本語の中では動詞であれば、受身文化できると言えるほど、間接受身構文が生産的に使用されてい

る。これに対して、筆者は大河内（1983）の立場に従い、日本語で広く自動詞に成立する迷惑受身文は、中国語の「被（bei）」構文でほとんど発達していない（「*被孩子起早了〈子供に早起きされた〉」「*被打雷了〈雷に鳴られた〉」）と主張している。また、テクレル間接関与構文に関しても、似たような発達の差異が見られる。第3章では、中国語でも非意図的動詞事象を日本語の補助動詞・助動詞に相当する成分「给（gei）」によって、会話の参与者に關与させることが可能（「别给我掉链子！〈失敗しないでくれ！〉」、「给我下雨！〈雨が降ってくれ！〉」）であり、日本語と同じように、求心型範疇の方に用法が集中していると指摘している。このような用法は文法形式がかなり制限されている（「？小李给我掉链子了。〈李さんが失敗してくれた。〉」「？桃树给我开花了。〈桃の木が花を咲いてくれた。〉」）と分析している。テクルに相当する中国語の「V 来（lai）」構文⁹⁰の考察は別稿に譲るが、やはり、「*雨下来了。〈雨が降ってきた。〉」や、「*对方教练转换战术来了。〈相手のコーチが戦術を転換してきた。〉」のような用法は成り立たない。

以上の現象は、両言語における助動詞・補助動詞を接続する動詞の語彙的範囲の違いを示している。少なくとも、いわゆる非対格動詞（あるいは、非意図的動詞）の接続に関しては、日本語の自由度が高い。このような差異の原因に関して、本研究では、中国語の場合は、日本語のように一人称をデフォルトにするという視点構図がないため、話し手側と非話し手側の関係がより対等であり、関与関係の薄い対象を主観的に把握することができず、間接関与構文を多く産出しないと指摘している。

では、日本語で間接関与構文によって実現される「利害性」の意味は中国語などの他言語においてどのように表現されているのか。まず、各言語において、利害性意味を示す形式が用言複合体のどのような位置に現れるのかという問題を中心に考察する。

日本語の利害性のモダリティはこれまで考察してきたように、主に独立性の低い述語付加形式によって実現されている。一方、文副詞的表現もある程度機能している。具体的には、利害性の意味を持つ次のような副詞⁹¹が挙げられる。

「まさか」「困ったことに」「幸い」「残念ながら」「惜しくも」「不思議にも」「嬉しいことに」「おどろいたことに」「有り難いことに」「せっかく」...

(42) 幸い／せっかく／嬉しいことに／有り難いことに、雨が降った。

(43) まさか／困ったことに、雨が降った。

⁹⁰アスペクト的用法には、ある動作や状態の開始及び継続を表すV起来（qilai）、V开来（kailai）などの形式（天气渐渐暖和起来。〈天気はだんだん暖かくなってきた。〉）があるが、いずれも、客観的な動詞事象としてしか捉えられない。

⁹¹工藤（2000：164）によると、副詞は「それ自身語形変化（活用）をせず、もっぱら用言またはそれ相当の語句を修飾（限定・強調）することを基本的な機能とする語」をいう。通常は、「わざわざ・ゆっくり（と）・すぐ（に）」などの情態副詞、「やや・もっと・非常に・すごく」などの程度副詞、「けっして・おそらく（は）・もし（も）」などの陳述副詞、の三つに下位分類されている。陳述副詞はさらに、叙法、評価、取り立て副詞と分類できる。

(44) 困ったことに、早寝した娘が早起きした。

無論、述語付加形式という形態的手段（下線部分）と文副詞（波線部分）という語彙的手段を同時に使用することもできるが、実際の発話においては、後者の方が補助的（任意的）で、省略されることが多い。

(45) 幸い／せっかく／嬉しいことに／有り難いことに、雨が降ってくれた。

(46) まさか／困ったことに、雨が降ってきた。

(47) 困ったことに、早寝した娘に早起きされた。

以上、日本語の「利害性のモダリティ」は主に述語の部分において、形態的な手段で表現されていることを述べた⁹²。

現代日本語と違って、孤立語の性質が強い中国語や英語などは、以下の用例が示すように、独立性の高い語（文副詞など）、または文の付加という分析的な手段を好み、話し手の態度を明示的に表現する。「利益」や「被害」という利害性の意味を、述語付加形式によって表現する現象はほぼ見られない⁹³。

(48) 受身文：早寝した娘に早起きされた。

〈中国語：早睡的女儿起得也太早了。〉

〈英語：My Daughter got up so early this morning that... 〉

(49) 授受構文：相手の選手が急に倒れてくれた。

〈中国語：对对手的选手突然摔倒了，太好了。〉

〈英語：Fortunately, The opponent suddenly fell to the ground。〉

(50) 移動構文：急いでいる時に限って、あの人がミスしてくる。

〈中国語：他每次都在忙碌的时候出现失误，真是伤脑筋。〉

〈英語：He is always making mistakes when We are in a hurry。〉

例えば、中国語では、(48)は「あまりにも」に相当する副詞⁹⁴によって、話し手の望ましくない心的態度を表し、(49) (50)はそれぞれ「よかった」、「困ったなあ」のような

⁹² 日本語のモダリティが高度に文法化されていることを示す事例は少なくない。感情や思考の表現において、判断主体の主観性に属する事柄を客観的事柄から区別して扱うのは、その一例である。(益岡 1991)

⁹³ 日本語の助動詞・補助動詞の位置に相当するものは、情態助動詞「意志(要)」、「願望(want、想)」、「可能(might、没准・可能)」、「義務(must、必須)」などがあるが、利害性のモダリティを表す形式は見当たらない。

⁹⁴ 中国語に関して、玄宜青(1992: 50-51)は、「評価のモダリティを担う副詞的成分は、事実評価のモダリティを担うものと程度評価のモダリティを担うものに分かれる」と指摘している。事実評価のモダリティを担うものには「幸亏、幸好、果然、果真、到底、究竟、竟然、偏偏、居然、恰恰、好在、只好、不幸」などがあり、程度評価のモダリティを担うものには「真、怪、可、好」などがある。事実評価のモダリティも、程度評価のモダリティも、命題部の真実性自体を問題にしているのではなく、命題部が真実であるこ

意味を表す節を追加することによって、事態に対する話し手の態度を表明する。英語では、(48) は結果を表す「so that」構文によって、動詞事象に対する評価を表現し、(49) (50) は「不幸にも」、「いつも」に相当する語彙的手段を用いる。日本語に比して、中国語や英語では、利害性の意味を表すための専用形式がない⁹⁵ため、文副詞成分の付加がある程度義務的であり、省略すると、動詞事象を客観的な事実として叙述する文になってしまう⁹⁶。

以上から、語彙的手段に依存する他言語に比べて、日本語の場合は、助動詞・補助動詞といった文法的な手段（文末形式）を活用して、話し手の評価を表現するという特殊性があるとまとめられる。このような特殊性の背景について、次のようなことが考えられる。

一つは日本語全体の叙法傾向に関わる。工藤（2000）によれば、

日本語においては述語が文の叙法性表現の中核である。基本的には、述語の叙法が文の叙法性を決定する。叙法副詞がなければ文の叙法性が定まらない、というような文は、少なくとも日本語にはないだろう。（下線筆者）

日本語では、「『*けっして行く。』とは、決して言わず、『けっして行かない。』と、述語を否定形にしなくてはならない。この点、『I'll never go.』のように言える英語の『never』とは異なる。また、条件表現にかかわる『もし』は、『*もし雨が降って（降った）、行かない。』とは、決して言わず、『もし雨が降ったら（たなら）、行かない。』と、従属節述語を条件形にしなくてはならない点も、『If it rains, ...』のように言える英語の『if』とは異なる。」という。つまり、膠着性⁹⁷の高い日本語において、「叙法副詞は、必要に応じて述語の叙法の程度を強調・限定したり、文の叙法性を明確化したりするものであって、文構造上必須のものではない」という叙法のスタンスがある。利害性のモダリティを述語の部分によって実現させるのはこのようなスタンスを背景とする。

二つ目は、やはり繰り返して論じてきた「事態把握」の傾向に関わる。これまで、日本語においては、求心性動詞が話し手指向であるため、無関係な出来事に対する心的態度を示すことができることを示してきた。では、なぜ同じく求心的範疇を有する他言語では同じ程度に発達していないのだろうか。その理由は、他言語は日本語のように話し手を基準にするものではなく、より客観的に事態を眺める、いわば、自己を客体化するスタンスを取っていることによる。例えば、中国語では、形式上、求心的方向性を含意する助動詞が備えていても、日本語のような語用論的な条件が整っていないため、非意図的動詞事象を構文化するとい

とを前提に、その事実全体または一部について話し手の評価や注釈を加えるものである。

⁹⁵ なお、テシマウに関しては、韓国語では似たような補助動詞形式が存在すると指摘されている。（黒沢 2012 : 45）

⁹⁶ 本論文の冒頭で指摘した学習者の「助動詞・補助動詞」不使用は、母語の遷移で、「副詞的な要素があれば充分である」と意識することが原因の一つであると考えられる。

⁹⁷ 語彙的意味を持ったいくつかの要素（形態素）が一語の中に組織的に組み込まれる性質をいう。（益岡 1991）

う統語的制限が解除できず、モダリティ性に導く文法化（抽象化）が十分に進んでいないのである。

以上、日本語で間接関与構文によって表現されるモダリティ的意味は、他言語において語彙的な手段によって表現されていることを確認した。また、中国語との比較から、このようなモダリティ性が日本語で形成される背景を論じた。

5. 本章のまとめ

本章では、間接関与構文の意味内容及び発生の背景を確認し、本構文のモダリティ性について考察した。まず、間接受身構文の意味内容「利益」や「被害」を確認し、意味発生の背景を間接受身の通時的発達から考察した。間接関与構文は、「求心的（話し手へ向かう）」環境において、受け手への強制的な関与を表すことが可能になっている。この場合、「利益」や「被害」を受けるというよりも、話し手の言表事態に対する心的態度の表明としての運用が義務付けられている。次に、本章では、間接関与構文のモダリティ性を価値判断（評価）的モダリティの一種——「利害性のモダリティ」と位置づけた上、中国語との比較から、このようなモダリティ性が日本語で形成される背景を論じた。一つ目の背景は、日本語全体が述語の部分によってモダリティを表現させると言う叙法傾向にあると指摘した。二つ目の背景は、これまで論じてきた日本語の「事態把握」、「視点構図」の傾向に関わると結論づけた。「話し手中心」の日本語は、非意図的動詞事象を構文化するという統語的制限を解除できるため、モダリティ的用法を導く文法化の条件が整っている。次章では、より広い視野からこの文法化について詳しく考察する。

第7章 補助動詞の用法から見られた文法カテゴリーの連関

1. はじめに

本章では間接関与構文になるテクレル、テクルの文法化過程に着目して、一つの補助動詞における複数の文法カテゴリーの連関を論じる。前章で論じたテクレルとテクルのモダリティ性と、テシマウ・テオクのモダリティ性との比較を通じて、現代日本語補助動詞の文法化に関わる二つの「主観化的制限」を説明する。

現代日本語には「テイル、テアル、テオク、テシマウ、テイク、テクル、テアゲル（テヤル）、テモラウ、テクレル、テミル、テミセル」といった補助動詞、またはその待遇形式が存在する。補助動詞には、内容語（実質的な意味を持ち、自立した要素になり得る語）から機能語（自立性が希薄で、専ら文法機能を担う要素になる語）への変化のプロセスが見られ、これまでの研究では、アスペクト⁹⁸やヴォイス⁹⁹などといった文法カテゴリーとの関連で多く論じられている。これらに対して、杉本（1991・1992）や本研究の第6章では補助動詞のモダリティ¹⁰⁰性に注目している。杉本はテシマウについて、アスペクト的意味とモダリティ的意味が包含されていると述べている。また、本研究の第6章では助動詞レル・ラレルや、補助動詞テクレル、テクルの一部の周辺的な用法を「間接関与構文」とした上で、このような用法は形式上、平叙文であるが、意図されている内容は常に感情表出であるため、モダリティ範疇の機能が形成されつつあると指摘している。

日本語述部の文法カテゴリーは、一般に相対的な位置関係、あるいは、階層構造が認められている（南 1974、寺村 1984 など）。仁田（2002）は、「彼に叱られていなかったでしょうね」を例に、次のような構造を示している。

【図 7-1】日本語文法カテゴリーの階層（仁田 2002 を参考に作成）



文法カテゴリーについて、これまでの研究は、一つの形式内部における複数の使用や分布を記述することが重んじられている。一方、一部の文法カテゴリーの間には、意味的な連関

⁹⁸ アスペクトとは、「基本的に、完成相と継続相の対立によって示される、出来事の時間的展開性の把握の仕方の相違を表す（工藤 1995:8）」文法カテゴリーである。

⁹⁹ ヴォイスとは、「何に視点をおいて表現するかという文の機能意味構造にもとづく統語論的な側面と、述語になる動詞がどのような形態をとるかという動詞の形態論的な側面の相互関係の体系（村木 1991:1）」である。

¹⁰⁰ モダリティ（言表態度）とは、「現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態一文の対象的な内容—に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表した部分（仁田 2009）」である。

が存在することも事実である。たとえば、ヴォイスとアスペクトの連関について、益岡 (2013) は次のように述べている。

ヴォイスとアスペクトのあいだに連関が認められるのは、ヴォイスの基本的な対立をなす「自発性」と「誘発性」がそれぞれ「終了局面」(終了限界)と「開始局面」(開始限界)に結びつくことに因る。つまり、自発性は出来事の発生という結果性に重点が置かれ、誘発性は出来事の起動性に重点が置かれるということ、そして、結果性は終了局面に結びつき、起動性は開始局面に結びつくということである。

モダリティと他の文法カテゴリーの連関について、風間 (2011: 33) は、次のようなヴォイス、アスペクト、テンスなどの例をあげ、「一部のモダリティは、隣接する他の文法カテゴリーと様々な関わりを持ち、そして連続した面を持っている。」と指摘している。

- ・ ヴォイスとモダリティ: たとえば逆使役¹⁰¹ (anticausative) と呼ばれるヴォイスがあり、これはおおざっぱに言えば、派生前の動詞に本来あった動作主を消去するものである。このようなヴォイス的操作は拘束的モダリティ (許可、義務、確約など、筆者注) などの意味を実現することがある。
- ・ アスペクトとモダリティ: 恒常的アスペクトが可能の意味を実現することがある。
- ・ テンスと証拠性とモダリティ: まずテンス的に未来のできごとは、誰にも確言できないのであるから、必然的に何らかの判断を伴うことになる。他方、過去のできごとについても、一人の人間が実体験できることは空間的にも時間的にも限られている。しかし話し手は実体験したこと以外の過去の出来事についても言及するので、その情報源は伝聞であったり間接的な証拠からの判断であったりするはずである。この点でテンスと証拠性とモダリティの三者は密接な関係にあると言える。

(以上、風間 2011 より)

補助動詞においても、ヴォイス・アスペクトとモダリティとの異なった文法カテゴリーが一つの形式に同居していると認める以上、それぞれの意味的な連関の究明が必要になってくる。しかし、これまでの研究では、補助動詞における異なった文法カテゴリーの連関を論じるものは僅かに見られるのみである。

本章では、モダリティ的用法を持つ補助動詞テクル、テクレル、テシマウを取り上げ、それぞれの形式の補助動詞全体における位置付けを、本動詞の語彙的意味の分類から確認した上で、中心的な用法 (ヴォイスやアスペクト) がいかにモダリティ的用法に結びつくのか

¹⁰¹ 他動詞における使役主 (動作主) 項を出現させず、対象を主語とした自動詞にするもので、自他交替の一種である。スワヒリ語などのバントゥー語群に見られ、日本語では、北海道・東北諸方言にも見られると報告されている: 「大きな丸が書かさてる。(=大きな丸が書いてある。)」 (佐々木 2007: 259)

を解明することを主な目的とする。その上、テシマウのモダリティ性とテクル・テクレルのモダリティ性との比較を行い、両グループの文法化プロセスの違いを示した上で、それぞれの形式における異なった文法カテゴリーの接点を解明する。最後に、補助動詞体系の各形式の文法化の度合いの差異を「主観化制約」によって解釈する。

2. 補助動詞の分類及び文法化

2.1. 補助動詞の体系的分類

本節では、補助動詞全体において、モダリティ的意味を持つ補助動詞の位置付けを本動詞の語彙的な意味の分類から確認しておく。

補助動詞全般に関して、従来の研究は恣意的な集合体と見ているせいか、個別の形式、あるいは有対グループに限定して分析しており、一つの枠組みの中で体系的にみるようなものは、管見の限り、ほとんど見当たらない。テ形接続助動詞の形式全般を対象にして、一般的な枠組みを示した研究は金水（2004）のみにとどまる。金水（2004）は、テ形補助動詞の多くは、

何らかの形で文脈的結果状態¹⁰²や出来事連鎖に関わる意味を持ち、その枠組みの中で一定の解釈を指定する働きを持っていた。このような機能は、出来事内部の論理的な意味には直接貢献しないので、これらを取り去った表現とは論理的な意味において差がない。しかし、特定の文脈的解釈を指定することによって、到達可能な解釈を絞り込むという方向でコミュニケーションに大きく寄与している。

と指摘し、「個々の文脈を取り込んで、推論を導出し、その結果に対して動作主や話し手が「望ましい」「望ましくない」などと評価を与えるようなシステムである。」と示している。文脈的効果に着目した金水（2004）は、本動詞の語彙的意味が文脈的意味へ拡張したことを指摘している点において優れているが、「拡張」の根本的な原因、いわば、原動力に関する体系的説明はなされていない。

実際、テ形補助動詞の本動詞の語彙的意味に着目すると、ミル、ミセルの動作動詞以外のものがほとんど空間概念を表すものであることが分かる。本節では、空間概念に関わる動詞集団を〈有／無〉、〈動／静〉、〈自／他〉、〈求心／遠心〉などというパラメーターによって分解し、補助動詞の再分類を試みる。〈有／無〉は物事存在／非存在を意味し、〈動／静〉は、物事存在する場合、移動／非移動の区別を意味する。さらに、〈自／他〉や〈求心／遠心〉は移動と判断した場合、移動の動力（つまり、自発的な移動か、誘発的な移動か）や方向性（つまり、話し手指向か、非話し手指向か）を指定する。

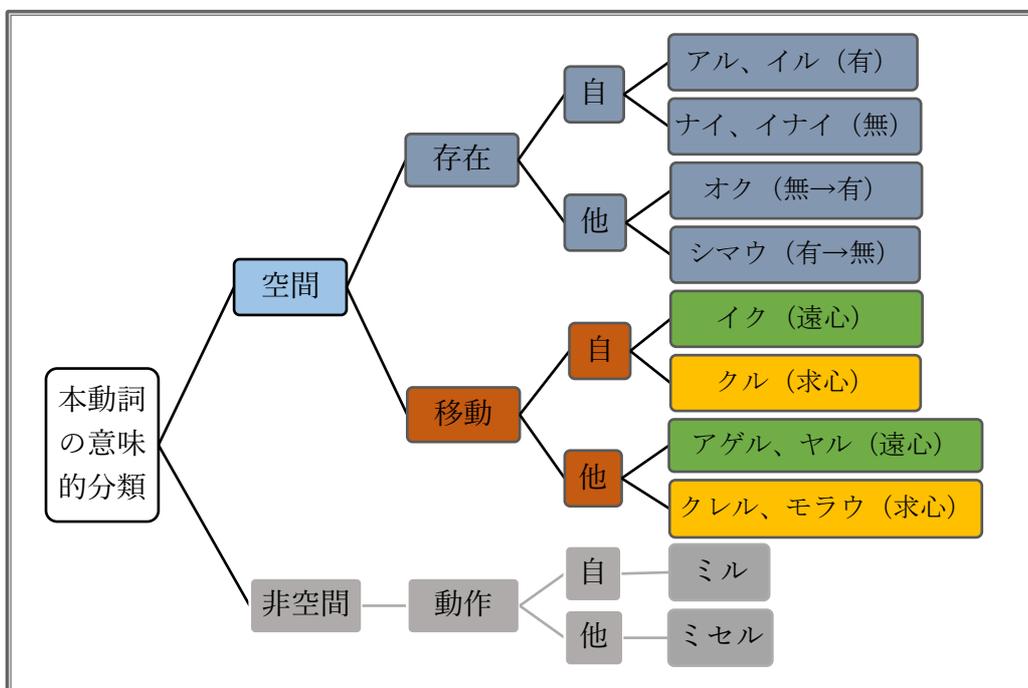
¹⁰² 金水（2004）は、この文脈的結果状態を、語彙的結果状態（例えば、「AがBを殺す」における「Bの死亡状態」のような結果状態）と区別している。

補助動詞の中、アル、イルは物の自動的（自発的）な存在を表し、その否定形式ナイ、イナイが非存在の状態を表す。そして、自動的な存在／非存在〈有／無〉と対立して、オクとシマウの動詞は、それぞれ古くから〈事物に、ある位置を占めさせる〉や〈入れ納める／なくす〉という語釈¹⁰³があるように、物事の存在、非存在状態の他動的（誘発的）な実現を表す。つまり、外部の働きかけによって、〈有〉または〈無〉の状態を顕在化させるものであり、〈変化〉という時間的展開性が認められる。

以上に述べた二つのグループは、物事の〈存在／非存在〉、〈出現／消失〉という静的（つまり、物理的に0移動）な状態を表現するものである。物事の静的な存在状態と対立した、動的な存在状態を表す動詞に対しては、さらに〈動力（自動的／他動的）〉、〈方向性（求心／遠心）〉によって再分類することができる。自動的な移動を示すものにはイクとクルのペアがあり、他動的な移動（つまり、外部の働きかけによって、「イク」と「クル」の状態を実現させる）を表すものにはアゲル・ヤルとクレル、モラウなどの形式群がある。それぞれ、イクとアゲル・ヤルは遠心的、即ち空間的に非話し手側へ向かうタイプであり、クルとクレル、モラウは求心的、即ち話し手側へ向かうタイプである。

まとめると、補助動詞を形成する本動詞の意味的体系は、次のような対立の組み合わせによって捉えることができる（【図7-2】）。

【図7-2】本動詞の意味素性による補助動詞の分類



¹⁰³ いずれも『日本国語大辞典』による。

以上のように、補助動詞になる本動詞群は、物事の物理的空間関係（存在／非存在、移動／非移動、移動の方向・動力）を過不足なく示すことができ、1つの自足した（情報伝達上十分な）空間概念体系を形成する。それぞれの使用例を次のように示す。

**a. 物理的空間：空間的原点＝「ここ」 空間的接近＝「ここ」に向かう
空間的離反＝「ここ」から他のところに向かう**

- (1) 田中さんは研究室にいる／いない。
- (2) 研究室にパソコンがある／ない。
- (3) テーブルの上に花瓶を置く。
- (4) おもちゃを箱にしまう。
- (5) 明日東京に行く。
- (6) 太郎が家に来る。
- (7) この本を彼女にあげる・やる。
- (8) お父さんがお年玉をくれる／お父さんからお年玉をもらう。

上記の体系の中で、動的な空間関係を描く(5)～(8)は、典型的な「直示(ダイクシス)」表現として多く論じられている。

2.2. 補助動詞の文法化

本動詞の物理的な空間体系と平行して、一部の補助動詞用法においては、時的空間（つまり、直示的中心を〈今〉とする）や心的空間（つまり、直示的中心を〈私〉とする）の指示体系も形成されていると見られる。このような意味内容の変容は補助動詞の文法化の一側面と見られる。

まず、時的空間について概観する。以上の本動詞群は基本的に物理的空間関係を表しているが、別の動詞に後続する（前接する動詞の拡大）に伴って、一部の用法においては、それら自体の本来の空間的な意味が薄れ、物理的な移動とともに存在していた時的移動が顕在化される。このようなプロセスによって、アスペクト的な用法が確立されている。アスペクト的な用法として文法化した補助動詞は、主に空間的に無移動のアル・イルや、空間的存滅シマウ・オク、空間的有移動のイク、クルが関わる¹⁰⁴。

具体的には、テアル、テイルが、物理的な空間の無移動、つまり原点を表すアル・イルと並行して、時的空間の「現時点の進行状態、残存」などを表す。また、テシマウ、テクルは空間的消失や接近を表すシマウ、クルと並行して、「完了、完遂、ある時点までの継続」な

¹⁰⁴ なお、典型的なアスペクト形式テイルに比べると、テアル、テオク、テクル、テイク、テシマウは、あらゆる動詞、あるいは述語形式を巻き込むという「包括性」の欠如や、形式自身に伴うアスペクト対立の存在という事実により、完全に文法化されている形式とは言えない。工藤（1995）は、これらの補助動詞形式を「準アスペクト」と呼んでいる。仁田（2009：259）は「二次アスペクト」と位置づける。

どを表現し、テオク、テイクは空間的出現や離反を表すオク、イクと並行して、「効力の維持、事前処置、準備、ある時点からの継続」などを表すようになっている。それぞれの使用例を次のように示す。

b. 時的空間：時的原点＝「今」（進行状態、残存など）

時的接近＝「今」に向かう（完了、完遂、ある時点までの継続など）

時的離反＝「今」から未来に向かう（効力の維持、事前処置、準備、ある時点からの継続など）

- (9) 太郎が本を読んでいる。
- (10) その問題は詳しく調べてある。
- (11) あらかじめ材料を茹でておく。
- (12) 早くご飯を食べてしまった。
- (13) 豊かに暮らしていく。
- (14) じっと耐えて暮らしてきた。

さらに、現代日本語では、物理的直示や時的直示以外にも、心理的空間を示すものも存在する。これらは、程度の差があるものの、第6章で考察したモダリティ性に関わり、変化性や移動性のあるテシマウ、テオク、テクル、テイク、テクレル、テヤルなどで用法が観察されている。本動詞意味が無移動のテイル、テアルには見られない。それぞれの用法を次のように示す。なお、b類用法は非意志的な事象を補助動詞構文化したものであり、a類用法よりもモダリティ性が高いことに留意したい。

c. 心理的空間：心理的接近＝「私」に向かう（利益や被害を被る）

心理的離反＝「私」から他人に向かう（利益や被害を加える）

- (15) a 太郎はとうとう学校を休んでしまった。
b 雨が降り出してしまった。
- (16) a 私がお部屋を掃除しておく。
- (17) a 赤ちゃんが警戒して、距離を置いてくる。
b 急いでいる時に限って、あの人がミスしてくる。
- (18) a 日本代表が優勝してくれた。
b 相手がサーブミスしてくれて、勝つことができた。
- (19) a 遊びの誘いを速やかに断っていく。
- (20) a 取引先の社長からネットワークビジネスの勧誘を断ってやった。

以上、本節では補助動詞の体系的な分類を行い、命題の具象性から、補助動詞の文法化現象を紹介した。では、このような文法化はどのように起こるのか、また、補助動詞の語彙的意味とどのような関係があるのか。次節では、最も文法化が進んでいると見られる用法、つまり、モダリティ的用法の形成を論じて、これらの問題を考察する。

3. 補助動詞のモダリティ的用法

本節では、補助動詞における文法カテゴリーの連関を考察し、本動詞の語彙的意味との関係から、モダリティ的意味成立のメカニズムを論じる。

3.1. 「利害性のモダリティ」とヴォイス

まず、第2章、第3章で論じたテクレル、テクルの用法から、モダリティとヴォイスの間の連関を見る。

テクレルに関して、早津(2019)は能動文、使役文、受身文を中心的なヴォイスとみなし、テモラウ文とテヤル文・テクレル文などを、「原動・受身・使役からなるヴォイス体系を恩恵性の面で補っている」周辺のヴォイスとしている。

また、本研究で取り上げているテクル移動構文に関して、Shibatani(2003)をはじめ、古賀(2008)、澤田(2009)など一連の研究では「逆行態」として、人称階層に依存した普遍的なヴォイス現象として位置づけている。Shibataniは、逆行態用法は、項の増減や文法関係の変更などが関わらないものの、参加者の話題性といった語用論的要因に動機づけられているとして、ヴォイスの対立と見なす立場もあると指摘している。

以上を受け、本研究ではより広義的に、「動詞事象を動作主側から見るか、受け手側から見るかという視点の違いによって言語形式を選択する」という性質をヴォイス的表現と規定する。この場合、受身文は無論のこと、テクレル文もテクル文も補助動詞を使用しない無標文と視点の所在が異なるという特徴があるため、ヴォイス的表現と認められる。

テクルやテクレルのモダリティ性についての説明は、第6章で行われている。本研究では従来提案された評価のモダリティと時相的な対立を持つ、既実現の命題の利益/被害を表す「利害性」のモダリティであると提案している。(【表7-1】に示す)

【表7-1】利害性¹⁰⁵のモダリティの位置付け

動詞事象に対する評価	未実現	既実現
望ましい	適当、必要、容認 ... (べきダ...)	利益 (テクレル)
望ましくない	非容認、禁止... (てはいけない...)	被害 (レル・ラレル、テクル)

¹⁰⁵ 利益か不利益かの区分は絶対的なものではなく、あくまでも傾向による。

では、テクレルとテクルのモダリティ性とヴォイス性どのような連関があるのか。

この問題を考察する前に、補助動詞全体から見られるモダリティ的意味の発達の非対称性に注目したい。本研究の第2章、第3章、第6章では非意図的動詞事象の構文化を指標にして、文法化（抽象化）が一步進んでいるモダリティ的用法は求心型補助動詞に偏在していると指摘した。【表7-2】では、求心型範疇や遠心型範疇における、意図的動詞事象と非意図的動詞事象の構文化の実態を示す。

【表7-2】 求心型範疇と遠心型範疇の意味用法¹⁰⁶

	求心型範疇	遠心型範疇
不利益	意図的テクル (○)	意図的テヤル・テイク (○)
	非意図的テクル (○) =①	非意図的テヤル・テイク (×) =②
利益	意図的テクレル (○)	意図的テヤル (○)
	非意図的テクレル (○) =③	非意図的テヤル (×) =④

【表7-2】では、求心型の列では動詞事象の意図性を問わず、全ての用法が成立する。一方、遠心型の列では、②の非意図的動詞事象、つまり、受け手に対しての働きかけの意味が読み込まれない事象の不利益の授与と、④の非意図的動詞事象の利益の授与の形式が成立しない。つまり、非意図的動詞の不利益、利益用法が求心型範疇において生産的に言語化され得るに対して、遠心型範疇においてはほとんど成立しないという非対称性が示されている。このような非対称性はそれぞれの範疇の文法化の度合いの差異を示唆している。

文法化の度合いに偏りが生じる原因について、第5章ではそれぞれの補助動詞のヴォイスの特徴と関係づけ、「非意図的動詞事象を典型とする無関係な事態の主観的な関与は、話し手側へ向かう求心型構文に適合する」ことを、「主観的把握¹⁰⁷」や「私的領域¹⁰⁸」の原理によって説明した。つまり、利害性のモダリティとヴォイスは、直示の人称対立（一人称側

¹⁰⁶ 網かけ部分、つまり、非意図的動詞事象①～④の作例を次のように示す。

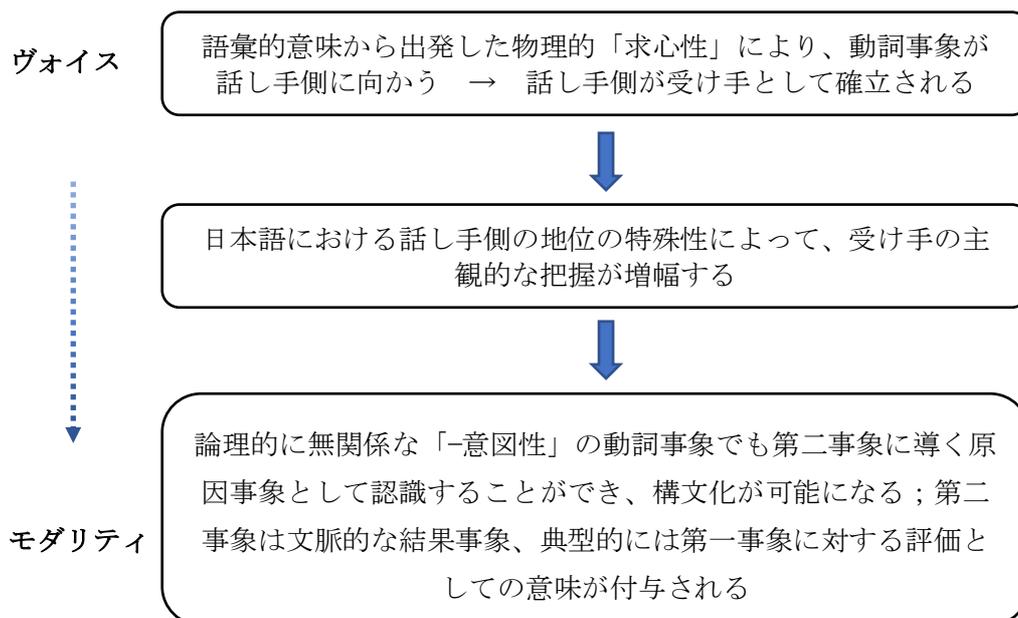
- ① 医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断ってくる。
- ② *医師が PCR を必要と判断したのに保健所が検査を断って行く/やる。
- ③ 相手の選手が急に倒れてくれたおかげで優勝することができた。
- ④ *うちの選手が急に倒れてやったので、相手のチームが優勝した。

¹⁰⁷ 池上 (2011: 52) によると、〈主観的把握〉は、話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をすることができる。

¹⁰⁸ 益岡 (1997: 30) が内的状態述語の人称制限について論じる際に提唱した「私的領域」に関わる語用論的な原則：「私的領域に属する事態の真偽を断定する権利は、当該の人物に専属する。したがって、他者の私的領域に属する事態の真偽を断定することによってその人物の権利を侵害することは回避されるべきである。」

と非一人称側)に関わる点において共通しており、いわゆるモダリティ的用法の成立は、対応する形式が一人称側を受け手とする文脈で繰り返して使われることにより、主観的な把握という意味プロセスが定着することで起こるとの考えである。まとめると、次のようなプロセスになる。

【図 7-3】 ヴォイス的用法からモダリティ的用法への発達過程



ヴォイスから出発した利害性のモダリティの拡張現象は、日本語「話し手中心」、「自己中心的」¹⁰⁹という視点構図（つまり、話し手の視点に立って事態を眺める）を土壌とする。一方、話し手側と非話し手側をより対等に扱う他言語においては、同様の現象はほとんど観察されていない。少なくとも、中国語や英語では、「来〈come〉」、「去〈go〉」、「给〈give〉」などの直示動詞、または受身の助動詞を用いて、非意図的動詞事象を構文化して、利害性のモダリティを表現することができない。

(21) 相手がサーブミスしてくれて、勝つことができた。

(中：*因为对方给 / 给我们发球失误，所以赢下了比赛。)

(22) 急いでいる時に限って、あの人がミスしてくる。

(中：*每次都是在很忙的时候，那家伙失误来 / 起来)

¹⁰⁹ 〈自己中心的〉な視点：事態把握の仕方がもっぱら〈自己〉対〈他者〉という構図に基づいているということの意味する。そのような構図では、〈自己〉事態が客体化されることなく、自己は常に自己同一性を保つ存在として振舞う。(池上 2003:19)

以上、利害性のモダリティとヴォイスの連関を本動詞の語彙的意味との関係から論じた。

3.2. 「利害性のモダリティ」とアスペクト

次に、利害性のモダリティとアスペクトの関連について考察する。ここでは、補助動詞テオクとテシマウ¹¹⁰を取り上げる。

本動詞オク、シマウより抽象化したテオク、テシマウは、【図 7-2】に示した語彙的意味〈物理的な発生や消失〉と平行して、非物理的なもの、いわば〈効力の維持・準備〉や、〈動作の完了・完遂〉などの使役的な発生や消失を表すことができる。それぞれの使用例を次に示す。

(23) 窓を開けておく。

(24) 借りた本を全部読んでしまいました。

これらはいずれもアスペクトの意味に関わる用法であり、これまでの研究には、金田一(1955)、吉川(1971)、高橋(1969)、寺村(1984)などがある。テシマウとテオクの両形式においては、アスペクト的意味のみならず、モダリティと見られる用法も発達させている。以下、各形式の確立、前接動詞の充実化及び意味の拡大などの側面から見ていく。

3.2.1. テシマウについて

まず、テシマウの用法を紹介する。

テシマウ形式の確立について、木村(2001:329)は、「シマウの初出は鎌倉期であり、〈終了〉〈収納〉を原義としていたものである」と示唆している。また、梁井(2009)は、脱語彙化した補助動詞テシマウの使用は『好色五人女』(1686)以降に見られると指摘している。

(25) 此たはけいつの世にあがりを請くべし、追付勘当帳に付てしまふべし

(〔好色五人女 卷一 上 221 頁〕、梁井 2009 より)

テシマウに関して、先行研究では、主に〈完了〉・〈実現〉などのアスペクト的意味を基本的なものとして議論されており、本研究でいうモダリティ的意味は、〈残念〉、〈予想外〉、〈後悔〉などという「話し手の感情や評価」を表すものとして認められてきた。たとえば、吉川(1971)は、テシマウの働きとして、次の五つの種類を分けた上で、モダリティ的用法相当のもの(ムード)は、アスペクト的意味から派生したと分析している。(以下の用例は、吉川 1971 による)

¹¹⁰ 本研究では、特に断らない限り、「チャウ」、「トク」などの縮約形式も含むものとする。

- 1) ある過程を持つ動作がおしまいまで行われることを表す
 - (26) ぜんぶの組がことばを送ってしまうと、組のおわりの人が、書いた紙を読み上げた。
- 2) 積極的に動作に取り組み、それを片づけることを表す
 - (27) ケイ子「殺し屋を雇うて金沢へやり、相手をあっさり消してしまうんや。」
- 3) ある動作・作用が行われた結果の取り返しがつかないという気持ちを表す
 - (28) 目標の灯は、どこかに消えてしまった。
- 4) 動作が無意的に行われることを表す
 - (29) みんな、あわててしまいました。
- 5) 不都合なこと、期待に反したことが行われることを表す
 - (30) 初めに竹の節をくりぬいて作りましたが、竹で水にういてしまうので、ブリキにしまいました。

吉川は、1) をアスペクト的用法、4) と 5) をムード的用法、2) と 3) を中間的な用法としている。つまり、本研究でいうテシマウのモダリティの意味は具体的に、ある動作・作用が行われた結果のとりかえしがつかないという気持ちや不都合なこと、期待に反したことが行われることをあらわすものと認識されている。

また、寺村 (1984 : 153) は、「瞬間的なできごとや動き」を表す動詞にテシマウが付くと、「『そのことが起こって、もはや起こる前の状態に戻ることはできない』という心理を表すことになる。それは自分ではどうしようもないできごとの場合は悲しみを、自分のしたことならば後悔を伴うのがふつうである。」と述べている。多少違いがあるものの、以上の研究はいずれも、アスペクトの意味から他の意味機能へ拡張したと主張したものである。

一方、その逆方向、つまり、他の意味機能からアスペクトの意味へ拡張したと想定する主張もある。例えば、藤井 (1992 : 19) は「いきりの述語の『してしまう』が、動作の終了、あるいは限界の達成をあらわすために使用されている場合は、非常にわずかしかなかった」ことから、テシマウの基本的な意味をアスペクト的な意味にもとめてきた従来の考え方を否定し、感情・評価の意味がより一般的であって、アスペクトとしての限界達成はむしろ部分的、あるいは付随的であると主張している。

いわゆるテシマウの意味用法の拡張方向について、筆者は前者の立場をとる。その理由は、梁井 (2009) による通時的な研究である。梁井 (2009) はテシマウ相当形式が出現し始める近世後期から現代までの口語的資料を調査し、テシマウの意味機能の拡張過程を考察した。その結果、テシマウ形式は、

典型的な運動動詞 (限界動詞／非限界動詞) に後接し、事態の終了限界の達成を表していたが、内的状態動詞 (「思う」「困る」などのような、ある状態や出来事を経験者

の側から、内部的に描写する動詞。筆者注)、静態動詞(「ある」「異なる」など、筆者注)の順に使用領域を拡大しながら意味的に抽象化し、事態の限界達成を表す標識へと変化した。

と説明する。また、本研究でいうモダリティ性への拡張について、梁井(2009:24)は、「マイナスの感情・評価の意味は、当初、話者が動作主と一致しない場合に限って生じていたが、テシマウ相当形式の語彙的意味に焼き付けられて、それ以外の場合にも生じるようになっていった。」と指摘している。

アスペクト的用法からモダリティ的用法へ拡張するという立場は、形式化(この点については、テシマウの省略テストによって検証できる。つまり、アスペクト的用法に比べて、モダリティ的用法テシマウの付加の義務性が低い)や抽象化(アスペクト的用法に比べて、モダリティ的用法がシマウという本動詞の原型的な意味から程遠い)のプロセスが見られ、典型的な文法化の傾向¹¹¹に合致する。

3.2.2. テオクについて

次に、テオクの用法について考察する。

テオクの基本的な意味について、吉川(1971)は、〈対象を変化させて、その状態を持続させる〉こととしている。この基本的意味から、動詞の種類によって、次の二種類のアスペクト的意味が挙げられている。

- (I) ある時まで一定の状態を持続させること
- (II) ある時までにある対象に変化を与えること

さらに、吉川(1971:268)は、アスペクト的意味から、〈準備〉と〈一時的処置〉というムードの意味が発生したと指摘している上で、テオクの意味用法を7つに分けている。(以下、1~4がアスペクト的な用法であり、5~7がいわゆるムード的な用法である。)

- 1) 対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させることを表す
(31) わたしの家では、見かねて、このあいだ、「ごみをすてないでください。」と、立てふだを立てておきました。
- 2) 対象を変化させ、その結果の状態を持続させることを表す
(32) 「加藤さんは奥さんに鍵をあずけておいたんです。」
- 3) ある時までに対象に変化を与えることを表す
(33) 議題を予告し、資料があれば配っておく。
- 4) 放任を表す

¹¹¹ 例えば、意味の抽象化を内容とする「一方向性」など。

- (34) 「ほうっておけばいいんだよ!」
- 5) 準備のためにする動作を表す
- (35) ...わしが人民どもの恭順をためそうとここに掛けておいた帽子に、敬礼を拒んだのか。
- 6) 一時的処置を表す
- (36) 「...それじゃまア、あの絵はいただくか、お返しするか、一応預っておこう」
- 7) いくつかの特例
- (37) お安くしておきます。

さて、ここで 1) ~4) をアスペクト的な用法とすることについては疑問の余地はないと思われるが、5) ~7) の〈準備〉と〈一時的処置〉をムード的(ここでいう「ムード」は、「モダリティ」と呼ばれるものに概ね対応する)用法と認めて良いのかについては検討の余地がある。

なぜなら、意図的動詞事象を前接する直接構文テヤル・テアゲルと同じように、これらの用法において、〈準備〉や〈一時的処置〉がもたらした〈望ましい〉意味は構造からのものではなく、テオクの語彙的な意味によって直接的に誘発されている。構文自体の前接可能な述語や、動作主になり得る人称は、やはり厳しく制限されており、主に意図的な動詞事象を巻き込む性質が見られる。

他方、非一人称側による非意図的動詞事象のテオク用法がないわけでもない。例えば、一色(2016)が以下の用例をあげ、〈非難〉類(つまり、当該行為を行った行為主体に対して、話し手がその行為およびその結果に対して責任の追及をすることを表す)として取り上げている。

- (38) 弱小チームに負けておいて、全く反省しようとしな。 (非難)
- (39) 今度こそ司法試験に合格すると言っておいて、また落ちてしまった。 (非難)
- (一色 2016 より)

(38) (39) のテオク用法は、非意図的動詞事象(動詞事象を行う主体は二人称の有情物ではあるが、わざと「負けた」、「言った」行為ではない)を前接すると見られる。この場合、〈非難〉という〈望ましくない〉評価の意味の実現は、オクの語彙的意味と直接的な関係がないように見られる。故に、筆者はこの種類の用法のみをモダリティ的用法と認める。

このように、テオクはテシマウと同様、モダリティ的機能を表すことは可能であるが、次の対照例が示すように、テオクは後者に比べて、単文形式が成り立たないほか、無情物による動詞事象の構文化などが制限されており、生産性が比較的低いと見られる。

- (40) ?弱小チームに負けておいた。 (非難)

(41) ? 今度こそ司法試験に合格すると言っておた。(非難)

(42) ? 急に雨が降っておいて、…。(非難の用法)

(43) ? 建物が倒れておいて、…。(非難の用法)

以上、アスペクト経由のモダリティ的用法はテシマウとテオク両形式において成立するが、テシマウの方が前接する動詞のバリエーションが豊富で、生産性が高く、特に、非意図的動詞事象の構文化がテシマウ形式のみに成立し、主観化が進んでいる事実を論じた¹¹²。では、なぜこのような非対称性が生じたのか。筆者は、本動詞の語彙的意味に由来する「時的方向性」に関連すると考える。

時的求心性は「今」に向かうことを典型とするため、「既実現または、予想実現」に結び付きやすく、会話の参与者による主観的な評価が容易に下される¹¹³。一方、時的遠心性は「今」から、未来に指向するため、「未実現」の事態に結び付きやすい。そのため、事態に対する主観的な評価が比較的制限されていると思われる。言い換えると、テシマウは、結果(あるいは、時的到達点)指向の構文であり、いわゆる〈ナル(自発)〉的¹¹⁴性格の構文(いわば、非対格構文)になりやすい。これに対して、テオクは、行為(あるいは、時的出発点)指向の構文であり、〈スル(誘発)〉的性格の構文になる傾向がある¹¹⁵。これらの傾向は、さらに構文の評価性に強く関わる。アスペクト的用法から利害性のモダリティ的用法への発達過程をまとめると、次のようなプロセスになる。

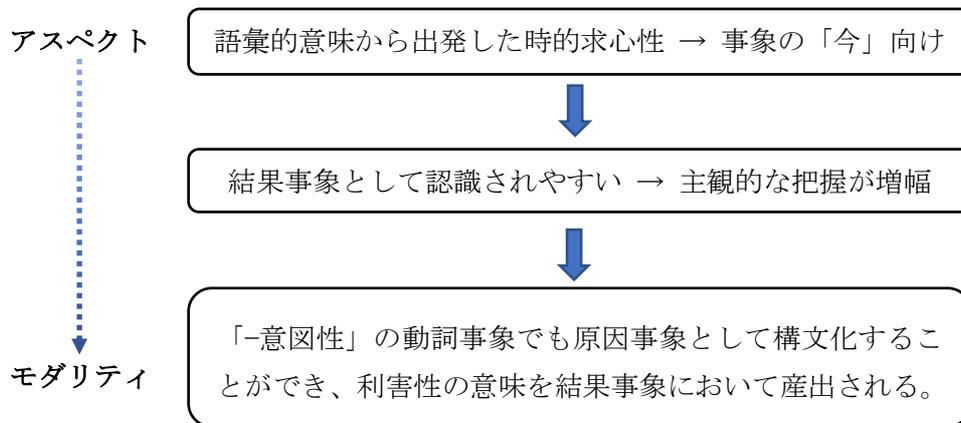
¹¹² ここで、「元より、テオクは意図性意味を含む補助動詞であるため、前接動詞も意図的な動詞を選択する傾向があるのではないか」という指摘も予想されるが、我々が問題にしているのは、意図性に関して差異が見られない本動詞「置く」と「しまう」がなぜ、補助動詞になってから、それぞれ意図的、非意図的な意味指向を選択するのか、ということである。

¹¹³ 詳細については触れないが、ここで思い出されるのは、テンスやアスペクトを表す助動詞「た」が場合によって、モダリティ的意味を獲得することである。

¹¹⁴ 池上(1982)は、〈出来事全体〉を捉え、事の成り行きという観点から出来事を表現しようとするいわば「ナル」的な言語と、出来事に関与する〈個体〉、とりわけ〈動作主〉としての〈人間〉に注目し、それを際立たせる形で表現しようとする言わば〈スル〉的な言語という対立があると示唆している。表現レベルでも、このような傾向があると考えられる。

¹¹⁵ テシマウの自発性に関しては、森山(1988: 221)から「意志的な動作を非意志的な動作としてとらえなおす形式である」との指摘がある。また、テオクの誘発性に関しては、佐藤(2015: 7)が「動作主が動詞の示す行為の結果や影響を意図してその行為を遂行したことを有標的に示す」というスキーマの意味をまとめている。

【図 7-4】アスペクト的用法からモダリティ的用法への発達過程



以上の考察から、利害性のモダリティとアスペクトは、直示の時的対立に関わる点において共通していると考えられる。

3.3. ヴォイス経由のモダリティとアスペクト経由のモダリティの違い

ヴォイスから出発したモダリティと、アスペクトから出発したモダリティは、同じく事態に対する評価を表現することができるが、両者からは異なった性質も見られる。少なくとも、ヴォイス経由のテクル・テクレルとアスペクト経由のテシマウの間には、次のような違いが挙げられる。

違い 1-評価主体の差異

アスペクト経由のテシマウの表す感情・評価の持ち主は、話し手のみならず、動作主や別の参与者である場合もある。つまり、話し手側と動詞事象の動作主側、受け手側が一致しなくても良い。

- (44) 太郎がパスワードを忘れてしまったので、(私が) ひどい目にあった。
 太郎がパスワードを忘れてしまったので、(太郎が) ひどい目にあった。
 太郎がパスワードを忘れてしまったので、(二郎が) ひどい目にあった。

テシマウの場合、「太郎がパスワードを忘れた」事態に対して、「不都合」などの評価を持ちうる主体は、発話者「私」に限らず、動作主「太郎」、そして第三者「二郎」でも可能である。これに対して、テクルやテクレルの場合、次の 2 例が示すように、評価主体は話し手側のものに限られている。

- (45) 太郎はいつも大事なところでミスしてくるから困る。

(46) あの人がミスしてくれたので勝てた。

(45) (46) の用例では、動作主「太郎」「あの人」や他の参与者より事態を把握する解釈が不可能である。

つまり、ヴォイス経由のモダリティに比べて、アスペクト経由のモダリティは話し手から離れても良いものである。実際、アスペクト経由のモダリティに関しては、日本語に限らず、他言語でも観察されている。例えば、中国語では、「動作の実現・完了」を表すアスペクト助詞「了 (le)」から、「新しい状況の発生や変化」を表す語気助詞「了」へ文法化した例が見られる。

(47) 我昨天去了学校。〈日本語訳：昨日学校へ行った。〉

(48) 我明天不去学校了。〈日本語訳：明日学校へ行かないことにした。〉

(47) の「了 (le)」は、動詞の直後に置かれるタイプであり、「学校へ行く」という事態が発話時において完了していることを表す。一方、(48) の「了 (le)」は文末に置かれるタイプであり、「学校へ行かない」という変化が起こったことを表している。王 (1943/2014 : 179) ¹¹⁶は後者を「用极坚决的语气陈说一种觉察，决意或判断」、つまり、「極めて断固とした語気により、一種の発見、決意あるいは判断を述べる」ものとしている。

違い 2-モダリティ的意味の発生

アスペクト経由のモダリティ的構文は、事態に対する評価の任意性が高く、望ましいか望ましくないかの判断は前接する動詞の意味や文脈に依存する。この点については、テシマウが望ましい評価だけではなく、〈話し手の喜びや満足感〉といった望ましい評価を表すこともできるところで示される。

(49) 仕事場の自販機。お釣りの所に取り忘れが... ちょっとお得してしまいました。
(Twitter 2015.12.03)

これに対して、ヴォイス経由のモダリティの意味は、ほとんど前接する動詞の意味から拘束されず、望ましいか望ましくないかの判断が比較的固定されている。例えば、テクレルは望ましい評価を表す傾向があり、テクルのモダリティ的用法は非常に限られているのが、ほとんど望ましくない評価を指向する。

(50) 今日巨人が負けてくれたおかげで明日負けても大丈夫状態を作ることに成功した。

¹¹⁶ 本論文では王 (2014) を参照。

(Twitter 2021.08.17)

(51) 高三の夏休み明けに古文の先生が徐ろに存在しない宿題の提出を要求してきた。

(Twitter 2021.08.16)

以上の違いより、アスペクトから出発したテシマウのモダリティ的用法は、ヴォイスから出発したモダリティ的用法に比べて、より命題に近い、つまり、客観性が高いものであるとまとめられる¹¹⁷。

3.4. 主観化制約

現代日本語の補助動詞は、実質的な意味を持つ本動詞に対して、物理的な意味が希薄化し、ヴォイス、アスペクトなどの文法的意味の標記に関係することが近年〈文法化¹¹⁸〉の枠組み（益岡 1992、由井 1997、青木 2013・2019、三宅 2015、澤田 2009・2014、森 2010 など）で多く論じられている。また、これまでの研究で、文法化には一定の方向性をもつ意味の変化、つまり、「主観化 (subjectification)」¹¹⁹の方向へ向かう傾向があると指摘されてきている。

しかし、今まで研究においては、なぜ一部の形式に文法化が起りやすく、一部の形式には起りにくいのかという非対称性がほぼ不問とされている。特に、主観化に関しては、「命題に対する話し手の主観的態度が、次第に表現の意味に取り入れられてゆく」というプロセスまでは説明できているのが、このプロセスがどのような意味・語用環境において、発動されやすいのかという条件解釈はほとんどされていない。これについて、本節では前記の考察に基づいて、次の二つの「主観化制約」を提示する。

まず、求心型のテクレル、テクル、テシマウと遠心型のテヤル、テイク、テオクとの比較からは、方向性の違いによる次のような主観性制約が見られると考える。

主観化制約 1：求心性>遠心性

本動詞語彙における「求心性」の意味が、「結果性」「非意図性」「対自性」などと連動しているため、そこから出発した補助動詞は、話し手の主観的な態度を表現の意味に取り入れやすい。つまり、主観化されやすい。これに対して、「遠心性」は動詞事象の「行為性」「意図性」「対他性」などと連動しており、話し手の主観的な態度を表現の意味に取り入れられにくく、主観化されにくい。

この制約説は、求心型助動詞・補助動詞が遠心型助動詞・補助動詞よりも高い統語階層を獲得する（言い換えれば、述語動詞からより遠い）という結論にも結びつき、次のような補

¹¹⁷ 益岡 (1991) はモダリティ形式について、恒常的に主観性を表現するものと、客観的表現になり得るものを区別して、それぞれ「一時的モダリティ」、「二次的モダリティ」と呼び、前者が後者に比してより純粹なモダリティ要素であるとの指摘がある。

¹¹⁸ ある語彙や構造が文法的機能を果たすようになるプロセスである。

¹¹⁹ 文法化の過程について、他にも比喩、推論などの認知メカニズムが関与すると一般的に考えられている。

助動詞配列が可能（○）、あるいは不可能（×）・不活発（△）である事実を解釈することができる。【表 7-3】において、左側の「V+遠心+求心」の配列が全て成立するのに対して、右側の「V+求心+遠心」の配列は非文になる場合が多い。

【表 7-3】 助動詞¹²⁰・補助動詞配列順序の傾向

V+遠心+求心		V+求心+遠心	
行ってくる	○	来ていく	×
Vさせられる	○	Vられさせる	×/△
Vてやってくれる	○	Vてくれてやる	×/△
Vさせてもらう	○	Vてもらってさせる	×
Vておいてしまう ¹²¹	○	Vてしまっておく	○

次に、同じく求心型の範疇にあるテクレル、テクルとテシマウとの対照からは、求心性レベルの違いによる文法化の制約が生じると見られる。

主観化制約 2：物理的求心性>時的求心性

物理的求心性から出発した主観化は、直示の色合いが濃く、日本語のような話し手側領域と非話し手側領域を厳密に区別する言語においては、高い主観性を導入することができる。一方、時的求心性から出発した主観化は、人称対立がないために、動詞事象をより客観的に眺めるプロセスになっていおり、多くの言語において観察されている。

このように、本節では、補助動詞における文法カテゴリーの連関を考察して、本動詞の語彙的意味との関係から、モダリティ的意味成立のメカニズムを論じた。さらに、この考察によって、補助動詞の文法化（主観化）制約を提示した。

4. 本章のまとめ

以上、本章では、モダリティ的用法を持つ補助動詞テクル、テクレル、テシマウを取り上げ、それぞれの形式の補助動詞全体における位置付けを、本動詞の語彙的意味の分類から確認した上で、中心的な用法（ヴォイスやアスペクト）がいかんにしてモダリティ的用法に結びつくのかを考察した。その上、テシマウのモダリティ性とテクル・テクレルのモダリティ性

¹²⁰ 第4章では、受身助動詞レル・ラレルの求心的傾向を指摘した。なお、使役助動詞セル・サセルに関する考察はまだ行っていないが、ここでは、遠心的傾向があると仮定しておく。

¹²¹ 春巻きの皮が要冷蔵なの知らなくて、2日弱くらい常温で放ったらかしておいてしまった。

(Twitter 2019.10.13)

との比較を行い、両グループの文法化プロセスの違いを示した上で、それぞれの形式における異なった文法カテゴリーの接点を論じた。これにより、補助動詞体系の各形式の文法化の度合いの差異に注目して、二つの「主観化制約」を提示した。具体的な結論は次の3点に絞られる。

- 7-I 現代日本語のテクレル、テクル、テシマウ補助動詞構文においては、「ヴォイス → モダリティ」、「アスペクト → モダリティ」といった文法カテゴリーの連続性が見られる。これらの補助動詞はともに、本動詞における「方向性」の語彙的な意味が関与している。前接する動詞の多様性や構文意味の抽象性などから、「求心性」の意味を持つタイプが遠心性の意味を持つタイプより文法化が進んでいるという非対称性が窺える。
- 7-II 時的求心性に関与するテシマウはアスペクト的用法を経由して、モダリティ的用法を獲得し、動詞事象に対する比較的の主観性の弱い（つまり、話し手から切り離されても良い、あるいは、命題に近い）評価を表す。空間的「求心性」の意味に関与するテクルやテクレルは、ヴォイス的用法を経由して、モダリティ的用法を獲得し、話し手側からのより主観性の高い評価を表すことができる。アスペクト性と利害性のモダリティ性は、「終了事態を眺めている」点において共通している。ヴォイス性と利害性のモダリティ性は、「話し手側が自発的な事態を眺めている」点において共通している。
- 7-III 以上の考察より、筆者は二つの「主観化制約」を考察して、日本語における「主観化」や「文法化」の語彙的条件や語用論的条件を指摘した。「求心性」という語彙的な意味を持つものは、動詞事象の〔結果性〕〔-意図性（自分の意に反する、あるいは予測不可能）〕〔対自性（話し手側に対して作用する）〕に関わり、話し手の主観的な態度が表現の意味に取り入れられやすい（つまり、主観化されやすい）。反対に、「遠心性」という語彙的な意味を持つものは、動詞事象の〔行為性〕〔+意図性〕〔对他性（非話し手側に対して作用する）〕に結び付き、事象に対する話し手の主観的な態度が表現の意味に取り入れられにくい。こうした制約は現代日本語において格段に顕著であり、日本語の会話モード・視点構図に強く関わる。

いわゆるヴォイス、アスペクト、利害性のモダリティの文法カテゴリーは、端的に言えば、異なった次元の空間概念（物理的、時的、心理的方向性）における視点のあり様であり、現代日本語では「存在」、「移動」などという空間移動指示意味を持つ補助動詞を用いて、それらを表出する。また、このようなメカニズムからは、直示表現において文法化が浸透しや

すいという一般性（これは、時空間認識が人間の言語能力の基礎となっていることによると考えられる）や、現代日本語において求心型が優勢であるという特殊性を導き出すことができると思う。まとめると、次の表のようになる。

【表 7-4：補助動詞における文法カテゴリーと直示の関係】

直示レベル	空間	時間	心理
語彙の方向性	求心／遠心	求心／遠心	求心／遠心
意味領域	誘発／自発	終了／開始	受影／影響 ¹²²
文法カテゴリー	ヴォイス	アスペクト	モダリティ

【表 7-4】が示すように、現代日本語は、「空間移動」の意味を持つ動詞を用いて、テ形述語を多様な局面（主に、物理的、時的、心理的移動など）で抽象化させることができる。特に、利害性のモダリティに関わる文法機能の発達が直示の方向性に強く関わるため、いわゆる文法化や主観化のメカリズムは、日本語独自の会話モードと視点構図から求められる。

現代日本語には、中国語や英語などの言語と共通した文法化の方向性が見られる（例えば、空間性を持つ動詞が機能語化されやすい¹²³など）と同時に、局所的に異なった傾向も存在する。その原因について、文法内部の相互作用も否定できないが、言語使用者（共同体）の認知様式やコミュニケーション様式に由来する部分があると思う。

¹²² 取り消し線は該当用法、つまり「非話し手側へ影響を与える」といった用法が基本的に排除されることを意味する。

¹²³ 英語の動詞「go」が助動詞となり、「be going to」の形式で未来を表す（「Something bad is going to happen.」）。中国語の動詞「下去（下方に向かって移動していくことを表す）」が方向補語として、継続を表す（你要坚持下去！〈君は頑張っていかなければならない！〉）。

第8章 おわりに

本研究の最後に、3つの問題点及び各章で考察した内容を振り返って、本研究の全体的な目標として目指してきた「日本語の間接関与構文の成立や意味・機能特徴の統一的な説明」を示す。その上で、補助動詞の文法化条件などを論じることで日本語の特殊性（語用論的な条件によって、統語制限が解除される）を指摘し、今後の課題や展望について提示しておく。

1. 問題点の確認

本研究では、次の問題を提起した。

問題点1－ ヴォイスとしての間接関与構文の使用実態に関する記述が不十分である。

問題点2－ 間接関与構文の成立に関わる「無関係な事態の関与の統語的実現」の原理の説明がこれまでなされていない。

問題点3－ 助動詞・補助動詞の〈文法化〉を引き起こす条件の説明が十分になされていない。「受益」と「被害」の意味の発生背景及び間接関与構文における異なった文法カテゴリーの接点を説明する必要がある。

2. 各章の概要と問題点の回答

2.1. 各章の概要

まず、各章で考察した内容を振り返る。

第1章では、先行研究を踏まえながら、本論文の研究対象である「間接関与構文」の3つの側面の3つの問題点（1、ヴォイスとしての構文の使用実態に関する記述が不十分であること。2、間接関与構文の成立に関わる「無関係な事態の関与の統語的実現」の原理の説明が不十分であること。3、補助動詞の「文法化」を引き起こす条件の説明や、「受益」と「被害」の意味の発生背景及び一つの構文における異なった文法カテゴリーの接点の説明が不十分であること。）を提示し、研究・調査方法を紹介した。

第2章では、テクレル授受構文を中心に考察した。非意図的動詞事象の授受動詞構文化に焦点を当てて、求心型授受構文テクレル・テモラウと遠心型授受構文テヤルとの違いを中心に、語用論的な観点から考察した。考察の結果、I、非意図的動詞事象を構文化する際、主に授受の方向性の違いによって、非対称が生じる（つまり、求心型>遠心型）ことを用例調査によって検証した。II、求心型授受構文が比較的発達している原因について、本章では、授受動詞の分化に着目して、テクレル・テモラウの「求心的」意味と現代日本語の視点構図（話し手中心）や会話モード（視点の固定化）との相互作用によると指摘した。

第3章では、テクル移動構文について考察した。まず、移動系補助動詞用法に見られる「心理的移動構文」が、形式と意味の面において、二つの非対称性（I、形式の面ではテクルのみが発達しており、テイクの用法は発達していない。II、意味の面では意図的な動詞事象しか取れないか否かに差異が生じる。）があることを指摘した。次に、この二つの非対称

性に着目して、日本語の談話・語用論的な特殊性からその背景を説明した。一つ目の非対称性に関しては、既存の「逆行態」理論から解釈し、テクルの話し手側受け手標記機能を論じた。二つ目の非対称性に関しては、日本語の視点構図や主観性との関係から考察した。移動構文によって実現される間接的な事態に対する心的態度は、話し手側の視点から捉えやすく、非話し手側の視点から捉えることが語用論的な原則に違反することになると指摘した。

第4章では、間接受身構文について分析した。日本語の間接受身構文の研究では、「問題Ⅰ、間接的な事態の把握」、「問題Ⅱ、現代日本語の中で発達している背景」などの問題が残されている。本章では、用例調査から、間接受身構文の成立に関わる諸特徴を考察する上で、本構文が構文・意味レベルでの説明のみでは精密に捉えられないことを確認して、以上二つの問題を語用論的な観点から説明した。間接受身構文は、「事態」と「受け手」の間には格の関係が存在していなくても、両者の関係づけを主観的に把握できる。それは「方向性」と「私的領域」に関わる語用論的な原則から説明することができると述べた。また、間接受身構文は現代日本語で生産的に使用されているに対して、中国語などの言語ではほとんど発達していないことについて、各言語の視点構図の差異から解釈できると指摘した。

第5章は、第2章～第4章の総括に当たる。現代日本語では、第2章で紹介したテクレル授受構文、第3章で紹介したテクル移動構文、そして、第4章で紹介したレル・ラレル間接受身構文などの「間接関与構文」が発達している。本章では間接関与構文の諸特徴を確認した上で、「無関係な動詞事象の実現に対する話し手の把握」という統一的な枠組みで本構文の成立原理を分析した。まず、用例から見られる間接関与構文の構文的、意味・機能的、文体的な特徴を概観し、間接関与構文は話し手の心の中で、起こった事態についての評価を表出する文脈に限定されることを説明した。次に、間接関与構文の特徴を踏まえて、本構文の成立原理を「主観的把握」と助動詞・補助動詞の「方向性」の関係から解釈し、無関係な事態の主観的な関与は話し手側へ向かう「求心型」構文に適合することを指摘した。これにより、本研究の課題である問題点1と問題点2を解釈した。

第6章では、間接関与構文の意味内容及び発生の背景を確認し、本構文のモダリティ性について考察した。まず、間接受身構文の意味内容「利益」や「被害」を確認し、意味発生の背景を間接受身構文の通時的発達から考察した。間接関与構文は、「求心的（話し手へ向かう）」環境において、受け手への強制的な関与を表すことが可能になっている。この場合、「利益」や「被害」を受けるというよりも、話し手の言表事態に対する心的態度の表明としての運用が義務付けられていると考える。次に、本章では、間接関与構文のモダリティ性を価値判断（評価）的モダリティの一種——「利害性のモダリティ」と位置づけた上で、中国語との比較から、このようなモダリティ性が日本語で形成される二つの背景を論じた。

第7章では、一つの補助動詞における複数の文法カテゴリーの連関を論じた。まず、補助動詞の下位分類を行い、各文法カテゴリーが補助動詞の中で実現される原因を本動詞の語彙的意味から求めた。次に、いわゆるテシマウのモダリティ性と第6章で論じたテクル・テクレルのモダリティ性との比較を行い、両グループの文法化プロセスの違いを示した上で、

それぞれの形式における異なった文法カテゴリーの接点を説明した。最後に、補助動詞内部各形式の文法化の度合いの差異を二つの「主観化制約」によって解釈した。

2.2. 問題点の解釈

これまで記述してきたことをまとめ、間接関与構文に纏わる問題と日本語補助動詞の文法カテゴリーについて改めて考える。

問題点 1 について、①、参加者の受け手に関しては、心理的述語のように、人称制限があり、ほとんど一人称を対象とする。②、先行研究で指摘されているテクレル、テクル、レル・ラレルの非能格性制限（つまり、非能格動詞と他動詞のみに接続する）に反して、非対格動詞（本稿の非意図的動詞に相当する）を前接する構文も発達していることが本研究で明らかになった。③、典型的なヴォイス構文と異なって、間接関与構文は文体の偏りがある。主に口語体で使用されており、不特定な人に向けて書かれた文章ではほとんど出現しない。言い換えれば、文脈の依存度が極めて高い構文であることが調査で分かった。

問題点 2 について、間接関与構文の成立は、「独立した動詞事象の実現に対する話し手の把握」という統一的な枠組みから説明できる。助動詞・補助動詞の「方向性」に着目すると、「求心型」（話者側に向かうタイプ）と「遠心型」（非話者側に向かうタイプ）の文法化には度合いの差があることが本研究の調査で明らかになった。「事態」と「受け手」の間に、統語的な関係が存在していなくても、両者を関係づけるためには主観的な把握が必要である。そこで、話し手側へ向かう「求心型」は一人称側を把握主体（認識・知覚する主体）にするため、この条件に合致する。さらに、日本語における一人称視点の主観性が特に高い原因は、現代日本語「話し手中心」の視点構図（FPS 視点構図、事態の中に身を置き、事態を直接体験する）や事態把握の傾向（他言語に比べて、話し手の視点が容易に移入されるために、関係の薄い事柄でも主観的に把握することができる）に帰せられる。これらの結論は、それぞれ第 2 章（間接受身構文）、第 3 章（間接的授受構文）、第 4 章（間接的移動構文）、第 5 章において示されている。

問題点 3 について、本研究では①、間接受身構文の意味内容「利益」や「被害」を確認し、意味発生の背景を間接受身の通時的発達から考察した。間接関与構文は、話し手側と非話し手側の区分化に伴って、「求心的」な環境において、受け手への強制的な関与を表すことが可能になっていると指摘した。②、助動詞・補助動詞の〈文法化〉を引き起こす原理について、本研究では補助動詞の下位分類を行い、本動詞の語彙的意味から求めた。その結果、いわゆるヴォイス、アスペクト、モダリティの文法カテゴリー性の発達は本動詞の語彙の方向性によって解釈できると指摘し、二つの文法化制限を提示した。問題点 3 の結論は、主に第 6 章と第 7 章で示されている。

2.3. 本研究の意義

以上のように、本研究では、間接関与構文の成立を切り口として、動詞が機能語化するための語彙的な条件（方向性）と語用論的な条件（話し手中心の視点構図の形成）を統一的に説明した。本研究の理論的意義は以下の4つにまとめられる。

- ① 用例調査をもとに、ヴォイスと関わる助動詞・補助動詞の「周辺の」な用法の構文、意味・機能的な特徴を統一的な枠組みから記述した。
- ② 語用論的な観点から、従来統語論的なアプローチで十全に説明されていない「意味統合」の条件を説明した。
- ③ 日本語の補助動詞全体に関して、本動詞の語彙の意味や語用論的な特徴から、新たな文法化の制限を提示した。
- ④ 中国語との比較を通じて、日本語の類型論的な位置づけを助動詞・補助動詞の側面から示した。

3. 今後の課題

最後に、本研究の課題や、今後の第二言語教育にどのように活かしていくかということをもとめたい。

3.1. 本研究の課題

本研究の間接関与構文に関する記述は、助動詞・補助動詞の発達や日本語文法化の特徴の解明につながることを期待されるが、体系全体の解明に至る過程には、依然として課題が山積している。以下、筆者が認識している今後の課題をまとめる。

① 非意図的用法の歴史的な変遷

非意図的用法の歴史的な変遷を実証的に調査・記述することが必要であるほか、現代語のような会話モード（視点の固定化）、話し手中心の視点構図（つまり、話し手の視点に立って事態を眺める構図）の背景をさらに詳しく分析する必要がある。この点については、敬語体系との連動、例えば、「内低外高」と「自他分離」や「利益被害」との関係が考えられよう。また、補助動詞の歴史的変遷に関して、非テ形用法との関係などの問題も残っている。各補助動詞の横断的意味調査を続けて、具体的な検証を今後の課題にしたい。

② 方向性の非対称性の解消

次に、いわゆる非対称性の解消に注意する必要がある。第3章でも触れたように、ツイッターの用例調査からは、次のような心理的移動構文に近似するテイクの新規用法(1)(2)(3)が僅かながら出ている。

- (1) 性暴力にも、ヘイトにも、誰もが全力で怒っていく、そんな社会にしていきたい。それを目指さないでこの話をしていても意味がない。

(Twitter 2019.03.06)

- (2) 帰るって時に雨がばちこり降っていく~

(Twitter 2020.05.28)

- (3) 採用してくれそうなところ自分から断っていった

(Twitter 2018.05.17)

一部の日本語母語話者の間で内省判断に揺れが生じるように、規範性の低い運用ではあるが、遠心的領域でのモダリティの用法の萌芽とも認められよう。遠心的用法の発達動向は、本研究で唱えてきた方向性の非対称性の解消を意味し、日本語「話し手中心」の構図が何らかの影響（言語接触など）で変化しつつあることを裏付ける。

③ 複合動詞との比較

さらに、複雑述語¹²⁴全体における補助動詞の特徴を捉える必要がある。なぜなら、本研究で論じた時的求心性や遠心性を表すアスペクト的形式には、他にも一部の複合動詞や、連用形につく動詞（V 終える、V 終わる、V 始める、V 続ける、V 出す...）があるが、次の用例のような状況描写文、即ち客観的に事態を捉える用法以外に、話し手の心的態度を規則的、生産的に表現するものはほとんど見当たらない。

- (4) 雨が降り始めた。／雨が降り出した。（動作の開始）

- (5) 雨が降り続けている。（動作の継続）

- (6) 本を読み終わった／本を読み終えた。（動作の完遂）

つまり、同じく語彙においては時的方向性の意味などが内包されているが、テ形補助動詞に比べて非テ系の文法化がさほど進んでいない。その原因について、V1 と V2 の間に挿入成分がない複合動詞や非テ形は、語彙の緊密性¹²⁵が比較的高く、両動詞が一つの纏まった

¹²⁴ 複数の動詞が結合して全体として一つの機能を果たしているとみなすことができる構造をいう。

¹²⁵ 影山（2013：44）は「日本語の「動詞連用形+動詞」型の複合動詞には3つのカテゴリーが共存している」と指摘している。（なお、下記アスペクトという用語について、影山2013は動作のあり方、進め方、様態などと、広い意味で捉えていることに注意）

語彙的な主題関係複合動詞（V1 と V2 が直接結合する）

語彙的なアスペクト複合動詞（V1 と V2 が直接結合する）

統語的なアスペクト複合動詞（V2 は、V1 を主要部とする動詞句を取る）

テ形補助動詞の場合はさらに、V1 と V2 の形態的緊密性が弱く、上記三つよりも下に位置付けられよう。つまり、V2 が最も周辺的な位置に移動し、V2 が選択する対象が句全体の範疇である。

「語彙的な事象」として捉えられやすいため、テ形補助動詞のように、V2による「文脈的な事象」を生じさせないことが考えられる¹²⁶。これについては語構成の知見から詳しく捉える必要があるが、今後の課題とする。

3.2. 第二言語教育への展開

第二言語教育において、学習者に言語間の構文、意味的特徴の差異について説明することの必要性は言を待たないが、背後にある母語話者の発想様式の違いに対する理解も非常に重要である。求心型と遠心型の使用の非対称性に着目した本研究では、言語表現とそれを用いる使用者や文脈との関係を重視するアプローチにより、現代日本語助動詞・補助動詞の発達（あるいは、文法化）の深層的な要因の一端を説明することができた。間接関与構文の諸特徴を「話し手中心」視点という日本語独特な性質（これは、根本的には、言語集団の認知モードやコミュニケーションモードに基づいている。）に結びつけることで、会話の「場」を重視する文法指導法へ寄与することが期待される。更に、他言語との比較を通じて、日本語が世界中の言語の中でどのような特徴を持ち合わせているのかという個別性の一端をも解明することで、学習者の理解に繋ぐことができると考える。

¹²⁶ この点について、歴史上非テ形の補助動詞（Vクル、Vクレルなど）におけるモダリティ的な意味の未発達が証拠になろうが、実証的な調査が必要である。

<参考文献>

- 青木博史 (2013) 「複合動詞の歴史的変化」『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』
影山太郎 (編) pp.215-241 ひつじ書房
- _____ (2019) 「補助動詞の文法化：「一方向性」をめぐる」『日本語文法』19 巻 2 号
pp.18-34 日本語文法学会
- 天野みどり (1991) 「経験的間接関与表現：構文間の意味的密接性の違い」『日本語のヴォ
イスと他動性』 pp.191-210 くろしお出版
- 池上嘉彦 (1982) 「表現構造の比較：〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語」『日英語比
較講座 第4巻 発想と表現』 國廣哲彌 (編) pp.67-110 大修館書店
- _____ (2003) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」『認知言語
学論考 (3)』 山梨正明他 (編) pp.1-49 ひつじ書房
- _____ (2006) 「〈主観的把握〉とは何か：日本語話者における〈好まれる言い回し〉」
『言語』35 (5) pp.20-27
- _____ (2011) 「日本語と主観性・主体性」『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』澤
田治美 (編) pp.49-67 ひつじ書房
- _____ (2012) 「〈言語の構造〉から〈話者の認知スタンス〉へ：〈主客合一〉的な事態
把握と〈主客対立〉的な事態把握」『国語と国文学』第89巻第11号 pp.3-17 明治書院
- 井上優 (2006) 「モダリティ」『シリーズ方言学2 方言の文法』小林隆 (編) pp.137-178 岩
波書店
- 一色舞子 (2016) 「「-おく」の歴史的変遷：韓国語「-twuta」との対照を視野にいれて」
『日本語文法史研究3』青木博史・小柳智一・高山善行 (編) ひつじ書房
- 今仁生美 (1990) 「V テクルと V テイクについて」『日本語学』第9巻第5号 pp.54-66 明
治書院
- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究：主観性をめぐって』 南雲堂
- 大河内康憲 (1983) 「日・中語の被動表現」『日本語学』2巻4号 pp.31-38 明治書院
- 岡田祥平 (2013) 「Twitter を利用した新語・流行語研究の可能性：アイドルグループ「Sexy
Zone」の略語を例に」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第6巻第1号
pp.49-74
- _____ (2019) 「一語からはじめる SNS のことばの研究：SNS の「特性」と先行研究か
ら、その可能性を考える」『日本語学』第38巻第4号 pp.31-51
- 奥津敬一郎 (1983) 「何故受身か？：〈視点〉からのケース・スタディ」『国語学』第132
集 pp.65-80 国語学会
- 荻野千砂子 (2007) 「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』3 (3) pp.1-16
- 荻野綱男 (2007) 「コーパスとしての WWW 検索の活用」『月刊言語』(36) 7 pp.26-33
大修館書店

- _____ (2017) 「新語の普及過程をツイッターで調べるには」『日本語学』(36) 10 pp.34-41 明治書院
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』 くろしお出版
- _____ (2013) 「語彙的複合動詞の新体系：その理論的・応用的意味合い」影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』 pp.3-46. ひつじ書房
- 風間伸次郎 (2011) 「テーマ企画：特集 モダリティ」『語学研究所論集』第 16 号 pp.29-55 東京外国語大学
- 川村大 (2009) 「古代日本語における受身表現」『語学研究所論集』第 14 号 pp.97-111 東京外国語大学
- _____ (2012) 『ラル形述語文の研究』 くろしお出版
- 木村英樹・楊凱榮 (2008) 「授与と受動の構文ネットワーク：中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論」『ヴォイスの対照研究：東アジア諸語からの視点』 pp.65-91 くろしお出版
- 木村雅則 (2001) 「しまう」『日本語文法大辞典』山口明穂・秋本守英 (編) 明治書院
- 金水敏 (2004) 「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」『日本語の分析と言語類型：柴谷方良教授還暦記念論文集』 影山太郎・岸本秀樹 (編) pp.47-56 くろしお出版
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X (文学 4) pp.63-90. 『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦 (編) 1976 むぎ書房
- _____ (1988) 『日本語』岩波新書
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- 工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (編) pp.161-234 岩波書店
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- _____ (1978) 『談話の文法』大修館書店
- _____ (1983) 「中立受身文と被害受身文」『新日本語文法研究』大修館書店
- _____ (1986) 「受け身の意味－黒田説の再批判－」『日本語学』5 卷 2 号 pp.70-87 明治書院
- 黒沢晶子 (2012) 「「てしまう」のモダリティ性と日本語教育における課題」『モダリティと言語教育』 富谷玲子・堤正典 (編) pp.39-61. ひつじ書房
- 玄宜青 (1992) 「現代中国語におけるモダリティを担う副詞的成分」『中国語学』239 号 pp.47-56
- 古賀裕章 (2008) 「「てくる」のヴォイスに関連する機能」『ことばのダイナミズム』森雄一・米山三明・山田進・西村義樹 (編) pp.241-257 くろしお出版

- 近藤泰弘 (1985) 「補助動詞「てゆく」「てくる」の用法：<視点の補助動詞>研究序説」『日本女子大学紀要文学部』34 pp.25-34 日本女子大学
- _____ (1986) 「敬語の一特質」『築島裕博士還暦記念国語学論集』 明治書院
- 坂原茂 (1995) 「複合動詞「Vて来る」『言語・情報・テキスト』2 pp.109-143 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
- _____ (2012) 「アスペクト表示の複合動詞「Vて来る」と空間時間メタファ」『国語と国文学』第89巻第11号 pp.53-62. 明治書院
- 佐藤琢三 (2015) 「補助動詞テオク：意味・語用論的特徴と学習者の問題」『文法・談話研究と日本語教育の接点』阿部次郎、庵功雄、佐藤琢三 (編) pp.1-18. くろしお出版
- 澤田淳 (2009) 「移動動詞「来る」の文文化と方向づけ機能：「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ」『語用論研究』11 pp.1-20. 日本語用論学会
- _____ (2011) 「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』澤田治美 (編) ひつじ書房
- _____ (2014) 「日本語の授与動詞構文の構文パターンの類型化：他言語との比較対照と合わせて」『言語研究』145 pp.27-60 日本言語学会
- _____ (2016) 「日本語の直示移動動詞「行く／来る」の歴史：歴史語用論的・類型論的アプローチ」山梨正明他 (編) 『認知言語学論考 No.13』 pp.185-259 ひつじ書房
- 柴谷方良 (1989) 「日本語の語用論」『講座日本語と日本語教育 (4) 日本語の文法・文体 (上)』 北原保雄 (編) pp.388-410 明治書院
- _____ (1997) 「「迷惑受身」の意味論」『日本語文法：体系と方法』川端善明・仁田義雄 (編) ひつじ書房
- _____ (2000) 「ヴォイス」『日本語の文法1 文の骨格』仁田義雄・益岡隆志 (編) 岩波書店
- 島袋幸子 (2009) 「沖縄県今帰仁村謝名方言の動詞と形容詞」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』 沖縄大学人文学部
- 清水啓子 (2010) 「日本語「動詞+てくる」構文の逆行態用法について」『熊本県立大学文学部紀要』16 pp.47-75 熊本県立大学文学部
- 施葉飛 (2020a) 「日本語授受動詞構文の非対称性：非意志的事象の構文化を中心に」『中央大學國文』第63号 pp.215-232 中央大学国文学会
- _____ (2020b) 「間接受身文の語用論的研究：日本語文脈構築の特殊性から」『人文研紀要』第95号 pp.207-244 中央大学人文科学研究所
- _____ (2021a) 「日本語心理的移動構文の非対称性」『大学院研究年報』第50号 pp.237-250 中央大学
- _____ (2021b) 「日本語の間接関与構文について」『人文研紀要』第99号 pp.165-198 中央大学人文科学研究所

- 杉村博文 (2003) 「従日本語角度看漢語被動句的特点」『言語文字運用』第2期 pp.64-76 教育部言語文字応用研究所
- 杉本武 (1991) 「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』4 pp.109-126
- _____ (1992) 「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ (2)」『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』5 pp.61-73
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 鈴木丹士郎 (1972) 「動詞の問題点」『品詞別日本文法講座3 動詞』 明治書院
- 住田哲郎 (2011) 「移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能」博士論文 神戸大学
- 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ 現代日本語における記述的研究』くろしお出版
- 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦 (編) 1976 むぎ書房
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文：生成文法分析の批判と機能的分析』 研究社
- 田窪行則 (1990) 「ダイクシスと談話構造」『講座日本語と日本語教育 12 言語学要説 (下)』 pp.127-147 明治書院
- 田中ゆかり (2003) 「ネット検索は言語の研究に有用か」『日本語学』(22) 5 pp.111-123 明治書院
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
- _____ (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 當山奈那 (2015) 『沖縄首里方言におけるヴォイスと利益性の記述文法研究』 博士論文 琉球大学
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」中村芳久 (編) 『認知文法論Ⅱ』 pp.3-51. 大修館書店.
- 仁田義雄 (1988) 「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』17-5 pp.34-37 大修館書店
- _____ (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』 pp.1-56 くろしお出版
- _____ (2002) 「日本語の文法カテゴリー」飛田良文・佐藤武義 (編) 『現代日本語講座5』 明治書院
- _____ (2009) 『日本語のモダリティとその周辺』 ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法②』 くろしお出版
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『日本語の文法4：複文と談話』 岩波書店
- 早津恵美子 (2019) 「日本語のヴォイス」『語学研究所論集』第24号 pp.1-16 東京外国語大学語学研究所

- 藤井由美 (1992) 「『てしまう』の意味」『ことばの科学 5』 言語学研究会 (編) pp.17-40 むぎ書房
- 堀口和吉 (1983) 「〈はた迷惑の受け身〉考」『山辺道』二七 pp.37-48 天理大学国文学研究室
- _____ (1990) 「競合の受身」『山辺道』三四 pp. 31-40 天理大学国文学研究室
- 益岡隆志 (1979) 「日本語の経験的間接関与構文と英語の have 構文について」『英語と日本語と：林栄一教授還暦記念論文集』仁田義雄 (編) pp.345-358 くろしお出版
- _____ (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- _____ (1992) 「表現の主観性と視点」『日本語学』11 卷 9 号 pp.28-34 明治書院
- _____ (1997) 「表現の主観性」『視点と言語行動』 田窪行則 (編) pp.28-34 くろしお出版
- _____ (2007) 『日本語モダリティ探究』 くろしお出版.
- _____ (2013) 『日本語構文意味論』 くろしお出版
- 三上章 (1953/1972) 『現代語法序説：シンタクスの試み』 刀江書院 1972 年増補復刊 くろしお出版
- 三宅知宏 (2015) 「日本語の「補助動詞」と「文法化」・「構文」」『日英語の文法化と構文化』 秋元実治・青木博史・前田満 (編) pp.237-270 ひつじ書房
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館
- 宮腰幸一 (2014) 「日本語ヴォイスの統合的・系列的多重構造：予備的考察」『論叢：現代語・現代文化』12 pp.1-85.
- 宮下幸博 (2006) 「文法化研究とは何か」『Travaux du Cercle linguistique de Waseda』10 pp.20-47
- 宮地裕 (1965) 「やる・くれる・もらうを述語とする文の構造について」『国語学』第 63 集 pp.21-33 国語学会
- 村上三寿 (1986) 「やりもらい構造の文」『教育国語』84 pp.2-43 むぎ書房
- 村木新次郎 (1991) 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』 仁田義雄 (編) pp.1-30 くろしお出版
- 森田良行 (1968) 「「行く・来る」の用法」『国語学』第 75 号 pp.75-87 国語学会
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 森勇太 (2010) 「移動を表さない「-てくる」の成立：受益表現「-てくれる」との関連から」『待兼山論叢 文学篇』44 pp.1-16
- _____ (2016) 『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』 ひつじ書房
- 梁井久江 (2009) 「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5-1 pp.15-30. 日本語学会
- 山口響史 (2017) 『受益・受害構文の歴史的研究』 博士論文 名古屋大学

- _____ (2018) 「近世を中心とした受身文の歴史: 非当事者の受身の発達とその位置づけ」
『日本語文法』18巻2号 日本語文法学会
- 山田敏弘 (1999) 「テモラウ受益文の働きかけ性をめぐって」『阪大日本語研究』11 pp.37-57 大阪大学
- _____ (2000) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 (1) ベネファクティブの視点の位置と方向性」『日本語学』19 (13) pp.94-103 明治書院
- _____ (2004) 『日本語のベネファクティブ: 「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』 明治書院.
- _____ (2006) 「文法カテゴリーとしての『方向性』とその談話機能」『日本語文法の新地平3 複文・談話編』 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) くろしお出版
- 山本裕子 (2002) 「『～テクレル』の機能について: 対人調節的な機能に注目して」『言葉と文化』3 pp.127-144 名古屋大学国際言語文化研究科
- _____ (2007) 「〈主観性〉の指標としての『～テイク』『～テクル』」『中部大学人文学部研究論集』 第17号 pp.67-81
- 楊凱榮 (1989) 「文法の対照研究: 中国語と日本語」『講座日本語と日本語教育第5巻 日本語の文法・文体 (下)』 明治書院
- 鷲尾龍一 (1997) 「第I部 他動性とヴォイスの体系」『ヴォイスとアスペクト』 中右実 (編) pp.1-106 研究社出版
- 由井紀久子 (1996) 「日本語動詞の意味の抽象化過程: イク・クル・ミルの意味分析を中心に」『大阪大学文学部紀要』 第36巻 pp.1-29 大阪大学文学部 (編)
- _____ (1997) 『日本語動詞における意味の抽象化過程の研究: 補助動詞用法を持つ動詞の意味分析』 大阪大学博士論文
- 吉川武時 (1971) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』 金田一春彦 (編) (1976) むぎ書房刊
- 王力 (1943/2014) 『中國現代語法 (上册)』 商務印書館 2014年版 中华书局
- 戴浩一 (1988) 「時間順序和汉语的语序」『国外语言学』第一期 黄河 (訳) pp.10-20
- Givón, Talmy. 1971. Historical syntax and synchronic morphology: an archaeologist's field trip. In: Chicago Linguistic Society 7, pp.394-415.
- Langacker, Ronald W. 1985. Observations and speculations on subjectivity. In: Iconicity in syntax, ed. John Haiman, pp.109-50. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1991. Subjectification. In: Cognitive Linguistics 1, pp.5-38.
- Langacker, Ronald W. 2000. Subjectification and grammaticalization. In: Langacker, Ronald: Grammar and conceptualization, pp.297-315. Berlin/New York: de Gruyter
- Shibatani, Masayoshi. 2003. Directional verbs in Japanese. In: Motion, Direction, and Location in Language: In Honor of Zygmunt Frajngier, ed. by Erin Shay, and Uwe Seibert, pp.259-285. John Benjamins

Wierzbicka, A.1988. The Semantics of Grammar. John Benjamins

<辞書類>

日本大辞典刊『日本国語大辞典 第二版』小学館オンライン版
国立国語研究所（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書

【用例検索】

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

国立国語研究所『「中納言」包括的検索系（β版）』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/integrated/>

通時的調査には、国立国語研究所『日本語歴史コーパス CHJ』を利用した

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>

Twitter の「高度な検索」

<https://twitter.com/search-advanced>

北京语言大学大数据与语言教育研究所『BCC 语料库』

<http://bcc.blcu.edu.cn>

初出一覧

各章の元となる論文の初出は以下の通りである。

第1章：書き下ろし

第2章：施葉飛（2020b）「日本語間接関与構文の非対称性：主観的授受構文を中心に」
『中央大學國文』第63号 pp.215-232

第3章：施葉飛（2021a）「日本語心理的移動構文の非対称性」『大学院研究年報』第
50号 pp.237-250

第4章：施葉飛（2020a）「間接受身文の語用論的研究：日本語文脈構築の特殊性から」
中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第95号 pp.207-244

第5章：施葉飛（2021b）「日本語の間接関与構文について」中央大学人文科学研究所
『人文研紀要』第99号 pp.165-198

第6章：書き下ろし

第7章：日中対照言語学会9月例会（Web開催・2021年9月）で口頭発表した内容に加
筆修正を施したものである。

第8章：書き下ろし